2020 年度名古屋大学大学院文学研究科

学位（課程博士）申請論文

近世の白話小説訓訳本に関する日本語史的研究

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻日本文化学専門

馬　静雯

2020 年 6 月

目次

凡例.....iv

序章.....1

1、本研究の背景.....1

2、「訓訳」「訓訳本」の定義.....3

3、「訓訳」に関する先行研究及び本研究の目的.....5

4、本研究で使用する調査資料.....7

5、本研究の内容.....10

第1章　白話小説の訓訳本と訓訳者.....12

1、はじめに.....12

2、近世における白話小説訓訳本.....12

3、訓訳本『覚後禅』の刊行時期と訓訳者.....14

3.1　問題提起.....14

3.2　訓訳本『覚後禅』の刊行時期.....17

3.3　訓訳本『覚後禅』の訓訳者.....20

4、訓訳本『照世盃』の訓訳者.....23

5、近世期の訓訳者の交際.....24

6、まとめ.....26

第2章　近世の白話小説訓訳本の全体的な特徴.....27

1、はじめに.....27

2、訓訳本における右訓の特徴.....27

2.1　伝統的な訓読表現の使用.....27

2.2　新たな表現の出現.....29

3、訓訳本における左訓の特徴.....32

3.1　訓訳本の左訓に見られる「時代性」.....32

3.2　訓訳本の左訓に見られる「地域性」.....36

3.3　訓訳本における文レベルの左訓.....38

４、訓訳本における二重の言語表現体系.....40
５、おわりに.....46

第３章　近世の白話小説訓訳本に見られる過去・完了の助動詞「タ」について.....47
１、はじめに.....47
２、訓訳本の右訓における過去・完了の助動詞「タ」の使用状況.....47
2.1　訓訳本の右訓における過去・完了の助動詞の全体像.....48
2.2　訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」の使用状況.....48
2.3　訓訳本の右訓における「タリ」の使用状況.....49
３、訓訳本と同時期の口語資料における過去・完了の助動詞「タ」「タリ」の使用状況.....52
3.1　訓訳本の左訓における「タ」「タリ」の使用状況.....52
3.2　噺本における「タ」「タリ」の使用状況.....56
４、まとめ――「タ」から見る訓訳本の右訓の性格.....58

第４章　近世の白話小説訓訳本に見られる文末表現「ジャ」について.....59
１、はじめに.....59
２、本章で取り扱う調査資料.....61
３、訓訳本『照世盃』に見られる「ジャ」の使用状況と特徴.....61
3.1　『照世盃』の右訓に見られる「ジャ」の使用場面と使用者.....61
3.2　『照世盃』の右訓に見られる「ジャ」以外の文末表現の使用状況.....63
3.3　『照世盃』の左訓に見られる「ジャ」の使用状況.....66
４、『照世盃』と同時期の口語資料に見られる「ジャ」と「ナリ」.....67
4.1　『照世盃』以外の訓訳本の左訓に見られる「ジャ」と「ナリ」.....67
4.2　噺本に見られる「ジャ」と「ナリ」.....68
５、まとめ――「ジャ」から見る訓訳本の右訓の性格.....71

第５章　近世の白話小説訓訳本に見られる終助詞「ヨ」について.....73
１、はじめに.....73
２、本章で取り扱う調査資料.....73
３、訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の出現.....73

４、訓訳本「和刻三言」の右訓における終助詞「ヨ」の用法.....75
4.1　中国語の助字「哩」の用法.....75
4.2　訓訳本「和刻三言」における「哩」の種類.....77
4.3　「哩」の訓読語としての「ヨ」の使用状況.....78
５、同時期の口語資料における終助詞「ヨ」との比較.....81
６、まとめ――「ヨ」から見る訓訳本の右訓の性格.....85

終章　まとめと今後の課題.....86
１、本研究のまとめ.....86
２、今後の課題.....89

調査資料と参考文献.....91

初出一覧.....95

凡例

一、年の表記は、和暦の後にカッコ内で西暦を示す。

二、文献・資料等の引用においては、漢字、仮名の異体字はできるだけ原文の通りに示す。対応の漢字がない場合、現行の字体に改める。合略仮名を一般的な仮名に改める。また、引用の本文中の傍線などは基本的に省略し、適宜、句読点・引用符などを補う。

三、注は頁の下部に記す。また、注番号、用例番号、表番号は章ごとに振り直す。

四、参考文献は、本文においては「著者名(発行年)」の形で示す。題目などの詳細は本研究末尾の「参考文献」欄にまとめて記す。

五、本研究は横書きであるため、漢文訓読資料の例文について、以下に示すように、中国語の原文の右側にあるものを上側、原文の左側にあるものを下側に置くこととする。

［例］

又一個ハ道、只_怕這ノ_雪還テ要スルレ大ヲ哩。

「奇言」巻四・二十一ウ

➡　又一個ハ道、只_怕這ノ_雪還テ要スルレ大ヲ哩。　「奇言」巻四・二十一ウ

序章

１、本研究の背景

白話小説とは、主に明清の口語体で書かれた小説のことを指している。江戸時代、『水滸伝』『今古奇観』『金瓶梅』をはじめ、白話小説を含んだ俗文学の作品が大量に日本に輸入された。そのような俗文学に対して、石崎(1967)は以下のように指摘した。

> 従来彼我共に小説・戯曲の類は稗史小説或は俗文學として一向に斥けられて、文學は専ら詩賦文章を以て正宗雅馴とせられてゐた。…(中略)…我が近世に於ける一般漢學者が小説稗史を目して學者大人の讀むを憚り、聖教を毒する俗文學として排斥したことは勿論であるが、間には例の教訓に名を籍り方便に托し、或は博學にまかせて渉獵するものも次第に現はれた。[1]

以上のように、江戸時代の知識階層はほとんど俗文学に対して排斥の態度を示していたが、中には白話小説を含む俗文学に関心を持つ者もいた。特に岡島冠山、荻生徂徠等がその代表的な人物である。

十七世紀中ごろ以降は、漢文の黄金時代であり、出版文化が栄えた時代でもある。また、朱子学の正学[2]化、及び古学や古文辞学の台頭などが起こってきた。そのような時代背景の中で十八世紀には、長崎で唐通事をしていた岡島冠山が江戸に出て、荻生徂徠ら護園学派の人々が開いた唐話学の講習会「訳社」の講師となった。そして、唐話[3]、俗文学を上方や江戸に持ち込み、唐話学及び白話小説の普及に努力した。

白話小説を含む俗文学は、正統的な文学(漢詩、漢文など)から排除されたが、日本近世の文学界に大きな影響を与えたことは否定できない事実である。石崎(1967)によって、

> 支那俗文學が與へた影響として國文學界では遊里評判記、或は俳文等も考へられるが、戯文としての洒落本及讀本の発生を擧げねばならない。ここに新しい形式の小説は京坂に於ける俗文學者の間から生れたのであつた。更に支那笑話の翻譯及漢文笑話の刺

---

[1] 石崎(1967)：七-八

[2] 寛政改革の一環で行われた寛政異学の禁では、朱子学を正学とし、それ以外の古学派・古文辞学派・折衷学派などを異学とし、幕府の教育機関での教育を禁じた。

[3]「唐話」と「白話」の区別について、村上(2015：244)は、「唐話とは当時の現代中国語のこと、中国俗語とも言う。白話とは文言、つまり書きことばに対するもので、口語をもとにした近世および現代の書面語」と指摘している。

載に依つて江戸笑話及落語が勃興した。化政前後の江戸文學はこれ等各種の俗文學との交渉により更に發展して行つた[4]

と指摘されたように、中国明清時代の俗文学作品は、日本における近世の洒落本、読本、笑話、落語などの発生、発達に深く関わっている。しかし、江戸時代には、白話に詳しい者が寥々であった。近世中期の儒学者室鳩巣が白話について、「俗語は字義にて不レ参者にて候、前後の文段にて料簡仕候へば、大方通じ申儀も有之候へども、夫は推量と申物」[5]と述べている。当時は、白話に詳しくない一般の者が、中国の俗文学に興味を持っていても読めない状況であった。そこで、白話小説の翻訳が必要となる。

岡山(2011)によると、日本で白話小説は、「白話から和刻、翻訳、翻案、そして読本」[6]という五つの段階を経て受容されていた。岡山(2011)でいう「白話」はすなわち「原書」のことである。「和刻」は『忠義水滸伝』(初集 1728 年刊、二集 1759 年刊)のような中国語の原文に訓点を付ける、つまり「訓読」のことである。そして岡山(2011)では、「翻訳」は漢字カタカナまじり漢文訓読調で白話小説を訳したものを指し、本研究では「通俗訳」と呼ぶ。また、本研究でいう「翻訳」は中国語の文章を日本語に置き換えて表すことである。「通俗訳」の代表作としては『通俗忠義水滸伝』(1757～1790 年)、『通俗隋煬帝外史』(1760 年)、『通俗赤縄奇縁』(1761 年)、『通俗醒世恒言』(1790 年)などがあげられる。「翻案」とは、「ストーリーはそのまま借りながら、場所は日本、人物も日本人にしてしまい、それにともなって話にも適当な調整を加えたもの」[7]のことである。例えば、建部綾足の王朝物語風『本朝水滸伝』(1773 年)、伊丹椿園の室町時代設定の『女水滸伝』(1783 年) などである。また、「読本」は、「翻案ものがさらに内容のあるものへ、翻案以上のものへと変貌を遂げ」[8]たものであり、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』(1814～1842 年) はその代表作である。以上述べた五つの段階の中で、江戸時代、白話小説の (本研究でいう) 翻訳に当たる方法には「訓読」と「通俗訳」の二種類がある。訓読された白話小説をさらに分類すると、原文の意味を解釈するための分かりやすい言葉が文字の左側に付いている「訓訳本」と、それが付いていない「訓点本」に分けられる。

「通俗訳」についての研究が盛んに行われているのに対し、白話小説の訓読については研究成果が少なく、不明な点がまだ多く存在している。そのため、本研究の注目点を「訓読」、

---

[4] 石崎(1967):九
[5] 石崎(1967):八
[6] 岡山 (2011):43
[7] 高島 (1991):48
[8] 岡山 (2011):38

特に「訓訳」に置くようにする。「訓訳」「訓訳本」の定義について、次節では詳しく検討する。

２、「訓訳」「訓訳本」の定義

「訓訳」という言葉について、『国語学研究事典』(1977 年、明治書院)、『国語学大辞典』(1980 年、東京堂)、『国語大辞典』(1981 年、小学館)、『角川書店大辞典(蔵書版)』(1983 年、角川書店)、『大辞林　第二版』(1995 年、三省堂)、『広辞苑　第五版』(1998 年、岩波書店)、『訓点語辞典』(2001 年、東京堂)、『日本国語大辞典　第二版』(2000～2002 年、小学館)、『日本語学研究事典』(2007 年、明治書院)、『日本語大事典』(2014 年、朝倉書店)などの辞書を調査した結果、『日本国語大辞典』以外の辞書には、「訓訳」という項目が見られなかった。だが、『日本国語大辞典』における「訓訳」の意味は、「文字や文章の意味を解きあかすこと。またそのよみ方。訓釈。」[9]であり、本研究でいう翻訳形式としての「訓訳」とは異なる。先行研究では「訓訳」「訓訳本」について次のように定義されている。

> 訓読と同じ形式であるけれども、必要な語の左側に俗語の注を加えたものを「訓訳」という。(中村 1968：274)

> 白話やむずかしい語には字の左側に俗語訳を付し、全体に句読訓点をほどこしたのが訓訳である。(中村 1973：10)

> 訓訳とは、原文に返り点、送り仮名を付け、漢字の右側に振り仮名を、またところどころ漢字の左側にも単語やフレーズの意味を付けたものである。(川島 2010：313)

> 訓訳とは、白話小説に用いられ、右側が訓読体をとり、左側に訳注を付した形式を言う。左側の訳のみを指す場合がある。(村上 2015：243)

> 訓訳本とは漢文を本文のままに出し、左側に返り点、右の方に送り仮名を付けるのですが、もう一つ左の方に左訓といって言葉の解釈を付けるのです。(中村 1984b：282)

> …(前略)…訓点、左訓、割注を施した訓訳本である。(川上 2016：55)

---

[9] 『日本国語大辞典　第二版』(第四巻)：1188

つまり、「訓訳」とは、主に白話小説に用いられ、中国語の原文に返り点を施したうえで、原文の右側に送り仮名と振り仮名、左側に難解な語や短文の意味を説明するための分かりやすい言葉を付けた翻訳形式である。

【例】又一¯個^道、只_怕這ノ_雪還テ要スルレ大ヲ哩ヨ。　　『小説奇言』巻四・二十一ウ
マダ

本研究は横書きであるため、凡例に示した通り、本来原文の右側にあるものを上側、原文の左側にあるものを下側に記すことにする。本研究では、例文における送り仮名「ハ」「ノ」「テ」「スル」「ヲ」、振り仮名「ヨ」は合わせて「右訓」と呼び、文字の下にある「マダ」は「左訓」と呼ぶ。このような翻訳形式を使用するものが「訓訳本」である。

白話小説の訓訳本が訓点資料の一種であることは言うまでもないが、辞書における訓点資料についての記述には、訓訳本に関してあまり触れられていないようである。例えば、比較的新しい辞書『日本語大事典』(2014 年、朝倉書店)には、訓点資料について次のように書かれている。

> 日本の訓点資料は、典籍の種類、文体、学統、年代、加点方法等により分類できる。典籍の種類は、漢籍、仏書、国書に分ける。漢籍訓点資料は、『周易』『論語』等の儒教経典、『史記』『漢書』『後漢書』等の史書、『文選』『白氏文集』等の漢詩文集を訓読したものであって大学寮の博士家との関連が深い。仏書訓点資料は、『法華経』『大般若経』『四分律』『大智度論』等の漢訳仏典を中心にして、『法華経玄賛』等の論疏(注釈書)、『金剛界儀軌』等の儀軌(密教の修法の実践方法を述べたもの)、『大唐西域記』等の旅行記、『大慈恩寺三蔵法師伝』等の伝記、『往生要集』『教行信証』等の日本撰述書を訓読したものが多数伝存する。…(中略)…国書訓点資料は、『日本書紀』を中心にして、『本朝文粋』『将門記』等の文学文献、『和泉往来』等の往来物を訓読したものがある[10]。

また、訓点資料の原文の文体について、

> 原漢文の文体は、純粋な中国語文としての正格漢文(純粋漢文)と、語法・語順・用字法

[10] 佐藤(2014):615

等で日本語化した漢文である和化漢文(変体漢文)とに分かれる。正格漢文には、唐代口語を使用する『遊仙窟』等を含む[11]

と述べられている。つまり、中国語の原文に訓点を付けるという翻訳方法、いわゆる漢文訓読が、古くから行われているが、訓読の対象となるのは一般的に文言で書かれたものであるということである。本研究では、伝統的な漢文訓読資料と区別するために、四書五経などの訓点本を「訓点資料」と呼び、俗的な左訓がある白話小説の訓点本を「訓訳資料」・「訓訳本」と呼ぶ。また、左訓がない白話小説などの訓点本は本研究の対象外となり、「訓訳本」と呼ばない。

３、「訓訳」に関する先行研究及び本研究の目的

「訓訳」に関する研究は、主に三種類に分けられる。

一つ目は、訓訳資料の原典、訓訳者に関する文献学的研究である。例えば、尾形仂(1976)「小説三言：解説」、徳田武(1976a)「照世盃：解説」、太田辰夫・飯田吉郎(1987)「肉蒲団(研究篇)」、川上陽介(2004)「『照世盃』の施訓者について」、荒尾禎秀(2008)「和刻本『笑府』の書誌と諸本」などである。これらの研究は主に原典が日本に輸入された時期、版本の種類、訓訳者について考察するものであり、基礎的な研究である。

二つ目は、日中言語文化交流の角度から行われた研究である。日本の場合、石崎又造(1967)『近世日本に於ける支那俗語文学史』が代表的である。石崎(1967)は、中国語学の源流、近世期の流行と展開、白話文学と白話文学の翻訳が日本近世の文学界に与えた影響などを中心に考察を行った。特に第四章「京坂に於ける支那語學の展開」、第五章「白話文學と國文學」では、岡島冠山、岡白駒、沢田一斎など中国俗文学研究の関係者について詳しく紹介している。一方、中国の場合、王曉平(2014)『中日文学经典的传播与翻译』(『中日文学経典の伝播と翻訳』――拙訳）の第三章の第三節において、白話小説の訓訳について少し触れられている。「三言」「笑府」など訓訳された作品を列挙し、「江戸時代、中国の白話小説を翻訳する方法には、訓訳が簡易的かつ迅速的な作用を担った。…(中略)…訓訳という翻訳方法は当時多くの文人にマスターされた。しかし、そのような作品を当時日本の口語に訳することが一層困難であり、さらなる素養や知識が必要である(――拙訳)」[12]と指摘した。

三つ目は、訓訳本に関する語学的研究である。川島優子(2009)「江戸時代における白話小

[11] 佐藤(2014)：615
[12] 王晓平(2014)：212

説の読まれ方：鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵「金瓶梅」を中心として」は、鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵『金瓶梅』を中心に、その訓訳された時期と訓訳者、及び玉里本における表記・語釈・誤読などを詳しく考察した。川島優子(2010)「白話小説はどう読まれたか：江戸時代の音読、和訳、訓読をめぐって」も『金瓶梅』の玉里本を中心に、音読・和訳・訓読の三方面からその訓訳状況を明らかにしている。丸井貴史(2014)「白話小説訓読考――「和刻三言」の場合」は、「和刻三言」と称される訓訳本『小説精言』『小説奇言』『小説粋言』の性格、訓読法、『英草紙』に見られる白話小説訓読表現という三つの方面から考察を行った。訓訳本『小説奇言』の巻一、『小説粋言』の巻一を調査資料にして、中国語の助詞「的」「得」「着・著」「了」、介詞「在」「於」、方向補語「来」「去」、副詞「還」「好」「並」などの語の訓訳状況を調査し、白駒・一斎の施訓の特徴を「文言の訓読法を規範としていること」「白話語彙の語釈に相当する左訓を口語で示していること」[13]という二つの点にまとめている。

それらに対して、村上雅孝(2014)「訓訳と沢田一斎」、村上雅孝(2015)「岡白駒と訓訳」、村上雅孝(2017)「訓訳いわゆる左ルビをめぐって」など、白話小説訓訳本の左訓に関する一連の研究が行われている(村上における「訓訳」は「左訓」のことを指す)。村上(2014)は、訓訳(左訓)と荻生徂徠の訳学の関係を論述し、「訓訳の原点は徂徠学にある」[14]と指摘した。また、二字漢語を例として『俗語解』の注解と沢田一斎が訓訳した『小説粋言』における左訓を比較して両者の関係などを考察し、「『粋言』の訓訳が『俗語解』に採られているという可能性は高い」[15]と述べている。村上(2015)は、岡白駒に関する紹介、訓訳(左訓)の形成過程とその性格、『小説精言』巻一の二字漢語の左訓と『俗語解』の注解の比較、その左訓と読本の関係などいくつかの観点から、岡白駒の唐話学史における位置付けと彼が果たした役割を指摘した。村上(2017)は、村上(2014)、村上(2015)と同じように、訓訳本の左訓の原点は徂徠学にあることを主張し、その形成過程を詳しく論じた。そのうえで、訓訳本の左訓の影響にも言及している。

また、勝山稔(2010)「近代日本における白話小説の翻訳文体について――「三言」の事例を中心に」、堀口和吉(1992)「助辞「～的」の受容」など翻訳の視点から行った研究には白話小説の訓訳に関わる内容が見られ、中村幸彦、中村春作などの研究者の論著にも「訓訳」に言及するところがある。

多くの研究成果が蓄積されてきた訓点資料の研究とは違い、訓訳資料に関する研究はま

---

[13] 丸井(2014)：81
[14] 村上(2014)：137
[15] 村上(2014)：136

だ多いとは言えず、研究の余地が大きく残されている。そこで、本研究では、白話小説の訓訳本を調査対象とし、訓訳本と同時期の訓点資料、その時期の言語生活の様子を反映する口語資料における文法表現との比較を通して、訓訳本の性格、及び言語資料としての訓訳本の価値を解明することを目的とする。

４、本研究で使用する調査資料

本節では、本研究で使用する調査資料の書誌情報などを示す。

訓訳資料

近世の白話小説訓訳本について、「「和刻三言」の他には、岡島冠山施訓と言われる『忠義水滸伝』（初集享保十三年刊、二集宝暦九年刊）、倚翠楼主人施訓『肉蒲団』（宝永二年刊）、清田儋叟施訓『照世盃』（明和二年刊）などが存する程度である」[16]と言われている。「和刻三言」とは、すなわち岡白駒訓訳『小説精言』『小説奇言』と沢田一斎訓訳『小説粋言』である。しかし、岡島冠山施訓と言われる『忠義水滸伝』は、中国語の原文に返り点、送り仮名等が付けられ、左訓が一切見られない訓点本であり[17]、本研究でいう訓訳本（左訓があるもの）とは言えない。また、川島(2010)で紹介されている玉里文庫蔵の『金瓶梅』は、

> 文政十年(一八二七)から天保三年(一八三二)にかけて作成されたもので、中国四大奇書のひとつに数えられる明代の長編小説『金瓶梅』全文が抄写され、そこに訓点が施された「訓訳本」である。注目すべきは、余白部分に、様々な注、作成者の思いつき、落書きとも思える書き込みなどがそのまま残されていることである。ここからは、この玉里本が決してそのまま世に出されることを意図して作られたもの、つまり「完成形」にあたるものではなく、『金瓶梅』を読んだ際のノート、言ってみれば未整理の状態のものだということがわかる。しかもこの玉里本は、『金瓶梅』読書会の記録という側面をも持っている[18]

と、正式な出版物ではない。そのため、この『金瓶梅』も本研究の調査対象から除外する。以上を踏まえ、以下、本研究で取り扱う五つの訓訳本の書誌情報を示す。

---

[16] 丸井(2014)：72

[17] 陶山南涛編著『忠義水滸伝解』(1757)の「凡例」には、「第一回から第十回まではさきに岡島援之がすでに句読旁訳して世に行われている」という記述が見られる。しかし、「旁訳」が付いている和刻本『水滸伝』はまだ見つかっていない。村上(2017：101)によると、宮城県立図書館に所蔵されている『忠義水滸伝』には左訓が見られるが、一部に集中しており、書入れ本の可能性が高いという。

[18] 川島(2010)：313-314

『肉蒲團』（一名『覚後禅』）

四巻、宝永二(1705)年か、倚翠楼主人訳、東京大学東洋文化研究所所蔵[19]

『小説精言』

四巻、寛保三(1743)年、岡白駒訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収

『小説奇言』

五巻、宝暦三(1753)年、岡白駒訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収

『小説粋言』

五巻、宝暦八(1758)年、沢田一斎訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収

『照世盃』

四巻、明和二(1765)年、清田儋叟訳、ゆまに書房『照世盃』(1976)所収

『肉蒲團』(『覚後禅』)の出版時期と訓訳者、及び『照世盃』の訓訳者については、疑問があるため、本研究の第1章で詳しく検討を行うことにする。

訓点資料

江戸時代の『論語』の代表的な訓点本を調査資料とする。以下はその書誌情報である。

『論語集註大全』(『四書集註大全』所収)

慶安四(1651)年跋刊、鵜飼石斎施訓、国立公文書館所蔵

『論語古義』

正徳二(1712)年序、伊藤仁斎施訓、早稲田大学図書館所蔵

『論語句解』(『四書示蒙句解』所収)

元禄十四(1701)年序刊、中村惕斎施訓、早稲田大学図書館所蔵

『論語古訓正文』

宝暦四(1754)年刊、太宰春台施訓、国文学研究資料館所蔵

なお、適宜、築島裕編(2007～2009)『訓點語彙集成』を参照する場合もある。『訓點語彙

[19] 東京大学東洋文化研究所所蔵の訓訳本『肉蒲団』の巻一には、ページの順番が間違っているところが見られる。すなわち、巻一の四十五オ・四十五ウと四十九オ・四十九ウが逆になった。のちに入手した汲古書院出版の『中国秘籍叢刊』(1987)に所収されている訓訳本『肉蒲団』と比較した。その結果、汲古版の『肉蒲団』には乱丁が見られなかったが、両資料の原文の内容、訓点などがすべて同様である。汲古版の入手が比較的遅いので、本研究ではやはり東京大学東洋文化研究所所蔵の『肉蒲団』を調査資料とする。

集成は、「平安時代の訓點資料の中で、原則として西暦一〇〇一年以降のものについて、その和訓を集成したものである」[20]という。

口語資料

比較対象とする口語資料は、訓訳本とほぼ同時期(1739 年～1770 年)に出版された上方の噺本としたい。その理由は二点ある。まず、なぜ上方版を使用するかについては、のちに述べるが、訓訳本の訓訳者はおおむね上方の者であるからである。『小説精言』『小説奇言』の訓訳者岡白駒は播磨出身であり、『小説粋言』の訓訳者沢田一斎は京都の書店風月堂の主人であり、『照世盃』の訓訳者清田儋叟は京都出身である。そして、『覚後禅』の訓訳者倚翠楼主人は上方出身或いは長期滞在の者である可能性が高い。次に噺本を使用する理由については、噺本は江戸時代における俗文学の一種であり、笑い話や小咄を集めた集成本であり、「話が短い割には様々な位相の人物が、生き生きとした会話で遣り取りする」[21]と評価されているからである。また、この時期の洒落本、浄瑠璃が登場人物の位相上に偏りがあること、資料の量と出版時期の連続性などを考えると、噺本のほうが適していると考える。

本研究では主に 1976 年東京堂出版の『噺本大系(第八巻)』を使用する。調査範囲は上方に出版された 15 冊の噺本である(上方にも江戸にも出版された『軽口福徳利』『口合恵宝袋』を除く)。この 15 冊の噺本には上方に多用される言葉と表現が見られ、その登場人物も多くは上方の者である。前田(2015)などの研究では上方語資料として使われている。以下はその作品名と刊行年である。

『軽口初売買』、元文四(1739)年
『軽口福おかし』、元文五(1740)年
『軽口新歳袋』、元文六(1741)年
『軽口耳過宝』、寛保二(1742)年
『軽口若夷』、寛保二(1742)年
『軽口へそ順礼』、延享三(1746)年
『軽口瓢金苗』、延享四(1747)年
『軽口笑布袋』、延享四(1747)年

[20] 築島(2007)：253
[21] 前田(2015)：1

『軽口浮瓢単』、寛延四(1751)年
『軽口腹太鼓』、宝暦二(1752)年
『軽口豊年遊』、宝暦四(1754)年
『軽口東方朔』、宝暦十二(1762)年
『軽口扇の的』、宝暦十二(1762)年
『軽口はるの山』、明和五(1768)年
『軽口片頬笑』、明和七(1770)年

また、必要な場合、「日本語歴史コーパス」なども利用して用例の調査を行う。

その他の資料

以上の資料以外に、唐話辞書、漢語文典などの資料を参照する場合もある。それらについては使用する際にまた紹介する。

５、本研究の内容

本研究は近世の白話小説訓訳本に使用される文法表現の様相、訓訳本の特徴、及び言語資料としての訓訳本の価値を明らかにするために考察を行うものである。本論は第 1 章から第５章まで、全五章から構成される。それぞれ次のような内容となる。

第１章では、まず、江戸時代における白話小説訓訳本について紹介する。次に、訓訳本『覚後禅』の刊行時期と訓訳者、及び『照世盃』の訓訳者に関する問題を検討し、その実際の刊行時期と訓訳者を確認する。最後に、近世期における訓訳者相互の交際について論じる。

第２章では、訓訳本の右訓に使用されている言葉と表現、訓訳本の左訓に見られる特殊な言葉、表現と形式、及び訓訳本の右訓と左訓に現われている終助詞の差異について考察を行い、近世の白話小説訓訳本の全体的な特徴を指摘する。

第３章～第５章は、訓訳本の右訓に現われている特殊な表現を中心に考察を行い、訓訳本の右訓と同時期の口語資料に使用されている表現の相違点と共通点を指摘し、訓訳本の右訓の性格をさらに明らかにしようとするものである。具体的に言えば、第３章では、過去・完了の助動詞「タ」を中心に、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」の地の文や会話文などでの使用状況と接続、右訓における「タリ」の使用状況、及び同時期の口語資料における「タ」「タリ」の使用状況を考察し、訓訳本と同時期の口語資料との比較を通

して、『小説精言』『照世盃』の右訓の性格を指摘する。第４章では、文末表現「ジャ」を中心に、訓訳本『照世盃』の右訓における「ジャ」と「ジャ」以外の文末表現(特に「ナリ」)の使用場面と使用者を考察し、同時期の口語資料における「ジャ」「ナリ」との共通点と相違点を指摘し、『照世盃』の右訓の性格を述べる。第５章では、「和刻三言」の右訓に現われている口語的な終助詞「ヨ」の使用場面などを観察し、同時期の口語資料における「ヨ」との共通点と相違点を指摘し、「ヨ」から見る「和刻三言」の右訓の性格を述べる。

最後に、各章において考察した結果をまとめる。さらに、近世の白話小説訓訳本の言語研究上における価値を指摘し、今後の課題を整理する。

第１章　白話小説の訓訳本と訓訳者

１、はじめに

本章では、近世における白話小説訓訳本について紹介するうえで、『覚後禅』の刊行時期と訓訳者、及び『照世盃』の訓訳者に関する問題を検討する。また、近世期の訓訳者の交際についても論じていきたい。

２、近世における白話小説訓訳本

江戸時代では、正式に出版された訓訳本は「和刻三言」と呼ばれる『小説精言』『小説奇言』『小説粋言』、そして『肉蒲団』（『覚後禅』）、『照世盃』の五つしかないとされている[1]。以下、それぞれの詳細について説明する。

『小説精言』

『小説精言』及び後に述べる『小説奇言』『小説粋言』は、概ね馮夢龍によって編集刊行された『喩世明言』（原題『古今小説』）『警世通言』『醒世恒言』、凌濛初によって編集刊行された『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』という五つの白話小説短編小説集から抄出したものである[2]。そのうち、『小説精言』は四巻からなる。尾形(1976)によると、その原拠はそれぞれ『醒世恒言』の巻三三、巻八、巻二二、巻九であり、元の本文とは多少異なりが見られるが、内容的にはほぼ差がないという[3]。『小説精言』の序文の文末に「寛保癸亥春三月望西播岡白駒序」という記述がある。また、各巻の巻首にも「西播　岡白駒譯」という記述が見られ、岡白駒が訓訳者であることが分かる。なお、巻末に「譯義」（訓訳者の言葉と訳し方に関する解説）が添えられる。

『小説奇言』

『小説奇言』は五巻からなり、原拠はそれぞれ『今古奇観』[4]の巻三三、『醒世恒言』の巻一〇、『今古奇観』の巻三、『今古奇観』の巻二七、『西湖佳話』[5]の巻一四である[6]。『小説精

---

[1] 丸井(2014)：72
[2] 尾形(1976)：865
[3] 尾形(1976)：871-874
[4] 中国明末の口語短編小説選集である。抱甕老人の編となる。「三言二拍」の 198 編の中から、「三言」29 編（『喩世明言』8 編、『警世通言』10 編、『醒世恒言』11 編）、二拍 11 編（『拍案驚奇』8 編、『二刻拍案驚奇』3 編）の計 40 編を選び集めたものである。
[5] 中国清初の短編小説集である。墨浪子の著となる。浙江省の西湖をめぐる伝説、物語 16 編を収めた。
[6] 尾形(1976)：875

言』と同じく、各巻の巻首に「西播　岡白駒譯」と書かれており、訓訳者は『小説精言』と同一であることが分かる。しかし、『小説精言』と異なり、序や「譯義」（訓訳者の言葉と訳し方に関する解説）は見られない。

『小説粋言』

『小説粋言』は五巻からなり、原拠はそれぞれ『警世通言』の巻三、『今古奇観』の巻九（『初刻拍案驚奇』の巻一）、『警世通言』の巻五（『今古奇観』の巻三一）、『初刻拍案驚奇』の巻三三、『今古奇観』の巻二九（『初刻拍案驚奇』の巻一一）である[7]。ゆまに書房版の『小説粋言』には朱筆が見える。尾形（1976）の考察によると、これは1758年に出版された通行本の『小説粋言』と同版であり、試し刷りとして刷られた、一斎手沢の校正本である可能性が高い[8]という。序文の文末に「寶暦丁丑三月既望　奚疑齋主人書」と見え、各巻の巻首に「平安　奚疑主人　譯」と書いてある。「奚疑斎」は沢田一斎の別号である。

『肉蒲團』（『覚後禅』）

『肉蒲團』は日本での書名であり、中国では『覚後禅』と呼ばれる。『覚後禅』は中国清代の好色小説であり、作者について異説もあるが、明末清初の文人である李漁の可能性が高いとされている[9]。訓訳本『覚後禅』は、四巻二十回四冊からなる。巻一の巻首に「倚翠樓主人譯」「宝永乙酉秋上●[10]」「青心閣發兌」と書いてある。すなわち、この訓訳本は「倚翠楼主人」によって訳され、宝永二（1705）年青心閣によって刊行されたものと考えられる。しかし、この訓訳本の刊行年と訓訳者については諸説があり、中村（1984b）、中村（1985a）、太田・飯田（1987）などの先行研究にその問題が指摘されている。それについて、次の３節で詳しく論じる。

『照世盃』

『照世盃』は四つの物語からなる清代短篇白話小説集である。中国では早くから佚存書となり、1928 年、海寧の陳乃乾が「日本伝鈔本」として『古佚小説叢刊』に収めたことにより、初めてテキストが中国に逆輸入された[11]と言われている。日本では、風月堂荘左衛門刊『小説奇言』（宝暦三（1753）年）の「嗣刻小説」の目録に「照世盃」と載っており、また、『小

---

[7] 尾形（1976）：882
[8] 尾形（1976）：880
[9] 太田・飯田（1987）：143-147
[10] ●は認識できない漢字を表す。
[11] 徳田（1976a）：453

説粋言』(宝暦八(1758)年刊)の刊記にも「照世盃　四回嗣刻」と見える。しかし、今日知られている訓訳本は、明和二(1765)年、皇都書肆日野屋源七によって出版された半紙本四巻五冊のものである。風月堂荘左衛門刊の「照世盃」が存在しているかどうかは不明である。本研究で取り扱う明和二(1765)年刊の『照世盃』の巻頭に、「讀俗文三條」が附載されており、その最後には「寶暦壬午之秋孔雀道人書於平安小川僑居」という署名が見られる。徳田(1976a)は「彼(清田儋叟を指す――筆者注)に「孔雀楼」の号があること」「その内容が儋叟の見解と全く一致すること」という二つの根拠によって、「孔雀道人」はすなわち清田儋叟であることを指摘した[12]。問題となるのは、『照世盃』巻頭の「讀俗文三條」は「孔雀道人」すなわち「清田儋叟」が書いたということは分かるが、『照世盃』そのものの訓訳者も「清田儋叟」であるかどうかは検討を要する。それについては４節で検討する。

３、訓訳本『覚後禅』の刊行時期と訓訳者

3.1　問題提起

訓訳本『覚後禅』の刊行時期と訓訳者に疑問があることを指摘したのは中村幸彦である。中村(1968)は、「訓訳」を定義する際に、

> 訓読と同じ形式であるけれども、必要な語の左側に、俗語の注を加えたものを＜訓訳＞という。…(中略)…宝永２年刊の『覚後禅』(倚翠楼主人訳)がこの形式を用いた初めの白話小説であった。その後『小説精言』(寛保３、岡白駒訳)・『小説奇言』(宝暦３、白駒訳)・『小説奇(ママ)言』(宝暦８、沢田一斎訳)の類が、中国白話小説を訳出するのに皆この形式を用いた[13]

と、『覚後禅』が日本最初の白話小説訓訳本であることを述べた。『日本古典文学大辞典　第四巻』における「肉蒲団」の項目(中村幸彦執筆)では、

> **肉蒲団**　にくぶとん
> 四巻二十回四冊。明の情隠先生著。倚翠楼主人訳。宝永二年(一七〇五)(自)序。柳花亭漫叟跋。宝永二年青心閣刊。別称「覚後禅」。訳者は誰人か未詳。〔内容〕中国の有名な好色小説の訓訳。…(中略)…この白話小説の訓訳は、年代的には、最初の刊本で、

[12] 徳田(1976a)：451-452
[13] 中村(1968)：274

かつよく出来ているとの評がある。…(中略)…【付記】大阪書籍商の記録『書籍開板御願書控』によれば、宝暦七年(一七五七)九月、陶山(すやま)尚善(南濤)の訓点で、敦賀屋九兵衛から出願されていて、明和九年(一七七二年)刊の『大増書籍目録』には「四、肉蒲団、陶山尚善」「五　春灯闡　同」と見えて、出刊されたものと思われる。この宝暦頃の年次をもつ本は、いまだ出現していない。よって本書との関係も明らかにできないままである[14]

と述べられており、宝暦七(1757)年に陶山南濤が訓点を施したものの存在が指摘された。そして、中村(1984b)において、

岡島冠山の愛読書であったことを紹介した如く、これより早く渡来していたのは事実。それにしても倚翠楼主人訓訳の『覚後禅』の印刷製本の面から、果たして宝永二年刊なるかと、若干の疑念のぬぐえないことを付言しておく[15]

と、「宝永二年刊」という出版時期の真偽に関する疑問を呈している。1985 年に発表された「近世語彙の資料について」の「註一」では、

『肉蒲団』の刊年のある本を見てゐないので何とも云へないが、この本の訓には「古怪(ケタイナ)」「小説(アカホン)」「幹事(トボス)」「春宮冊子(ワライホン)」など、かかる種類の語は当然あるべき浮世草子や近松の作品には見えなくて、宝暦頃からの書に見える語が散見する。一方『享保以後　大阪出版書籍目録』には、宝暦七年九月出願で、訓点者陶山尚善(丹後宮律)として『肉蒲団』四冊がのつてゐる。宝永二年序のある写本又は刊本があつたのを、南濤陶山尚善が、新しく訓点し、又は増加して出したのが、現存する刊本ではなからうか[16]

と、宝永二(1705)年と書いてある刊本は、実際は陶山南濤が訓点を施した宝暦(1751～1764年)頃のものではないかと推測している。

また、太田・飯田(1987)も『覚後禅』の出版時期及び訓訳者について言及している。

---

[14] 中村(1984a)：584
[15] 中村(1984b)：44
[16] 中村(1985a)：211

発兌元の青心閣というのはその存在がまったく知られていない疑問の書肆である。訳者名は倚翠楼主人となっているが、この筆名についてもまったくわからない[17]

この書には奥付が無いことで、序の「五里霧中人の家に撰す」という、人を食った表現とあわせ考えるとき、この書は秘密出版であり、上述の日付や発行所などを含めて、すべてが架空のものではあるまいか。[18]

宝永二年に『肉蒲団』の和刻本が刊行されたとは信じられない。これは第二期[19]の産物にちがいない[20]…(中略)…和刻本の訓読者すなわち倚翠楼主人を、筆者は陶山南濤(一七〇〇-一七六六)ではあるまいかと推量する[21]。

つまり、太田・飯田(1987)の観点は中村(1985a)と同じである。一方、村上(2014)では、

ただ『肉蒲団』の当時の普及の状態から見て、その訳読は南濤より早い時期のものがあったのではないかとも考えられる。前述のように『肉蒲団』は、岡島冠山の唐話の原点であった。(「橘窓茶話」) 南濤より早く、例えば冠山に訓訳があったとしても不思議ではない[22]

と指摘されており、『覚後禅』は岡島冠山が訓訳した可能性もあることを示した。

以上の観点をまとめると、中村と太田・飯田(1987)は宝永二(1705)年序の『覚後禅』の出版時期と訓訳者に疑問があること、訓訳本『覚後禅』の出版時期が宝永(1704～1711 年)以降である可能性が高いこと、訓訳者が陶山南濤である可能性が高いことを主張している。それに対し、村上(2014)は、『覚後禅』の訓訳本が陶山南濤より早い時期のものである可能性があり、訓訳者は岡島冠山かもしれないと指摘している。このように、『覚後禅』の出版時期と訓訳者については諸説あり、見解が定まっていない。再検討を要する。

先行研究に示されている証拠、及び訓訳本『覚後禅』に使われている言葉の調査から、中

---

[17] 太田・飯田(1987)：159
[18] 太田・飯田(1987)：159
[19] 太田・飯田(1987)によると、「第二期」は白話小説期、享保以後（一七一六―）のことを指す。第一期は、中国俗文学翻訳史における文語小説期を指し、正徳（―一七一五）までである。
[20] 太田・飯田(1987)：160
[21] 太田・飯田(1987)：160-161
[22] 村上(2014)：143

村、太田・飯田(1987)の説が正確であると考えられる。以下、具体的な証拠を提示しながら検討していきたい。

3.2　訓訳本『覚後禅』の刊行時期

訓訳本『覚後禅』の実際の刊行時期は恐らく宝永二(1705)年より約五十年後の宝暦(1751～1764 年)期だと思われる。中村は「印刷製本の面から見れば、宝永二(1705)年の書であることに疑問がある」[23]「左訓には「古怪(ケタイナ)」「小説(アカホン)」「幹事(トボス)」「春宮冊子(ワライホン)」など、宝暦頃からの書に見える語が散見する」[24]「『享保以後　大阪出版書籍目録』には、宝暦七(1757)年九月出願で、訓点者陶山尚善(丹後宮律)として『肉蒲団』四冊という情報が載っている」[25]という三つの証拠を呈している。太田・飯田(1987)はそれ以外に、「紙の厚さから見れば、宝永以降のものの可能性がある」[26]「序の「五里霧中人の家に撰す」から見れば、書に書いてある出版時期などが架空のものの可能性が高い」[27]「岡島冠山の愛読書だということを知っている同時代の人である雨森芳洲は、和刻本されていたならば、言及しないはずはない」[28]という証拠を指摘した。

しかし、宝暦(1751～1764 年)期出版ということを証明するにはさらなる証拠が必要である。中村(1985a)に示されている二番目の証拠を見れば、言語の面からの検証が有効であると考えられる。中村が挙げる「トボス」という語を例に考えてみよう。『近世上方語辞典』

---

[23] 中村(1984b)：44
[24] 中村(1985a)：211
[25] 中村(1985a)：211
[26] 太田・飯田(1987)：158-159
「古書肆の談によれば、薄手の紙が早期の印本で、厚手のものはやや時代が降るのではないかという。また実際の刊行は宝永乙酉（二年、一七〇五）よりは降るのではないか、という意見もある」（太田・飯田 1987：158-159）
[27] 太田・飯田(1987)：159
[28] 太田・飯田(1987)：160
「冠山は『肉蒲団』を愛読し、かつ唐話を志す人々に推奨して憚らなかった。雨森芳洲（一六六六―一七五五）の『橘牕茶話』（一七四七序。関西大学影印本一五八ページ）に、

岡島援之只有肉蒲団一本、朝夕念誦、不頃刻歇、他一生唐話、従一本肉蒲団中来

とある。芳洲は冠山と同時代の人であるから、この言には根拠があろう。しかし冠山がこれを翻訳出版したと考えるべき証拠はまったくない。芳洲は同じ書の中で、次のように述べている。

…(前略)…我東人欲学唐話、除小説無下手処、然小説還是筆頭話、不如伝奇直截、平話只恨淫言褻語不可把玩、又且不免竟隔一重靴、

もし宝永二年に『肉蒲団』の和刻本が出版されていたならば、芳洲が言及しないはずはない。『橘牕茶話』成立の当時（一七四七より前)、『肉蒲団』の和刻本は出版されていなかったと断言してよい」（太田・飯田 1987：160）

(1964 年、東京堂)及び『江戸語大辞典』(1974 年、講談社)に共に見られ、次のように解釈されている。

『近世上方語辞典』

とぼす「点す」淫す。肉交する。文化頃、江戸から移入。文化十一年・大坂繁花風土記今世はやる詩遣ひ　「とぼす。(犯すと)同じ事なれど、これは江戸うつし」[29]

『江戸語大辞典』

とぼす【点す】①(略)　②男女交合す。「蠟燭をとぼす」の略で、宝暦頃からすでにこの意を用いたが、寛政年中、遊里語として流行した[30]

つまり、性に関する意味の「トボス」は宝暦(1751～1764 年)頃から江戸語の資料に見られ、後の文化(1804～1818 年)頃、江戸から上方に移入したという。なお、『近世上方語辞典』『江戸語大辞典』に示されている例は安永(1772～1781 年)期以降のものであり、宝暦(1751～1764 年)頃の例は示されていない。そのため、宝暦(1751～1764 年)頃の江戸において、「トボス」が本当に「男女交合す」の意味で用いられたかは定かではない。そこで、『日本国語大辞典　第二版』「日本語歴史コーパス」「噺本大系本文データベース」などの用例を観察し、「トボス」の意味を調査したが、宝暦(1751～1764 年)期の例は見られなかった。そのため、『覚後禅』における「トボス」が、『江戸語大辞典」で「宝暦頃からすでにこの意（男女交合す）を用いた」(括弧内筆者）とされている例より、時代的に先行するのか下るのかは分からない。しかし、少なくとも宝暦(1751～1764 年)期までには新しい意味の「トボス」がまだ使われていないことが確認できる。

また、訓訳本『覚後禅』の左訓に可能表現としての「デキル」が見られる。

(1)　只_是レ他ノ父-親古-怪、定テ不レ肯ンセレ使ルヲ二人ヲシテ相セ一、你チ又定テ要スレ相ント、這ノ-事
ヲ　ヤ　ゴケタイナ　ゼヒ

又是レ做シ不ルレ来ラ的-了ス。　『覚後禅』巻一・十八オ
テ　キ　ヌ　コ　ト

(2)　小-弟-的ノ力-量、足三々ス支二-持シ_得ル一-更ヲ一。　同上、巻二、七オ
デ　キ　ル　コタヘテイルコトガ

[29] 前田(1964)：809
[30] 前田(1974)：717

(3)　走リ二_到レハ場-屋-裡一、也タ只_是レ做シ不レ出サ。　同上、巻二、七ウ
デ　キ　ズ

(4)　権-老-實生-意折-本シ、日-給不レ敷セ。　同上、巻三・六ウ
シヤウバイク ヒ コ ミ　ク ラ シデ キ ズ

(5)　若キハレ説クカレ不トレ要セ二妻-子ヲ一、那ハ_就チ成シ不レ得-了セ。　同上、巻三・三十ウ
ソレハ　デ キ ス

(6)　萬-一被レハ二他ニ知-道セ一、我-們ラ的好-事、就チ做シ不レ成サ了ス。　同上、巻四・二オ
デ キ ヌ

可能表現としての「デキル」について、渋谷(1986)は『うかれ草子』(1797 年) に現れる「デキル」の例を初出として示し、「デキルが可能表現として用いられるのは、上方、江戸ともに、近世後期(18 世紀後半以降)のことのようである」[31]と指摘している。また、前田(1983)には、

『五十年忌歌念仏』(中)に、

○「コレ、お前に聞こえぬことがある。此の袖下は何事(ごと)ぞ。若(わか)衆の前髪(がみ)、女の脇詰(わきづめ)、男が知(し)らいで立つものか。出来(でき)ぬ仕方」といひければ、

とあるように、ある動作をすることが可能であることを意味する「できる」も使われるようになる[32]

という指摘がある。しかし、『日本国語大辞典　第二版』(2000 年、小学館)によると、この例の「デキル」は可能の意ではなく、「することが許される」という意味である[33]。渋谷(1986)や『日本国語大辞典　第二版』によれば、宝永二(1705)年には「デキル」の可能用法はまだ発生しなかった。渋谷(1986)に示される初出例(明和(1764～1772)年間)より早いが、宝暦(1751～1764)年間に可能用法の「デキル」が生じた可能性があると考えられる。特に例(2)における「(～スル)コトガデキル」という形式は、そのことを説明するのに最も説得力がある。江戸時代の「(～スル)コトガデキル」は、神田(1961)の調査では、『浮世風呂』(文化六(1809)～十(1813)年刊)の 1 例のみである。[34]化政期(1804～1830 年)から明治初年にかけての用例を調査した鸕岡(1967)では、収集例の大半が『夢酔独言』(天保十四(1843)年序)に現

[31] 渋谷(1986)：114
[32] 前田(1983)：5
[33] 『日本国語大辞典　第二版』(第九巻)：619
[34] 神田(1961)：72

われるという結果が示されている[35]。そして原口(1985)は明和八(1771)年の例(『遊里の花』)を提示し、「(～スル)コトガデキル」という形式は「口頭語では、明和の文献に用例が存在するが、その伸張は、音節の長さも関係して、牛歩のごとくである。ようやく化政期以降に至って日常語化した姿を文献に見せることになる」[36]と指摘した。以上の先行研究の調査結果から「(～スル)コトガデキル」という形式の初出例は明和(1764～1772 年)期にあることが分かる。宝永二(1705)年にこの形式が現われることがほぼ不可能だと考えられる。よって、「(～スル) コトガデキル」がすでに用いられている訓訳本『覚後禅』の刊行時期は宝永(1704～1711 年)期以降だと推定できよう。

また、太田・飯田(1987)が

> 和刻本刊行の下限を著しく降るものとすることも不可能である。明和五年 (一七六八) に刊行されたこの小説の翻案『風流六女競』は、和刻本を下敷にしたものに相違ないからである[37]。

と述べており、訓訳本『覚後禅』の刊行時期に下限があることを示した。『風流六女競』はすなわち小松屋百亀画の艶本であり、前編五冊は明和五(1768)年刊、後編は安永元(1772)年刊である。また、肉蒲団の翻案、改題改竄本に「金勢霊夢伝」(文化(1804～1818 年)頃)とある[38]。つまり、訓訳本『覚後禅』は宝永(1704～1711 年)以降明和(1764～1772 年)以前のものであることが認められる。中村、太田・飯田(1987)に示される証拠と合わせて考えると、出版時期は宝永二(1705)年ではなく、宝暦期(特に宝暦七(1757)年)である可能性が高い。

3.3　訓訳本『覚後禅』の訓訳者

訓訳本『覚後禅』の訓訳者は上方の者或は上方に長期滞在していた者だと推測される。先行研究には次のように指摘されている。

> それにしても「ケタイナ」などあつて、上方版と思はれるこの訳本に早くも、江戸語であると考へられる「アカホン」「トボス」などの語を使用してゐるのは注目すべき

---

[35] 靏岡(1967)：59
[36] 原口(1985)：65
[37] 太田・飯田(1987)：160
[38] 国文学研究資料館・日本古典籍総合目録・『風流六女競』の著作注記による。
(http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_1657574)

であらう[39]

和刻本の訓読はなかなか巧みにできており、関西弁を反映しているようである[40]

「ケタイナ」は『近世上方語辞典』『江戸語大辞典』『江戸語辞典』に全て見られる語であり、「いまいましい」という意味を表すとされている。『覚後禅』における「ケタイナ」の意味(「変な」)とは違うようである。よって、「ケタイナ」を根拠に『覚後禅』が上方版であるとするのは早計である。また、太田・飯田(1987)は「関西弁を反映している」と指摘しただけで、具体例を提示していない。そこで、『覚後禅』で上方語が使用されているのかを調査した結果、「ホンマ」「カカ」などの上方語が左訓に現われることが分かった。

(7) 實－債　『覚後禅』巻一・四オ
ホンマノカケ

實－際　同上、巻二・十六オ
ホンマノコト

真－貨　同上、巻二・二十五ウ
ホンマノモノ

真-言　同上、巻四・十ウ
ホンマニ

真-正　同上、巻四・十三オ
ホンマニ

真-正　同上、巻四・二十七ウ
ホンマノ

(8) 老-婆　同上、巻二・二ウ
カヽ

妻-子　同上、巻四・二十七オ
カヽ

「ホンマ」は主に上方に使用されている言葉である。訓訳本とほぼ同時期の噺本には用例が見られなかったため調査範囲を広めて調査したところ、1613～1854 年に刊行された噺本より 15 例を得た。そのうちの 13 例は上方版噺本に現われ、使用者は上方の者である。残っ

[39] 中村(1985a)：211
[40] 太田・飯田(1987)：160

た 2 例は江戸で出版された噺本に現われる。以下の例(9)、例(10)は江戸版の例文である。

(9)　となりの上かた者めが、いつものとをりかぎつけて来おるゆへ、…(中略)…ひとつなべの物迄たべあふた治郎さんが、ほんまにしんでなら、せめてかた身など、もろうてさんじませう　「はつ松魚」『百の種』、1825

(10)　甲州辺の山にて、狩人、山へ行、猪をうち歩行。…(中略)…其所へ狩人も、ほんまに打しと心得、たづね来る。　「狩人」『落噺笑富林』、1833

例(9)の話し手は「上かた者」であることが明らかである。例(10)の話し手は甲州辺に狩猟をしている狩人であり、上方の者であるかどうかは分からない。この例を除けば、噺本における「ホンマ」の使用者は全て上方の者だと言える。そして「カカ」について、随筆の『守貞漫稿』(1837～1853 年)には、「己れが妻を　京坂にてかかと云　江戸にてかかあと云」という記述がある[41]。この二つの語から、『覚後禅』の訓訳者は上方の者或は上方長期滞在の者である可能性が高いと言えよう。

また、中村(1985a)、太田・飯田(1987)は、『覚後禅』の訓訳者は恐らく陶山南濤であろうと推測した。中村(1985a)は、「『享保以後　大阪出版書籍目録』には、宝暦七年九月出願で、訓点者陶山尚善(丹後宮律)として『肉蒲団』四冊がのつてゐる」[42]ということを証拠として挙げている。一方、太田・飯田(1987)は中村(1985a)と同じような証拠を呈したうえで、

> なお南濤は宝暦八年（一七五八）に『春灯閑』の出版を大塚屋惣兵衛から出願している。この原本も一種の好色小説である[43]

と指摘した。

陶山南濤について、『朝日日本歴史人物事典』に次のように紹介されている。

> 江戸時代中期の漢学者。土佐(高知県)の人。名は冕、字は尚善(小膳)、延美、通称は源四郎。南濤と号す。本姓井戸氏。土佐藩士生島春竹の養子となり、初め生島春卿と名乗った。京都に上り医学を学び、藩の医官となるが、その横柄な性格ゆえか、享保17(1732)年に士籍を削られた。その後井戸醒庵(省庵)と名乗って各地を回り、のちに陶

[41] 『日本国語大辞典　第二版』(第三巻)：332
[42] 中村(1985a)：211
[43] 太田・飯田(1987)：161

山南濤となって、宝暦 6(1756)年には丹後(京都府)宮津藩に仕えた。伊藤東涯(とうがい)の門に入り、特に華音(中国語)、白話小説に精通し、30 年間『水滸伝』を講じたという。[44]

この記述から、陶山南濤は土佐出身であるが、京都に滞在した期間が長かったようであり、上方語を使っていたとしても不思議なことではない。しかし、「倚翠楼主人」が実際に「陶山南濤」であるかどうか、今の段階では十分な証拠がないので、断言できない。

以上、訓訳本『覚後禅』の刊行時期問題と訓訳者問題を検討した。検討の結果、『覚後禅』は宝永二(1705)年ではなく、宝暦(1751～1764 年)期のものであることが確認できた。また、その訓訳者は陶山南濤であると言い切ることができないが、上方の者或は上方に長期滞在の者の可能性が高いことが分かった。

４、訓訳本『照世盃』の訓訳者

先に述べたが、明和二(1765)年刊の『照世盃』の訓訳者が清田儋叟であるかどうかについては疑問である。徳田(1976a)は「この珍しい中国白話小説の訓訳は、清田儋叟によってなされたものと断じて差しつかえない」[45]と断言した。だが、後に出版された『佐伯文庫叢刊第四巻　照世盃』(汲古書院)の「解説」において、大塚(1988)は、底本の入手問題、宝暦十二(1762)年～明和二(1765)年の間の儋叟の在京問題等を挙げて、徳田(1976a)の説を批判している。しかし、川上(2004)は、大塚(1988)に論及された佐伯文庫本『照世盃』と訓訳本『照世盃』の原文の比較、「讀俗文三條」に示されている訳例と訓訳本における対応の語の訳し方の比較等を通して、大塚(1988)の仮説を否定した。そして、「和刻本『照世盃』の施訓者、欄外頭注の作成者は、やはりいずれも従来言われてきた通り、清田儋叟と考えて間違いないであろう」[46]と指摘している。このように、様々な説があるが、『照世盃』の訓訳者は清田儋叟である可能性が強いようである。

なお、清田儋叟については、石崎(1967)に次のように紹介されている。

儋叟(享保四―天明五、六七)は江村北海の弟で、名は絢、字は君錦、播磨の産、越前侯の文學、伊藤龍洲に學ぶ。藝苑談・孔雀樓文集・同筆記等の著者である。其の唐音學は白駒一派の間で修得したものであるが、支那小説を耽讀したことは京都の本城維新芳

[44] 朝日新聞社編(1994)：898
[45] 徳田(1976a)：451
[46] 川上(2004)：32

譯「通俗平妖傳」寛政九年皆川淇園の序に詳かである[47]

そして、中村幸彦編『近世白話小説翻訳集　第５巻』に収録されている『通俗平妖傳』の序には、

友人清君錦亦酷好レ之、毎レ會互擧二其文奇者一以爲二談資一、後又遂與二君錦一競共讀二他演奇小説一、如二西遊・西洋・金瓶・封神・女僊・禪眞等諸書一。無レ不二遍讀一…(中略)最後得二平妖傳一讀レ之(中略)與二君錦弟章一玩讀不レ已。此距レ今四十餘年前事也[48]

という記述が見える。これによれば、清田儋叟は多くの白話小説を通読したとされ、相当の中国語読解力を備えているようである。また、小説愛読者の儋叟は、実は越前藩の藩儒であり、「嗚呼予一生ノ精力、半ハ尚書・論語・通鑑・史記ニアリ」[49]と言うように、「経学・史学という正統なものにあった儒者」[50]であった。

５、近世期の訓訳者の交際[51]

第３節、第４節では『覚後禅』『照世盃』の訓訳者に関する問題を論じてきた。「和刻三言」の訓訳者岡白駒及び沢田一斎も江戸時代の有名な唐話学者である。

岡白駒[52](1692～1767 年)は、姓は岡田ともされている。字は千里、通称は太仲、号は竜洲。播磨の出身であり、微賤の頃は金絲煙を売っていて、のちに医を業としていたが、一旦それをやめて京都に上って儒者になったとされる。それから、京都で小説を講じて、『小説精言』『小説奇言』のほか、戯文の『開口新語』『嵬説新話』、語釈の『水滸傳譯語』『水滸全傳譯解』『雑纂譯解』、文典の『助字譯通』、また儒学関係の『明律譯注』『詩經毛傳補義』『孔子家語補注』『孟子解』『論語徵批』などの多くの著作が残っている。「白駒の儒学について現代の評価は厳しい。…(中略)…ただ江戸時代での評価では先哲として名を留める儒者の一人ではあった」[53]との指摘もある。しかし、唐話学の場合、「唐話学史では、岡島冠山と比肩すべき位置に達し、冠山没後は第一人者となる」[54]と評価された。岡白駒は江戸に赴いたり、

---

[47] 石崎(1967)：165
[48] 中村(1985b)：8-9
[49] 中村・野村等(1965)：306-307
[50] 徳田(1976a)：449
[51] 本節は石崎(1967)、檜垣里美(1976)「岡白駒年譜」、村上(2015)等を参照した。
[52] 岡白駒の紹介について、石崎(1967)、檜垣(1976)、村上(2015)を参照して整理した。
[53] 村上(2015)：242
[54] 村上(2015)：231

長崎に行ったりしたことがあるようであるが、唐話の師承関係については不明である[55]。しかし、岡島冠山の著作『唐音三體詩譯讀』(享保十一(1726)年)に白駒が書いた序が見られることから、白駒は唐話学の代表人物である冠山と付き合いがあったことが分かる。また、徂徠学、崎門に接しており、多くの学者と接触があったようである[56]。

沢田一斎[57](1701～1782 年) は岡白駒の門人の一人である。名は重淵、字は文拱、通称は風月庄左衛門、号は一斎。京都の書店風月堂の主人。『文會雑記』巻三下に、「京都ノ風月ト云フ書肆、俗語ニヨク通ス、イロハト云婦人ノ事ヲ小説ニ識シ、刊藏ストナリ、國鸞[58]語レリ」という記述が見える。著書として『小説粋言』のほか、『奚疑斎蔵書』などがある。その唐話学力については、「白話小説についての一斎の学力と情熱は、白駒のそれを凌駕していたと断じてよい」[59]という評価がある。沢田一斎と岡白駒の交際について、白駒著の『補註孔子家語』(寛保元(1741)年)に附された風月堂主人沢文拱の識語に、

> 享保乙卯春、初めて龍洲先生に謁す。談、此の書に及ぶ。先生乃ち嘗て校定する所の補註を出して示さる。余就ち之を読む。…(中略)…遂に乞ひて梓に登す。元文戊午(三年)甫めて工に付し、今茲寛保紀年冬、刻成る。

と書いてある[60]。つまり、享保二十(1735)年の春、白駒と一斎は「著述家と書肆という関係」[61]ではじめて会ったということである。のち、一斎は白駒に白話を学び、白駒の弟子になり、『小説粋言』の訓訳をして刊行した。

白駒と清田儋叟との初対面がいつ頃なのか不明であるが、白駒の著作『譯準解口新語』(寛延四(1751)年)に儋叟が撰する序が見られることから、寛延四(1751)年以前から既に交渉があったことは明らかである。また、『小説奇言』の「嗣刻小説」の目録と『小説粋言』の刊記に「照世盃」という書名が載っていることから、徳田(1976b)は「書肆風月堂荘左衛門こと沢田一斎は、この時、岡白駒に「照世盃」に施訓せしめるつもりだったのであろうか。それとも白駒から儋叟に訓訳の橋渡しをするようなことがあったのだろうか」[62]と指摘した。儋叟は一斎とも接触があったことが分かる。

---

[55] 村上(2015) : 240
[56] 村上(2015) : 242-239
[57] 沢田一斎の紹介について、石崎(1967)、村上(2014)を参照して整理した。
[58] 「國鸞」は宇野明霞の門人である赤松滄州の字である。
[59] 檜垣(1976) : 899
[60] 檜垣(1976) : 899
[61] 檜垣(1976) : 899
[62] 徳田(1976b) : 480

６、まとめ

以上、近世における白話小説訓訳本について紹介し、訓訳本『覚後禅』の刊行時期と訓訳者に関する問題、訓訳本『照世盃』の訓訳者に関する問題、及び近世期の訓訳者相互の交際について考察を行った。

訓訳本『覚後禅』には宝永二(1705)年の序が見られるが、その実際の刊行時期は恐らく宝暦(1751～1764 年)頃であろう。また、その訓訳者「倚翠楼主人」は陶山南濤である可能性があるが、証拠不十分で断言できない。『覚後禅』の左訓に上方語が現われていることから、訓訳者が上方の者或は上方に長期滞在の者である可能性が高い。

『照世盃』の訓訳者に関しても異論があるものの、清田儋叟の可能性が高いことが確認できた。

『小説精言』『小説奇言』の訓訳者岡白駒は江戸時代における代表的な唐話学者の一人であり、『小説粋言』の訓訳者沢田一斎の唐話の師である。清田儋叟は岡白駒、沢田一斎の知人のようである。要するに、近世における白話小説訓訳本の刊行時期は一七四〇年代～六〇年代に集中しており、その訓訳者は上方を中心に活躍した唐話学者ということになる。そして、様々な資料や先行研究の指摘から、彼らは互いに交渉があったことが分かる。

第２章　近世の白話小説訓訳本の全体的な特徴

１、はじめに

本章では、訓訳本に使用されている言葉と表現から、近世における白話小説訓訳本の全体的な特徴を把握していきたい。

結論を先に述べると、近世の白話小説訓訳本には次のような特徴が見られる。

① 右訓にはほぼ伝統的な訓読表現が使用されているが、新たな表現も見られる
② 左訓には時代性と地域性が見られ、文レベルのものも現われている
③ 訓訳本には二重の言語表現体系が存在している

以下、具体的な用例を示しながら、訓訳本の三つの特徴を論じていく。

２、訓訳本における右訓の特徴

2.1　伝統的な訓読表現の使用

白話小説訓訳本の右訓に見られる言葉と表現[1]は概ね訓点資料と共通している。訓点資料に用いられる言葉と表現に関して、『訓點語彙集成』には、

> 後者（平安時代後期の訓点資料を指す――筆者注）は、鎌倉時代以降（十三世紀以降）まで、基本的にその内容の性格を傳存し、江戸時代の訓点にまで及んでいる。換言すれば、鎌倉時代以降においては、訓點の語彙や語法が新に作成されたり、又、變容されたりすることは、原則的には存在しなかつた。…（中略）…山田孝雄博士が、『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』において、主として江戸時代の漢文の版本の訓點によつて述べられた内容が、その多くが平安時代の訓點資料の例にも適用され得るのは、この故である[2]。

という記述が見られる。つまり、近世における訓点資料の言葉と表現が伝統的、固定的な性格を有していることが指摘されている。訓訳本の右訓と訓点資料の共通性は、明清時代の白話小説、戯曲など口語体の作品で多用される白話語彙の訓読から明らかである。以下に数例

---

[1] 固有名詞、普通名詞などを除く。
[2] 築島（2007）：五

を挙げる。

(1)　劉公見二他カ年_幼シテ有ヲ二些ノ礼ニ数一、便問_道、這ニ位ハ是レ令ニ郎ナリヤ麼(イナヤ)。

『小説奇言』巻二・三オ

「ヤイナヤ」について、築島(1965)は「疑問の意で文末に用ゐられるヤには「〜不」などの漢文を訓むのに「〜ヤイナヤ」といふ形があつて、これが訓點特有の形であらう」[3]と指摘している。しかし、例(1)のように、訓訳本では文末の「麼」を読む際にも「ヤイナヤ」が使用されている。「麼」は近現代中国語で多用されている文末助詞である。荻生徂徠の『訓訳示蒙』には「麼」に関して、「不ハイナヤトヨムトキ、否ノ古字ナリ。無、麼ハ俗語ナリ。無、麼ハ句尾ニ限ル。不、否ハ上ニモオクナリ」(巻五・十八ウ)という論述が見られる。つまり、「麼」は俗的であるが、「不」「否」と同義であるということである。

(2)　先著(シメ)二人ヲシテ去テ到二王ニ老員ニ外カ家ニ一、報二_了ル凶ニ信ヲ一。『小説精言』巻一・七ウ

父ニ親見二他カ守リ不ルヲ一レ過、便チ叫(シム)二家ニ裡ノ老ニ王ヲシテ去テ接シ(ツレ)レ他ヲ来ラ一。

ヲ　ヽ　セ　ヌ

同上、巻一・十六ウ

(3)　好シ像(コトク)二猛ニ雨ノ一般ニ、灑二ニ満ス一ニ紙ニ一。　同上、巻三・一ウ

例(2)の原文における「著」「叫」は「使」「教」「令」「遣」と同じく、使役を表す語であり、「シム」と訓読されている。例(3)の「像」は「如」「似」「若」の俗的な言い方であり、「ゴトシ」と読まれている。

そして、次の例(4)「不能勾」、例(5)「該」、例(6)「没」、例(7)「就」・「便」、例(8)「都」、例(9)「忒」の意味用法は、それぞれ「不能」、「可」、「無」・「莫」、「乃」・「則」、「總」、「甚」の意味用法に類似しており、その読み方は「アタハズ」、「ベシ」、「ナシ」、「スナハチ」、「スベテ」、「ハナハダ」となっている。

(4)　若ハ(フツハト)レ要カ三另ニ擇ント二日ニ子ヲ一、這ハ斷シテ不ル二能ニ勾ハ一的ナリ。『小説精言』巻二・七ウ

ナ　ラ　ヌ　コト

(5)　此ノ十ニ年大ニ_忌、該(ベシ)レ犯ス二ニ悪ニ疾ヲ一、半ニ死不ニ生。　同上、巻四・二十二オ

---

[3] 築島(1965)：737

(6)　單ニ説ク人-生在ルレ世ニ、朝-々勞-苦、事-事愁-煩、没シレ有ルコトニ一-毫受-用ノ-處一。
タダ　マヒニチ　シンキ　チツトモエヨウ

『覚後禅』巻一・一オ

(7)　盡在テハニ異ゝ郷ニ一、就チ是レ至ゝ親骨ゝ肉。　『照世盃』巻三・十八オ

只_道フ是レ他ノ家ゝ眷、便チ不シテレ開レ口ヲ、走リ了出テ_来ル。　同上、巻一・十二ウ
カナイノモノ

(8)　弟子讀ムレ書ヲ的ハ記 - 性、聞クレ道ヲ的ハ悟-性、行フレ文ヲ的ハ筆-性、都テ是レ最-上一-流。
コト　モノヲボヘヨク

『覚後禅』巻一・十ウ

(9)　夫ゝ人道フ、儞モ也タ忒ダ糊塗。　『照世盃』巻三・三オ
ハナハ　ムチヤナ

つまり、白話小説に現われている俗的な言葉に対して、訓訳者は新しい読み方を付けるのではなく、できる限り、文語体の文章に使われており、意味用法が類似している語の読み方を使用したということである。

2.2　新たな表現の出現

一方、数は多くないが、訓訳本には、訓点資料では基本的に用いられない新たな表現が現われる場合もある。その新たな表現は主に三種類に分けられる。一種類目は白話語彙の訓読によって生まれた訓訳本に特有の表現である。

(10)　有ニ個ノ官ゝ人一、姓ハ劉名ハ貴。　『小説精言』巻一・一オ

(11)　這ハ也タ_是先_前不ルニ十ゝ分窮ゝ薄ナラ一的ノ時、倣シ_下ス的ノ勾ゝ當。同上、巻一・一ウ
コレ　シワザ

例(10)における「有ニ個ノ官ゝ人一」について、『小説精言』巻一の巻末に載っている「譯義」(訓訳者の言葉と訳し方に関する解説)には「有ニ一ゝ個ノ官ゝ人一也。一ノ字ヲ省タル語也。凡箇ノ店、个ノ所ゝ在、皆省ゝ語也。」(巻一・二十二オ)と書かれている。つまり、「個」は「一個」の省略された形であると解釈されているのである。「個ノ＋名詞」という表現が訓訳本には随所に見られる。

例(11)の原文における「的」は代表的な白話語彙の一つである。「的」の意味用法は複雑であり、『小説精言』巻二の「譯義」には、次のような指摘がある。

「的」訳廣シ。句ノ中¯間ニ有ル時、之ノ字ノ意アリ。句¯脚ニ有ル時、者ノ字ノ意アリ。又指ス辞アリ、設ル辞アリ、助字ニナル時アリ。トテモト訳ス。語勢ヲ以訳スル也。

『小説精言』巻二・三十四ウ

「句ノ中間」にある「的」、つまり連体修飾用法の「的」は、中国語の文語体の文章における「之」(文中)に対応している。訓点資料では文中の「之」は「ノ」と読まれる、或は「之」の前に「ノ」が補読されるのが一般的である。それに対し、訓訳本の原文における連体修飾用法の「的」は多くは「的ノ」と訓読されており、「的」という字の読みが保留されていた。

(12)　就チ暁リ-得ル、此ノ_人是レ个ノ慣-家了ス(ナレコ)ト。　『覚後禅』巻二・四十四オ

不二但シ是レ菩¯薩ノ(ミナラ)一又是レ神-仙(ナリ)了ス。　同上、巻一・十一オ

例(12)の原文における「了」も白話小説に多用される語である。「ヲハル」或は「リョウ」と読まれる例が多いが、読まない例も見られる(例(13))。

(13)　連(サヘ)テ二那ノ泰¯山¯的ノ寿¯誕ヲ一。也タ都テ忘レ_了ル。　『小説精言』巻一・二オ

忽¯然一¯陣(ヒトシキリノ)ノ冷¯風、大ニ_叫フ一¯聲シテ道、不¯好¯了(コレハタマラヌ)。　『小説粋言』巻五・七ウ

大¯尹道、住(ダマレ)マレ_了、……　『小説奇言』巻四・二十九オ

訓訳本『小説精言』『小説奇言』『小説粋言』及び『照世盃』では、「ヲハル」と読む例が優勢であるが、『覚後禅』では「リョウ」と読む例が圧倒的である。例(12)のように、名詞に付き、肯定の意を表す文末の「了」も「リョウ」と読まれている。「名詞＋了ス」「名詞＋ナリ＋了ス」という、訓訳本における特異な表現と言えよう。

また、訓訳本には例(14)のような「動詞連用形＋起シ来ル」「動詞連用形＋出シ来ル」、例(15)のような「動詞連体形＋コト＋一¯動詞(一字漢語)＋ス」なども現われている。

(14)　他為メニレ何ノ不二稱シレ名ヲ道ハ一レ姓ヲ、却テ説キ二-起シ別-號ヲ一来ル。

『覚後禅』巻一・八ウ

曉ニ_得レドモ是レ兒ー子貪ルヲ一レ色ヲ、再 不レ好ヲニ明カニ説キ_出シ來ルニ一。
ドフモ

『照世盃』巻四・五ウ

(15)　吾カ兄モ也タ該ニ下做テニ箇ノ大老ー官ト一帯ニー挈シテ我カ們ヲ一領ツルコトニ一ー領ス上大ー教ヲ一。
ヲ ヽ タ ン ナ　ツ レ テ

同上、巻一・二十一オ

訓点資料では基本的に用いられない新たな表現の二種類目は、「タ」「ジャ」「ヨ」という、訓訳本と同時期の口語資料には使われている表現である。この種類の例は極めて少なく、「タ」が 5 例、「ジャ」が 7 例、「ヨ」が 20 例しかない。次の例(16)～例(18)はそれぞれ「タ」「ジャ」「ヨ」の用例である。この三つの表現については、第 3 章、第 4 章、第 5 章で詳しく検討する。

(16)　還テ虧テニ蓬 脚ノ收_得ルコト快ニ一、纔ニ拿ニー穩シタ了主ー舵ヲ一。　『照世盃』巻四・九オ
ヨツ　ホツナ　ハヤキ　カ チ ヲ 取 ナ ヲ シ タ

(17)　阮江蘭背ニー著シテ身ー體ヲ一笑_道、好ー箇爲ニニ自ー家ノ一娶ニ老ー婆ヲ一的古ー押ー衙ジヤ。
ア チ ラ ム キ ソ ム ク

同上、巻一、三十一オ

(18)　又一ー個ハ道、只_怕這ノ_雪還テ要スルレ大ヲ哩。　『小説奇言』巻四・二十一ウ
ヨ　マダ

訓点資料では基本的に用いられない新たな表現の三種類目は、訓点資料に用いられている表現と形が同様であるが、意味用法が異なるものである。例えば、文末に使われる終助詞「カ」「ヤ」である。後に「カ」と「ヤ」の性格上の差異を論じるが、ここではまずその特殊な用法の例を示して説明する。

(19)　惟恐クハ少ー年ノ娃ー子走テ到ニ半ー路ニ一、又溜シテ到ルカトニ別ー處ニ一。

『照世盃』巻四・二十六オ

(20)　只_怕ル要ルヤニ你-們償ントー一レ命ヲ。　『覚後禅』巻三・四十一ウ

例(19)は男が、直接家に帰らない甥のことを心配する場面である。ここの「カ」は単に疑問・反語の意を表わす「カ」とは違い、念を押したり、心配したりする気持ちを表わす「かな」に近い。例(20)は、女がもう一人の女に対して、ある美男子についての自分の主張を言

い聞かせる場面である。この例における終助詞「ヤ」は「強意」「誇張」「揶揄」等の意を表し、疑問・反語の意が一切含まれない。

以上の考察から、訓訳本の右訓には次のような特徴があることが分かる。すなわち、全体的には伝統的な訓読表現を継承している。一方で、数は多くないが、訓点資料では基本的に用いられない新たな表現も出現した。

３、訓訳本における左訓の特徴

訓訳本の左訓の性格について、村上(2014)は「訳は、釈義性が第一であり、俚俗性はその中に含まれるのである。つまり釈義性が俚俗性に優先するのである。一斎の訓訳もそうであり、『俗語解』も同様である。ただ全体として訓読語に比べれば口語性に優ることは確かである」[4]と述べている。つまり、訓訳本の左訓は釈義性、俚俗性を有しているということである。釈義性とは原文の表現を解釈・説明しようとする性質のこと、俚俗性とは田舎びて洗練されていない性質のことを表す。本研究では、訓訳本の左訓の特徴として、村上(2014)が指摘した「釈義性」「俚俗性」以外に、「時代性」と「地域性」を挙げる。「時代性」とは当時の実際の言語生活で使用された口頭語を反映しているという性質、「地域性」とはある特定の地域の言葉を頻用する性質のことを指す。訓訳本の左訓が「時代性」と「地域性」を有するということは、近世期に多用されている言葉と表現、或は上方で多用されている言葉と表現が見られることから分かる。なお、村上(2014)において、「左訓」の例としては、二字漢語の左ルビだけ挙げられている。それに対して本研究では、訓訳本における二字漢語の左ルビなど「単語レベル」の左訓の他、「文レベル」の左訓も調査対象とする。以下、例を示しながら、訓訳本の左訓の「時代性」「地域性」及び訓訳本に現われている「文レベル」の左訓を検討していく[5]。

3.1　訓訳本の左訓に見られる「時代性」

訓訳本の左訓には、江戸時代から現われ始める、或いはその時代に特に多用される言葉、表現が見られる。それらの言葉と表現から、訓訳本の左訓における時代性が窺える。例えば、第１章で訓訳本『覚後禅』の刊行時期を論じる際に取りあげた「トボス」「デキル/スルコト

---

[4] 村上(2014)：137

[5] 訓訳本の中国語の原文の左側には、「天¯竺(左訓：寺名)」(『小説奇言』巻五・四ウ)、「江¯淹(左訓：字文通)」(『小説粋言』巻一・六ウ)、「霍小玉(左訓：李益カ妾)」(『照世盃』巻一・二ウ)のような注釈的なものもある。しかし、本研究でいう「左訓」に当たる表現とは性質が異なり、数も多くないため、本研究では対象外とする。

ガデキル」がそれである。それ以外に、「イッタイ」、「タ」、「ヤンワリ」などもあげられる。

訓訳本には、次に示す例(21)のように、中国語の副詞「畢竟」の左訓として、疑問文に使用される「イッタイ」が現われている。

(21)　和-尚道フ、既ニ不ンバ_是レ這ノ二-事ナラ_、但シ所-願ノ者畢-竟是レ何ニ_事ゾ。
イッタイ

『覚後禅』巻一・十ウ

中国語の副詞「畢竟」は一般に疑問を強く相手に伝える場合に使われている。一方、「イッタイ」について、『日本国語大辞典　第二版』には次のように解説されている。

㊀〔名詞〕
① 全体が一つのものになっていること。一つにまとまっていて、分離できないもの。
② (「体」は助数詞)仏像、彫刻の像などの一つ。仏や神そのものにも用いる。
③ 一つの風体。一つの風趣。一つの様式。
④ (「に」を伴って副詞のように用いられることもある)全体。全般。一般。おしなべて。
㊁〔副詞〕
(㊀④の意から)ある事柄を全般的、概括的に考えていうときに用いる。そもそも。
㋑ ある結論づけをするような場合。だいたい。もともと。一般的にいって。
㋺ 特に疑問の気持を強めていう場合。また、相手に詰問する場合。結論的になんだか全くわからないという気持が含まれる。ぜんたい。いったいぜんたい。[6]

つまり、「イッタイ」は、例(21)に見られる疑問文の用法以外に、名詞としての用法もあることが分かる。

訓訳本と同時代の口語の様相を確認するため、近世期の噺本(1613～1854 年)を調査した。「イッタイ」の用例を全部で 39 例を得た。宝暦(1751～1764 年)期以前の噺本における「イッタイ」は全て名詞としての用法の例である(例(22))。

(22)　地蔵を一躰作り、開眼もせす櫃に入、世の営(いとなミ)に粉(まきれ)、程へ忘れけるに、三四年過夢

[6] 『日本国語大辞典　第二版(第一巻)』(2000)：1179

に、大路を過る者、声だかに人をよふ。　『醒睡笑』、1623 年序

老僧の曰、仏神ハもと一躰分身なり、仏神異なりと見るハ、汝がまよふ所なりと云り。

「一休竹斎初而対面」『杉楊子』、1680 年

あるとき地蔵を一躰つくりたりけるを、開眼もせで櫃にうち入て、おくのへやにおさめをき、……　「作仏不入眼」『篭耳』、1687 年

さいわひ夜るの事なれば、人の見知り有まじと思ひ、立像の仏一躰かりとゝのへ、箱持仏堂へ押入つとめけり。　「野郎の金剛念仏講」『軽口露がはなし』、1691 年

にはか道心をこし、新仏一躰のぞミて仏師所へ行、大座後光のせんさく申折ふし、それに付、……　「新仏一躰の望」『軽口露がはなし』、1691 年

副詞として疑問文に用いられる「イッタイ」は安永五(1776)年刊の噺本『夕涼新話集』に初めて見られた(例(23))。

(23)　又いつたい、貴さまハどこの人じやぞいの。　「商売行先」『夕涼新話集』、1776 年

調査範囲内では、訓訳本『覚後禅』以前の資料には、疑問文で使用される「イッタイ」が見られなかった。しかし、中国語の難語を解釈することが、訓訳本における左訓の役割であるから、そこには口語で頻用された表現が選択されやすいと考える。宝暦(1751～1764 年)頃の実際の言語生活では、疑問文に現れる「イッタイ」が既に使用されるようになっていた可能性が高い。その点では、訓訳本の左訓に見られる「イッタイ」は時代性を持つものだと見なすことができよう。

また、訓訳本の左訓には過去・完了の助動詞「タ」が多用されている。過去・完了の助動詞の歴史では、もともと「キ」が使用されていた箇所に「タ」が使用されるようになったということが知られている。この歴史的事実を踏まえれば、訓訳本における左訓に「タ」が使用されていることは、当時の実際の口語を反映しているという時代性を左訓が持っていた、ということを示唆する。過去・完了の助動詞に「バカリ」が付く例の場合を考えてみよう。該当例は、中古に既に見られるが、例(24)に示すように、助動詞「キ」の連体形「シ」に付くものであった。

(24)　今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つる哉

『古今和歌集』(恋歌四)、905 年

近世になると、過去・完了の助動詞の変遷に従い、「タ」に接続する例が現われ始めた。次の例(25)～例(27)は近世期の用例である。

(25)　いかやうになるとても親をも人をも恨みとは思うまいぞ、思やるなと一声言うたばかりにて、誰が物言うても、返事もせず嘆き、……　　『卯月紅葉』(中之巻)、1706 年

(26)　扨鱠をミれバ、大こんざく切たばかりで、なにも子ハなし。

「須見田川」『口合恵宝袋』、1755 年

(27)　こゝの新みせもすだてがてきたばかりで朝今にこうしてあるのう。

『仕懸文庫』、1793 年

訓訳本『照世盃』の左訓にも「～タバカリ」の例が現われている(例(28))。

(28)　這ノ一ˉ句還テ不ニ曾テ説完ラ、大ˉ漢早ク劈ˉ面一ˉ箇耳ˉ掌ニ封ˉ住シ衣ˉ袖ヲ揪_了進_去ル。
タタ一句云タハカリテホカヲイフマモマタズ　テキメン

『照世盃』巻二・十八ウ

「バカリ」が「キに接続する」段階から「タに接続する」段階になったことは、江戸時代の言語使用の様相を反映していると言えよう。

次に、「ヤンワリ」について見ていこう。例(29)は「ヤンワリ」が訓訳本の左訓に現われる例である。

(29)　既ニ然ク如ナラバレ此ノ、那ノ些ノ温-柔的家-数、都テ用ヒ不ト二着シ-了セ一。
ヤンハリ　テカズ

『覚後禅』巻二・三十九オ

例(29)における「ヤンワリ」は「温柔」の左訓として現われており、「やさしい」という意味を表す。近世期における「ヤンワリ」の例は極めて少なく、訓訳本と同時期の噺本(1739～1770 年)には用例が見られない。一方、時代が下った天保十三(1842)年刊の噺本『百面相仕方ばなし』には次のような例が見られる。

(30)　あたまがやくわんで、のせたがちやわんた、中のハ水だぞ、ヤレソレどつこい、こぼ

せバつめたい、やんわり╲╱、テレツク╲╱。「だいかぐら」『百面相仕方ばなし』、1842 年

また、初出である可能性が高い例として、『日本国語大辞典　第二版』に示されている元文元(1736)年初代収月自薦の雑俳集『口よせ草』における例があげられる。

(31)　やんわりとおして痞の御返事　　『口よせ草』、1736 年[7]

用例が少ないため推測の域を出ないが、「ヤンワリ」は近世期に新たに出現した言葉のようである。よって、訓訳本の左訓に「ヤンワリ」が使用されたことも、左訓が時代性を有していたことを示すものであると言えよう。

なお、以下の例(32)～例(35)に示す「マア」、「アカホン」、「ヨミホン」、「ワイ」なども、近世に入ってから使われ始めた、或は近世に多用された言葉である。これらの言葉と表現からも左訓の時代性が窺えよう。

(32)　姐¯夫且ツ將(モチ)二這¯些ノ錢ヲ一云リ。收二¯拾シ起セヨ店¯面ヲ一。　『小説精言』巻一・二ウ
(マア)　(トリツクロヒ)　(ミセツキ)

(33)　做ス二這-部ノ小-説ヲ一的ノ人、原ト具ス二一-片ノ婆-心ヲ一。　『覚後禅』巻一・三ウ
(アカホン)　(シンセツ)

(34)　不下但シ做ス二稗-官野-史ヲ一之人ノミ當ニレ用フ此ノ術ヲ上、就チ是レ經-書-上的ノ聖-賢モ、亦先ツ有リ二行フレ之ヲ者一。　同上、巻一・四ウ
(ヨミホンサウシ)　(ベキノミナラ)

(35)　要スレ誘二¯倒スルコトヲ一¯箇ノ猩¯猩ヲ一、好¯煩難シ哩。　『照世盃』巻三・十九オ
(キツフムツカシイワイ)

3.2　訓訳本の左訓に見られる「地域性」

地域性を持つものには、第１章で言及した「ホンマ」「カカ」の他、「ジャ(指定)」「ヤラ」などがあげられる。

第４章では訓訳本における「ジャ」の使用状況について詳しく述べるが、ここでは「ジャ」の地域性についてのみ指摘する。文末における指定表現「ジャ」は、彦坂(1988)、柳田(2010)で指摘されている通り、江戸時代の口語資料、特に上方語資料で多用されており、江戸で使用された「ダ」と対立関係を有している。訓訳本と同時期の上方版噺本

[7] 『日本国語大辞典　第二版(第十三巻)』(2002)：286

(1739〜1770 年)では、「ジャ」が何百例も見られるのに対し、「ダ」は 5 例しか見られなかった。そして、訓訳本の左訓には「ダ」の例が全く見られないのに対し、上方で多用される文末表現「ジャ」が多く使われている(例(36)〜例(40))。

(36)　我_家ノ珠ー娘ハ是極テ標ー致ー的ナリ了。　『小説精言』巻二・八ウ
キリヤウシヤ

(37)　此ハ_是陰ー徳ノ美ー事、爲ナリレ人ト正ニ該ヘシレ如ナルレ此。　『小説奇言』巻二・十三オ
ヒトハ　ハズジヤ

(38)　正ニ_是正ニ_是。　『小説粋言』巻二・二十八ウ
サフジヤサフジヤ

(39)　未-央-生知-道ス果　然トシテ是-了ス。　『覚後禅』巻二・十四オ
アンノゴトク　ソウジヤ

(40)　一ー箇ノ随ー波逐ー浪的女ー客。　『照世盃』巻一・三十ウ
クレヽノトシタイキカタノ女ジヤ

そして「ヤラ」について、訓訳本の左訓には以下の用例が見られる。

(41)　夜ー半秋ー香向テニ莘ー安ニ一道、與レ君頗ル面_善シ、何ノ_處ニカ曾テ相_會シ來ル。
ドフヤラミタヤウナ

『小説奇言』巻一・十オ

(42)　到テニ島ノ上ー邊ニ一、打スルニ一ー看ヲ一時、四ー望漫ー漫、身如ニ一ー葉ノ一、不レ覺エ悽ー然
ドフヤラモノカナシク

弔ニ一ー下シ涙ヲ一來。　『小説粋言』巻二・十七ウ
タラリト

(43)　慌シ_得テ歐ー滁ー山手ー足無レ措ヲクコト、不レ知ニ朝レ南ニ朝フテニ北ニ一。　『照世盃』巻二・九オ
トチラムイタヤラモシラス

岩井(1974)は、「やら」に関して、

> 語源は「にやあらん」である。これが「やらん」となり、「やら」となった。…(中略)…鎌倉時代には「やらん」のみで、「やら」はまだ成立しない。「やら」は室町時代の新生語で、伝統語「やらん」と並存したが、江戸時代には「やらん」が衰えて、「やら」がこれと交代した。…(中略)…「やら」も上方語で、江戸では使われなかった。江戸で

は「か」を用いる[8]

と述べている。「ヤラ」は時代性と地域性を共に持つ表現だと言えよう。

「ホンマ」「カカ」「ジャ」「ヤラ」など上方で多用されている語が使用されていることから、訓訳本の左訓は、特定の地域の表現を用いるという地域性を持っていることが分かった。

3.3　訓訳本における文レベルの左訓

また、訓訳本には、文レベルの左訓も現われている。このような形式の左訓は、量的には差異があるが、いずれの訓訳本にも見られる。以下、作品ごとに数例を示す(便宜上、原文と左訓だけ示し、訓点を省略する)。

(44)　可又來(マタイフカ)　『小説精言』巻一・十一ウ
　　尊恙好些麼(ゴキシヨクチトヨキヤ)　同上、巻四・七オ
　　多是退不成了(ヤメルコトハナルマイ)　同上、巻四・十一ウ
(45)　就衣罷了(コノママユキテヨシ)　『小説奇言』巻一・三ウ
　　安置(ヲヤスミナサレ)　同上、巻二・六オ
　　説那里話(ナニヲイハルルコトゾ)　同上、巻三・十オ
(46)　且請治事(ゴヨウヲツトメラレヨ)　『小説粋言』巻一・六オ
　　這等造化不成(カクノゴトキシアハセハアルマイ)　同上、巻二・二十二オ
　　好却好、……(ヨイコトハヨイガ)　同上、巻二・二十八オ
(47)　莫非忘記了(ヲワスレナサレタデナイカ)　『覚後禅』巻一・四十五ウ
　　怎麼會忘記(ドウシテワスレテヨイモノカ)　同上、巻一・四十五ウ
　　請收拾起(ドウゾヤメニシテシマイ)　同上、巻二・十三オ
(48)　被迂夫子過了氣這等道學起來
　　(アホフ儒者ニイイマワサレ サヤウニバカカタフナラレタカト)
　　『照世盃』巻一・四オ
　　如何攔街睡著(ドフシテ大道ニネテイタゾ)　同上、巻一・八オ
　　竭力治辨好飲食伺前伺後、要他多吃得一口、心下便加倍快活
　　(美食ヲイロイロニシタクシ ナニトソヨロシク食シテキヲハラシ ゲンキヲツケサセントスル)　同上、巻一・二十七オ

[8] 岩井(1974)：295-296

これらの文レベルの左訓は、当時の実際の言語生活上の言葉で原文を翻訳するものであり、訓読文とは趣を異にする。また、通俗的に訳されたと言われる『通俗忠義水滸伝』(1757～1790 年)などの通俗訳本の訳文とも性格が異なる。

(49)　尚怒テ行處ニ、松ノ樹ノ後ニ、笛ノ音隠々ニ響キ、漸々ニ近ク聞ヘケリ。太¯尉恠ク想ヒ、心ヲ納テ之ヲ見ルニ、一¯箇ノ童子、黄牛ニ横サマニ打_乗、山ヲ過テ太¯尉ノ面前ニ來リ、只_顧鉄笛ヲ吹テ遊行ス。時ニ太¯尉彼道童ニ向テ曰、汝ハ何ヨリ來レリヤ。又我ヲ識リタルヤ。道¯童聞テ大ニ笑ヒ、笛ヲ以テ太¯尉ヲ指シ、汝茲ニ來ル吏、天¯師ニ對面セン為ナリ。我今¯朝草¯菴ノ中ニ在テ、天¯師ノ前ニ侍リケルニ、天¯師我ニ告テ曰、今_都ニ疫癘盛ニ行リ、軍民多ク傷損ス。此_故ニ仁¯宗皇¯帝洪太¯尉ヲ勅¯使トシテ、此ノ山ニ來ラシメ、我ヲ都ニ請待アリ。三¯千六¯百分羅¯天大¯醮ヲ修シメテ、天¯災ヲ禳ヒ瘟病ヲ祈、速ニ民ヲ救玉ハントノ御コト也。……

『通俗忠義水滸伝(上編)』巻之一・四ウ～五オ、1757 年[9]

(50)　王臣山林ノ景致ヲ看、轡ヲ取テ行ニ天色漸ク晩ントスル比、茂林ノ中、人ノ聲有ヲ聴、近進テ看レハ、原来人ニアラズ、却是両箇ノ野狐、古樹ノ邊ニ居リ、手ニ一冊ノ文書ヲ執、相對シテ談笑スル躰也。王臣カ曰、這孽畜甚怪シ、看所ノ書什麽ノ書ナルヤ。他ヲシテ一彈ヲ喫ヘシトテ、……　　『通俗醒世恒言』巻之一・一ウ～二オ、1790 年[10]

例(49)、例(50)を見ると、通俗訳本には、否定を表す際に「ズ」、過去・完了を表す際に「タリ」「ケリ」が使用されている。それに対し、先に示した訓訳本の左訓の例には、否定の場合「マイ」(例(44))「ナイ」(例(47))、過去・完了の場合「タ」(例(48))が用いられている。また、訓訳本の左訓には「ヲ～ナサル」(例(45))、「ドウゾ」(例(47))、「ゴヨウ(御用)」(例(46))などの敬語表現が見られるが、通俗訳本には見られない。白話小説の通俗訳本における訳文は中国語の原文のニュアンスを色濃く反映した漢文訓読調のものである。

一方、江戸時代の唐話教科書として性格を有する唐話辞書には、訓訳本の文レベルの左訓の性格に類似している訳文が既に多く出ていた。江戸時代の代表的な唐話学者の一人である岡島冠山の『唐訳便覧』の例を示す(原文と訳文を示し、訓点と字音を省略する)。

---

[9] 中村(1987)：30-31
[10] 中村(1985c)：12-13

(51)　越更壮健欽羨欽羨(イヨ╲╱オタツシヤニテ、ウラヤマシク候)

『唐訳便覧』巻一・一ウ

幾時動身打點停妥了麼(イヅジブンゴツソクナサルヤ。オシタクハ、トトノヲリマシタカ)　同上、巻一・一ウ

快些回来不可路上住脚(イソイデカエレ。ミチクサヲスルナ)　同上、巻一・一ウ

聽了情由却是有趣(イハレヲキケバ、オモシロヒ)　同上、巻一・一ウ

先に示した訓訳本の文レベルの左訓と唐話辞書における訳文は、両者ともに訓読文のような原文のニュアンスを色濃く反映させた硬い日本語ではなく、分かりやすい自然な日本語が使われている点で共通している。

しかし、このような訳文は訓訳本では断片的なものにすぎない。江戸時代には、完全に当時の言葉で翻訳する白話小説の訳本がまだ世に現われていなかった。白話小説を訓読によって読むことが一般的となったのは明治・大正時代であり、その口語訳への完全移行は昭和を待たなくてはならなかった[11]。そうであるとは言っても、訓訳本の文レベルの左訓から、江戸時代には既に白話小説の口語訳の試みが始まったことが窺えるであろう。

４、訓訳本における二重の言語表現体系

訓訳本には訓読されるものからなる右訓の体系と、当時の口頭語の言葉で解釈されるものからなる左訓の体系がある。右訓と左訓に使われている言葉と表現が異なる性格を呈していることから、訓訳本には二重の言語表現体系が存在していると言える。以下、終助詞を例に、訓訳本における右訓と左訓の性格を見ていく。終助詞を選んだ理由は二つある。一つは、終助詞は疑問、詠嘆、断定といった様々な意を表す表現が豊富であり、互いに比較しやすいからである。もう一つは、他の品詞に比して文体による差異が明らかに見えると考えるからである。

訓訳本の右訓と左訓に現われる終助詞の全体的な使用状況について、それぞれ次の表 1、表 2 に示す[12]。

---

[11] 川島(2010)：336

[12] 右訓は原文の語句を一々訓読したものからなるのに対し、左訓は難解な白話語彙と短文しか訳出されていない。また、各訓訳本の原文の量(文字数)には差がある。そのため、右訓と左訓の終助詞の用例数にも明確な差が見られる。

表 1　訓訳本の右訓における終助詞の全体的な使用状況

	精言	奇言	粋言	覚後禅	照世盃	合計
カ	1	2	5	15	22	45
カナ	0	2	0	0	0	2
ゾ	21	22	20	53	24	140
ゾヤ	3	0	1	0	2	6
ヤ	82	82	52	119	108	443
ヤイナヤ	12	16	11	7	3	49
ヨ	5	6	9	0	0	20
ワイ	0	0	0	0	1	1
ヲヤ	0	1	3	2	0	6
合計	124	131	101	196	160	712

表 2　訓訳本の左訓における終助詞の全体的な使用状況

	精言	奇言	粋言	覚後禅	照世盃	合計
カ	3	5	9	23	11	51
ゾ	1	3	1	3	20	28
ゾヤ	0	0	0	1	0	1
ナ	1	1	0	1	18	21
ヤ	7	7	4	1	4	23
ヤラ	0	0	0	0	3	3
ヨ	0	0	1	0	0[13]	1
ワイ	0	0	0	0	13	13
合計	12	16	15	29	69	141

訓訳本の右訓には 9 種類、左訓には 8 種類の終助詞が確認された。各訓訳本の右訓と左訓に用いられている終助詞には共通しているものもあれば、右訓或いは左訓に特有のものもある。例えば、『覚後禅』について見ると、「カ、ゾ、ヤ」は右訓と左訓に共通するのに

[13] 『照世盃』の左訓には「ママヨ」という慣用句の例がある(1 例、巻四・十三オ)。ここの「ヨ」は単独の終助詞というよりも、慣用句の一部と見なすほうが適切であると考えられる。そのため、表 2 では「ヨ」の例として計上していない。

対し、「ヤイナヤ、ヲヤ」は右訓に特有、「ゾヤ、ナ」は左訓に特有の終助詞であることが分かる。また、『小説精言』の場合、右訓と左訓に共通する終助詞は『覚後禅』と同じく「カ、ゾ、ヤ」であるが、右訓に特有なのは「ゾヤ、ヤイナヤ、ヨ」、左訓に特有なのは「ナ」であった。各訓訳本の間に少し差異があるが、全体的に見れば、全 11 種類の終助詞のうち、「カ」「ゾ」「ゾヤ」「ヤ」「ヨ」「ワイ」は左訓にも右訓にも見られ、「カナ」「ヤイナヤ」「ヲヤ」は右訓にしか見られず、「ナ」「ヤラ」は左訓にしか見られないということが分かる。実際の用例をもとに見ていくことにする。まず、右訓に特有の終助詞「カナ」「ヤイナヤ」「ヲヤ」の用例を示す。

(52)　言_迄テ而終フ、年纔ニ十ニ八耳、哀カナ_哉。　『小説奇言』巻五・十ウ

悲カナ_夫。廣ニ陵ニ散、從リレ茲絶ス矣。　同上、巻五・十一オ

詠嘆を表わす「カナ」は、訓点資料で一般に使われている終助詞の一つであり、主に中国語の助字「哉」「歟」「夫」等の振り仮名として現われる。白話小説には文語的な助字「哉」「夫」等があまり使われないため、訓訳本における「カナ」の用例も少ない。明確に「カナ」と表示されているのは例(52)の二例しか見えない。

(53)　不レ知老-師-父可キヤレ肯ンス二収-納ヲ一否ヤ。　『覚後禅』巻四・四十三オ
（トリイレ）

敢_問客ニ長適ニ間ノ此ノ_審、可シヤレ肯スレ賣否ヤ。　『小説粋言』巻二・二十二ウ
（サキホド）

孫ニ潤ハ還テ在リヤ二你_家ニ一麼ヤ。　『小説精言』巻二・二十九ウ
（マダ）（イナ）

例(53)における疑問の意を表わす「ヤイナヤ」は、先にも述べたが、漢文訓読特有の表現である。

(54)　何ゾ況ヤ不ルヲヤ二曾テ完セ一レ事ヲ。　『覚後禅』巻二・十七ウ

若シ僅ニ活スル三ニ十ニ年、雖レ佛亦不二云テ做ラ一レ他ト、何シテ_況一ニ尼ヲヤ。

『小説奇言』巻五・二オ

「ヲヤ」は、訓点資料で主に「イワンヤ～ヲヤ」という形で用いられる。訓訳本における

「ヲヤ」も、例(54)に示されているように、「イワンヤ」と呼応して現われている。

右訓に特有の三つの終助詞は、いずれも訓点資料で一般的に使われているものであり、文語的な性格が強い。

それに対し、左訓特有の終助詞「ナ」「ヤラ」は口語的な性格が強いと考えられる。

(55)　這ハ也タ是レ往スギサリシコト事。休メヨレ題スルヲ了。　『小説精言』巻一・十九ウ
　　イヒダスナ

　　爹休ヨニ憂ツ慮ヲ一、恁ニ兒一ツ一依テニ爹ノ分ツ付ニ一便ツ了。　『小説奇言』巻三・九ウ
　　キツカヒナサレナ　　イヒツケ

　　老婦ツ人道フ、爾不レレ消イニ發ツ急ヲ一。　『照世盃』巻三・三十ウ
　　キヲセキヤルナ

訓訳本の左訓における終助詞「ナ」は禁止の意を表わし、すべて会話文に現われている。禁止の「ナ」に関して、築島(1965)は「終助詞で、禁止の「ナ」は(に相当する語は、漢文を訓読する際には――筆者注)、「ナカレ」「ザレ」「マナ」などで表はし」[14]と述べている。また、大坪(1981)は「訓讀文では、和文で用ゐるカシ・ナ・ナム・バヤを用ゐず」[15]と述べている。つまり、この禁止の「ナ」は、訓点資料で一般に使われている終助詞とは異なるものである。また、訓訳本と同時期の口語資料では、「ナ」が使用されている(例(56))。このことから、禁止の「ナ」は当時の口語的な性格を反映している語だと言えよう。

(56)　ちいさいこゑで、やかましういふな。めをだましてゆく。
　　「居ねふり」『軽口笑布袋』、1747 年

　　ソレ、たこくい銭やるな。　「他国へ銭不可遣」『軽口東方朔』、1762 年

　　かくすな。アノ妾(せう)は旦那(だんな)がだいてねるのじやといへば、……
　　『軽口片頬笑』、1770 年

次の例(57)は終助詞「ヤラ」の例である。

(57)　我不レ知那ノ些ツ兒得ルヤレ罪ヲ了……　『照世盃』巻三・十五オ
　　ドフシテツミヲエタヤラ

[14] 築島(1965)：708-709
[15] 大坪(1981)：649

この例は、不確かな気持ちをこめた自問に近い表現であり、ここの「ヤラ」は「～のか」に相当するのであろう。岩井(1974)によると、「ヤラ」は室町時代から現われ始め、近世の上方語で多用された口語的なものである[16]。

以上の考察から、右訓特有の終助詞が文語的な性格を持つこと、左訓特有の終助詞が口語的な性格を持つことが分かった。このような性格の差異は右訓と左訓に共通する終助詞からも見られる。例えば「カ」と「ヤ」である。平安時代の訓点資料には、疑問・反語の意を表わす際に「カ」と「ヤ」が併用される。しかし、時代が経つにつれて、「カ」と「ヤ」には性質の上で分化が生じた。

> 文末のヤの文語的傾向は、室町時代のキリシタン物に至ってはっきりとした形になって表れてくる。すなわち文語ではヤ、口語ではカという明瞭な区別が意識として存在し、使い分けられているのである[17]。

そして江戸時代に入ると、このような分化はさらに進み、「文語に用いる疑問の「や」は、…(中略)…當期の實際の口語には廃れてしまつた」[18]とされている。反語の「ヤ」は上方語では「一般の庶民の日常語ではないと思われる。「か」に圧倒されていたはずである」[19]という状況になった。つまり、近世には、終助詞「ヤ」は文語的な性格がかなり強い語になり、「カ」は却って口語的な性格が強い語になったということである。以下の表 3 は訓訳本の右訓と左訓における「カ」と「ヤ」の用例数を示したものである。

表 3　訓訳本の右訓と左訓における「カ」と「ヤ」の用例数

	右訓	左訓
カ	45	51
ヤ	443	23

全体的に見れば、左訓では、「カ」が 51 例、「ヤ」が 23 例と、口語性が強い「カ」のほうが多用されている。右訓では、状況が逆になっており、「カ」が 45 例、「ヤ」が 443 例と、

[16] 岩井(1974)：295-296
[17] 沢田(1964)：260
[18] 湯沢(1982)：605
[19] 岩井(1974)：326

文語性が強い「ヤ」が圧倒的に優勢である。さらに、同じ種類の終助詞であっても、左訓と右訓の接続や意味用法が異なる例も少なくない。例えば「カ」が、右訓に用いられる場合、その前接部は主に次のようなものである。

(58)　始テ作ルレ俑ヲ者ハ、其レ惟聖-人乎カ。　『覚後禅』巻四・五十一オ

我レ還タ是レ拒-絶スル的好キカ、収-留スル的好キカ。　同上、巻三・三十五オ
コトワル

惟恐クハ少ー年ノ娃ー子走テ到ニ半ー路ニ一、又溜シテ到ルカトニ別ー處ニ一。
『照世盃』巻四・二十六オ

例(58)に示すように、「カ」は名詞(聖人)に接続する場合、形容動詞語幹(好き)に接続する場合、動詞(到る)に接続する場合がある。
左訓に用いられた場合、

(59)　難-道是レ假-丢シテ騙スルレ我ヲ不-成。　『覚後禅』巻四・十三オ
ナ ン ト　ソラヤリ　デアロウカ

莫シヤレ非ルレ不ルニニ是老ー爹ー爹ノ親ー筆ナラ一。　『小説奇言』巻三・十六オ
デ ハ ナ イ カ

我カ兒外ー面ノ光ー景好ー看ナル麼ヤ。　『照世盃』巻三・九オ
ヲモシロカツタカ

前接部はそれぞれ「デアロウ」「デハナイ」「ヲモシロカツタ」である。「デアロウ」「デハナイ」「ヲモシロカツタ」は当時の口語資料で使われた表現であり、文語性の強い漢文訓読資料では使わない。

他の例を挙げると、終助詞「ゾ」は、接続だけではなく、左訓と右訓の意味用法が異なる場合もある。

(60)　適ー來在テレ此ニ看ルレ書ヲ的ハ、是レ什_麼人ゾ。　『小説奇言』巻一・十二ウ
イマガタ　イカナル

(61)　上ー前シ一ー把ニ扯住シ喊シ道フ、捉ニ一ー住ス拐ー子ヲ一了。　『照世盃』巻二・二十三ウ
ス ヽ ン テヒ　ソ　ツカマヘ　ワメキイフ　カタリヲツカマヘタゾ

右訓における「ゾ」は概ね疑問、詠嘆の意を表わす。例(60)は疑問の用法の例であり、前接部は名詞「人」である。しかし、例(61)における「ゾ」は、過去の助動詞「タ」に接続しており、話し手が自分の判断、感情を強めて相手に知らせる強意用法を表す。このような「ゾ」は、右訓には見られない。

以上の考察によって、訓訳本の右訓に使用されている終助詞は全体的に文語的な性格が強く、左訓に使用されている終助詞は口語的な性格が強いことが確認できた。このような差異は終助詞にしか見られないのではなく、過去・完了の助動詞、文末表現等にも見られる。つまり、訓訳本には、右訓による文語的な性格と左訓による口語的な性格という、性格が異なる二つの言語表現体系が並存していると言えよう。

５、おわりに

以上、訓訳本に使用されている言葉と表現の考察を通して、近世における白話小説訓訳本の全体的な特徴を明らかにした。訓訳本の右訓に現われている言葉と表現はほぼ伝統的な訓読表現を継承している。しかし、数は少ないが、訓点資料に見られない新たな表現「個ノ」「的ノ」「ナリ了ス」「タ」「ジャ」「ヨ」なども出現した。それに対して、訓訳本の左訓には、「俚俗性」「釈義性」以外に、「時代性」「地域性」も見られる。また、文レベルの左訓も現われている。文レベルの左訓には訓読文のような原文のニュアンスを色濃く反映した硬い日本語ではなく、分かりやすい自然な日本語が使われている。文レベルの左訓から白話小説の「口語訳」の初期段階の様相が窺える。また、訓訳本の右訓と左訓に使われている終助詞の比較を通して、右訓と左訓は性格上に差異が見られることが確認できた。すなわち、右訓は全体的に文語性が強いのに対し、左訓は口語性が強い。このように、訓訳本には性格が異なる二重の言語表現体系が存在している。

訓訳本の性格をさらに明らかにするために、訓点資料に見られない新たなものに注目すべきだと考える。特に右訓に現われる口語的な表現「タ」「ジャ」「ヨ」については、さらなる調査が必要となるであろう。これらについては次章以降で詳しく論じる。

第３章　近世の白話小説訓訳本に見られる過去・完了の助動詞「タ」について

１、はじめに

古典文法の過去・完了表現には、「リ」「タリ」「ツ」「ヌ」「キ」「ケリ」という六つの助動詞があるが、現代では「タ」に収縮されている。近世の漢文訓読における過去・完了の助動詞の使用状況について、齋藤(2011)では次のように述べられている。

> 漢文訓読文において、過去・完了の助動詞「キ」・「ケリ」・「ツ」・「ヌ」・「タリ」・「リ」の六語のうち、「ケリ」は平安時代に入ってからは使われないのが普通であり、江戸時代においても、やはり「ケリ」は使われていない。[1]
>
> ○　キ・ツ・ヌ・タリ・リの五語のうち、リが最も多く補読される。
> ○　タリもリほどではないが、近世を通じてよく用いられている。
> …(中略)…
> ○　ツ・ヌ・キ・ジは後期の資料になるとその数が減少する。
> ○　特にツは後期の資料では使われていない
> …(中略)…
> ○　後期においても、復古的な資料ではキ・ツ・ヌも使われており、鈴木朖の訓読ではキが多く用いられている。[2]

つまり、近世の訓点資料では、「リ」の多用、「ケリ」の不使用が特徴的であり、「キ」「ツ」「ヌ」の使用には減少傾向が見えるということである。しかし、白話小説訓訳本の右訓には、「リ」「タリ」「キ」「ツ」「ヌ」以外に、数は少ないが、口語的な過去・完了の助動詞「タ」の用例も見られる。

本章では、白話小説訓訳本における過去・完了の助動詞「タ」の使用状況を中心に調査し、訓訳本と同時期の口語資料との比較を通して、訓訳本の右訓の特徴を述べる。

２、訓訳本の右訓における過去・完了の助動詞「タ」の使用状況

本節では、訓訳本の右訓における過去・完了の助動詞の全体像を示し、その右訓に現われる「タ」の使用状況を考察する。また、訓訳本の右訓における「タリ」の使用状況も観察し、

---

[1] 齋藤(2011)：100
[2] 齋藤(2011)：103

右訓の「タ」と「タリ」の相違点を指摘する。

2.1　訓訳本の右訓における過去・完了の助動詞の全体像

訓訳本の右訓に使われている過去・完了の助動詞の全体的な使用状況を表 1 に示す。

表 1　近世の白話小説訓訳本の右訓における過去・完了の助動詞の用例数と分布

	小説精言	小説奇言	小説粋言	覚後禅	照世盃	合計
タ	1	0	0	0	4	5
タリ	7	20	38	16	15	96
キ	17	10	14	8	18	67
リ	2	17	10	3	20	50
ツ	0	0	0	7	3	10
ヌ	1	0	1	0	3	5
合計	28	47	63	34	63	235

訓訳本の右訓には「リ」「タリ」「ツ」「ヌ」「キ」「タ」という六つの助動詞が見られる。全体的には、「タリ」が一番多く、次いで「キ」・「リ」・「ツ」・「タ」「ヌ」の順となっている。「ケリ」の不使用は近世の訓点資料の特徴と共通しているが、訓訳本の右訓における「タリ」の使用頻度が「リ」より高いという点で、近世の訓点資料と異なる。さらに、訓点資料に用いられない「タ」も訓訳本の右訓に使用されている。過去・完了の助動詞「タ」は全部で 5 例であり、そのうちの 1 例は『小説精言』に、残りの 4 例は『照世盃』に現われている。

2.2　訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」の使用状況

訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」の用例を次に示す。

(1)　只_見養¯娘進_來_道ク、…(中略)…見ル劉¯大¯娘拿テ二大¯棒¯子ヲ一拷二¯打シ姑¯娘ヲ一、逼マリ二_問ハレ這ノ事ヲ一哩タ。　『小説精言』巻二・二十二オ

(2)　大¯家都テ跑二_到岸¯邊ニ一道フ、想ニ_是レ大¯魚跳ツタ的響ナラン。
ミ　ナ

『照世盃』巻三・二十九オ～二十九ウ

(3)　太ー公暗ー喜シ道フ、…(中略)…還テ(ヨツ)虧テ(ホツナ)ニ蓬 脚ノ収_得ルコト快(ハヤキ)ニ一、纔ニ

拿(カ)ニ(チ)ー穏(ヲ)シタ(取)了主ー舵(ナ)ヲ(ヲ)一。(シ)(タ)　同上、巻四・九オ

(4)　忽_見一ー班(ム)ノ無ー賴(レ)後(ノ)ー生舜(ド)ー擁シテ進_來テ説キ_道フ、…(中略)…谷大官ー人來テ照(ラワカイモノドモ)ニ(ニ)ー顧ス

ル爾ノ新ー坑ヲ一、也タ是レ好ー意ナルニ、為ニレ何ノ就チ得タレ罪ヲ。　同上、巻四・三十五オ

(5)　穆文光大ニ(ニ)ー著シ膽ヲ一也タ進ミ(ミ)ニ(ニ)這ノ小ー屋ニ一來テ一ー看ス。還テ喜不ルコトヲ(ルコトヲ)ニ(ニ)敢テ深ク入ラ一、原

ー來這ノ屋ー裡ハ就チ是レ谷樹皮カ掘ツタ的官ー坑。　同上、巻四・三十六ウ

例(1)の「タ」は中国語の語気助詞「哩」の振り仮名として現われている。会話文に用いられ、「トハレル(問われる)」[3]に付く。例(2)の「タ」は女の話に現われ、「ヲドル(跳る)」に付く。例(3)は「太公」という人物が心に思っていることを述べるものである。「タ」は動詞「拿穏スル」に接続する。例(4)の「タ」は会話文の例であり、動詞「エル(得る)」に接続する。そして例(5)は地の文の例である。「還喜(幸いに)」「原來(なるほど)」などの語から、これは説明的で硬い文ではなく、やや口語的な地の文であることが分かる。例(5)の「タ」の前接語は「ホル(掘ル)」である。

つまり、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓に現われている過去・完了の助動詞「タ」はほとんど話し言葉に現われ、それぞれ異なる動詞に接続しているということである。

2.3　訓訳本の右訓における「タリ」の使用状況

本節では、訓訳本『小説精言』『照世盃』、及びその他の訓訳本の右訓における「タリ」の使用状況を見ていく。『小説精言』には 7 例、『照世盃』には 15 例の「タリ」が見られる。まず、『小説精言』の例を示す。

(6)　又因下捨テ(ム)ニ_不ニ上レ得你ヲ一、只典シ(ダ)ニ_得タリ十ー五ー貫ノ錢ヲ一。　『小説精言』巻一・四オ

(7)　但_是空(コノタビ)ニ(ム)ー費セシム他ニ這ー番ノ東西(モノ)ヲ一、見_得タリ我_家没シレ有ニ(ヲモヒヤリノギリ)情ー義一。

同上、巻二・九オ

(8)　一ー個ー個人ー材表ー表、氣ー勢昂ー昂、十ー分ニ(リ)齊ー整(ツ)ナリ(バ)。怎_見_得タル。同上、巻三・三オ

---

[3] 括弧内は現代語表記である。

(9)　和¯尚道、説モ也タ奇¯怪。小¯僧昨¯夜得タリ二一¯奇¯夢ヲ一。　同上、巻三・五オ

(10)　血_流テ遍シレ地ニ、其_實ハ堪ヘタリレ傷ムニ。　同上、巻三・九オ

(11)　朱¯世¯遠見テ二女¯婿カ三¯分ハ像ニレ人ニ、七¯分ハ像ニタルヲ一レ鬼ニ、好¯生不レ悦。
イ カ フ

同上、巻四・十三ウ

(12)　陳¯小¯官¯人全ク得二他カ殷¯勤ニ伏¯侍スルヲ一、怎ンカ見得タル。　同上、巻四・二十オ
ネンゴロ カシツク

例(8)、例(10)、例(11)、例(12)は地の文の例であり、例(6)、例(7)、例(9)は会話文の例である。また、『小説精言』の右訓における「タリ」は「エル(得る)」に付く場合が一番多く、5例見られる。残った2例はそれぞれ「タヘル(堪える)」「ニル(似る)」に付く。

次の例(13)～例(27)は訓訳本『照世盃』の右訓における「タリ」の用例である。

(13)　吾カ兄出二¯遊ス山¯陰ニ一、可三曾テ訪二_得タル一両¯箇ノ麗¯人ヲ一。『照世盃』巻一・九ウ
タ ツ ネ　ビ ジ ン

(14)　先ツ自二¯通シ名¯姓ヲ一道フ、我ハ是レ阮相公、儞縁テレ何ニ忘レタル了。

同上、巻一・二十五オ

(15)　父¯母道フ、孩¯兒儞倒テ忘レタルレ記スル了。　同上、巻一・三十ウ

(16)　那ノ少¯年近¯前シ問_道フ、儞這ノ蠻¯子聲¯口像タリ是レ外¯方ニ一、有二甚ナニノ縁¯故一、快ク些
コハツキガ 他 所 モ ノ ラ シ イ

説キ來ル。　同上、巻二・十九オ

(17)　歐滁山道フ、我曾テ受二_過恩¯恵ヲ一、反テ又罵レ他覺_得タリ不ルコトヲ好二相¯見ニ一。

同上、巻二・二十一ウ

(18)　夫¯人仔¯細ニ將二衙内一看ルコト一¯看シ道フ、儞カ的衣¯帽那¯裡ニ去了。怎_麼換カヘタル二這¯箇
ヲ　イカニシテ

ノ巾¯服ニ一。　同上、巻三・九オ

(19)　大¯叫シ起_來道フ、這ノ門是レ那¯箇ガ開ケタリ的。　同上、巻四・八オ
タ レ カ

(20)　那先¯生開¯講シ道フ、…(中略)…爾カ們想ニ已ニ得タラン二其ノ大¯概ヲ一。

同上、巻四・十六オ～十六ウ

(21)　飛¯手夜¯叉看¯見シ了道フ、…(中略)…只輸ケタル後不レレ要二懊悔ヲ一。

同上、巻四・四十一ウ

(22)　意¯中輾¯轉道フ、…(中略)…聞ニ_得タリ越ノ地産ストニ名¯妹ヲ一、……
ビ ジ ン

同上、巻一・四ウ

(23)　阮江蘭汗_流テ浹レ背、如ニ大_夢ノ方醒タルカ一。　同上、巻一・三十二ウ

(24)　歐滁山簇¯新做ルニ游¯客ト一、何ソ得タルニ如レ此獲¯利ヲ一。　同上、巻二・三ウ
ア ラ タ ニ

(25)　聽_得タリ裡面環¯珮叮當、……　同上、巻二・九オ
ヲ ヒ モ ノ ヒ ビ キ

(26)　破レタル交¯椅七¯横八¯竪　同上、巻二・二十一オ

(27)　碎ケタル紙¯牕萬片千¯條　同上、巻二・二十一オ

15 例のうち、9 例(例(13)～例(21))は会話文に、1 例(例(22))は心話文に、5 例(例(23)～例(27))は地の文に現われている。また、その前接語については、「エル(得る)」が 6 例、「ワスレル(忘れる)」が 2 例、「サメル(醒める)」「ニル(似る)」「ヤブレル(破れる)」「クダケル(砕ける)」「カヘル(換える)」「ヒラク(開く)」「マケル(負ける)」がそれぞれ 1 例ずつとなっている。『小説精言』に比して地の文の使用が少ないが、「エル(得る)」に接続する例が多い点では共通している。

『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」と「タリ」は、いずれも「タリ」の例数が優勢であるが、地の文とそれ以外の文での使用状況には大きな差が見られない。接続の面では、「タ」が様々な動詞に付くのに対し、「タリ」は前接語の種類が少ない。

『小説精言』『照世盃』以外の訓訳本における「タリ」の使用状況の調査結果は次の通りである。

＜文種について＞

『小説奇言』: 地の文 15 例、会話文 5 例

『小説粋言』: 地の文 22 例、会話文 13 例、心話文 2 例、独話文 1 例

『覚後禅』: 地の文 15 例、会話文 1 例

＜接続について＞

『小説奇言』:「エル(得る)」10 例、「ニル(似る)」8 例、「タエル(堪える)」1 例、「ウエル(飢える)」1 例

『小説粋言』:「エル(得る)」25 例、「ニル(似る)」11 例、「タエル(堪える)」1 例、「ヘル(経る)」1 例

『覚後禅』:「ニル(似る)」13 例、「エル(得る)」1 例、「ナス(為す)」1 例、「ナレル(馴れる)」1 例

つまり、『小説精言』『照世盃』以外の訓訳本の右訓における「タリ」は、地の文に多用されており、「エル(得る)」「ニル(似る)」「タエル(堪える)」という共通の動詞に接続することが多い、ということが分かる。

以上をまとめると、訓訳本全体の傾向として、右訓に使われている「タリ」は、「タ」と比べて全体的に地の文に偏っており、ほとんどが「エル(得る)」「ニル(似る)」(訓訳本全 96 例のうち、「エル(得る)」は 47 例、「ニル(似る)」は 34 例)など、特定の語に付く傾向があると言えよう。

３、訓訳本と同時期の口語資料における過去・完了の助動詞「タ」「タリ」の使用状況

3.1　訓訳本の左訓における「タ」「タリ」の使用状況

第２章で指摘した通り、訓訳本の左訓に使われる言葉や表現には、口語性、時代性が見られる。そのため、訓訳本の左訓を江戸時代中期の口語資料の一種として扱うことができると思われる。

まず、訓訳本の左訓に現われている過去・完了の助動詞の全体像を見てみよう。

表２　近世の白話小説訓訳本の左訓における過去・完了の助動詞の用例数と分布[4]

	小説精言	小説奇言	小説粋言	覚後禅	照世盃	合計
タ	5	6	0	40	128	179
タリ	23	28	38	4	28	121
キ	3	2	2	0	1	8
リ	0	0	1	0	0	1
ツ	0	0	0	0	0	0
ヌ	0	0	1	0	2	3
ニケリ	1	0	0	0	0	1
合計	32	36	42	44	159	313

[4] 『照世盃』の左訓には「タラ」が 2 例見られる(会話文 1 例、地の文 1 例)。しかし、「タリ」の活用形として分類するか「タ」の活用形として分類するか判断に揺れが生じるため、表 2 では全用例数として計上していない。

訓訳本の左訓は合計 313 例あり、そのうち、「タ」と「タリ」が最も多く使用されている。それぞれ 179 例、121 例見られる。

『小説精言』の左訓における「タ」は 5 例であり、全て原文が会話文の場合に現われている(例(28)～例(32))。

(28)　那ノ_人便チ道ヲモヘラク、一ハ不レ做サ、二ハ不レ休マ、却テ_是 你_來テ趕レ我ヲ、
セ ネ バ セ ヌ　スルカラハシトクル　ソ チ カ ラ シ カ ケ タ

不二是我來テ尋ル一レ你ヲ。　『小説精言』巻一・六ウ
コ チ カ ラ ハ シ カ ケ ヌ

(29)　府ニ尹大_怒、喝シテ道、胡ニ説、世ニ間不レ信セレ有ヲ二這ニ等ノ巧ニ事一。
コノヤウナ　マニアフタ

同上、巻一・十五オ

(30)　喝一ニ聲シテ道、不二是我ナラ一、便チ是レ你ナリ。　同上、巻一・二十オ
ヲ ホ ゴ エ　コチカラハシカケヌ　ソチカラシカケタ

(31)　三ニ老連ニ聲ニ道ク、領スレ命ヲ領スレ命ヲ。　同上、巻四・八ウ
コ コ ロ ヘ タ

(32)　便チ_道ク、我_兒你ノ枕ニ頭齷ニ齪シ了ル。我拿リ_去テ與ニレ你カ折キ_洗ハン。
マ ク　ラキタナクナツタ　ホドキ

同上、巻四・二十ウ

接続について見ると、「シカケル(仕掛ける)」2 例、「ココロヘル(心得る)」1 例、「ナル(なる)」1 例、「マニアフ(間に合う)」1 例である。

一方、『小説精言』の左訓における「タリ」は「タ」より多く、23 例見られる。そのうちの 13 例は地の文、9 例は会話文、1 例は心話文に使われている。地の文の例では中国語「只見」の左訓の位置に現われるのが 4 例である(例(33))。

(33)　只_見跳ニ_出シ一ニ個ノ人ヲ一來。　『小説精言』巻一・十七オ
トミタレバ

只_見一ニ人醉倒テ在レ床ニ、脚ニ後ニ却テ有二一ニ堆ノ銅ニ錢一。　同上、巻一・十九ウ
トミタレハ　カサネ

只_見ル行ニ李十ニ分華ニ麗、跟ニ隨ノ人役、箇ニ箇鮮ニ衣大ニ帽。　同上、巻三・四ウ
トミタレハ　トモマハリ

只_見兩ニ口ニ兒都テ倒テ在二地ニ下ニ一。　同上、巻四・二十五ウ
トミタレハ

会話文と心話文の「タリ」を1例ずつ示す（例(34)、例(35)）。

(34)　劉¯媽¯媽道フ、…(中略)…我_家ノ干¯係ハ大ナルソヤ_哩。　『小説精言』巻二・八オ
コチノミニカカリタルハ

(35)　暗_道ラク、這¯些ノ和¯尚ハ是レ山¯野¯的ノ人、収二_了テ這ノ殘¯盤剰¯飯ヲ一、必¯然聚リ_喫スル一¯番ナラン。　同上、巻三・九ウ
コノリタル

『小説精言』の左訓の「タリ」の前接語には「ミル(見る)」4例、「ミエル(見える)」4例、「スル(する)」「コロス(殺す)」「キル(切る)」「カカル(係る)」「ソル(剃る)」「ヲキル(起きる)」「コナシタダラカス(熟し爛らかす)」「アリアハセル(あり合わせる)」「ノコル(残る)」「テヲフ(手負う)」「タテル(建てる)」「ノコス(残す)」「ヲボヘル(覚える)」「カク(書く)」「イキル(生きる)」各1例が見られる。

『小説精言』の左訓における「タ」と「タリ」の使用状況は、「タリ」が多用される点と「タ」が会話文で使用される点が特徴的である。これは、『小説精言』の右訓の「タ」「タリ」の特徴と共通している。しかし、右訓では「タリ」の前接語が特定の語に集中していたのに対し、左訓では「タリ」の前接語の種類が多い、という点で異なる。

『小説精言』に対し、『照世盃』の左訓では「タリ」より「タ」のほうが圧倒的に優勢である。「タ」は128例見られ、そのうちの55例は地の文、65例は会話文、4例は心話文、4例は独話文に現われており、地の文以外の例も多い。前接語の種類が多く、動詞(「スル(する)」「シマフ(しまう)」「ナル(なる)」「モドル(戻る)」「ヲトス(落す)」など）以外に、形容詞「ヲモシロイ」「ヨロシイ」に接続する例も1例ずつ見られる(例(36)～例(37))。

(36)　夫¯人看¯見シ便チ問_道フ、我カ兒外¯面ノ光¯景好¯看ナル麽ヤ。　『照世盃』巻三・九オ
ヲモシロカツタカ

(37)　杜景山道フ、…(中略)…還テ是レ他ハ多ク占二_些ノ便¯宜ヲ一。　同上、巻三・三十三ウ
アツチハ甚タカツテカヨロシカツタ

『照世盃』の左訓における「タリ」は28例見られる。会話文に現われるのが9例であり、残った19例は全て地の文の例である。また、「ニル(似る)」に付く例が一番多く、4例である。それ以外に、「スグレル(優れる)」「ウケル(受ける)」「ソナヘル(備える)」「アリフレル(あり触れる)」「ハナス(話す)」「ワラフ(笑う)」などの前接語が見られる。つまり、『照世盃』の右訓と左訓における「タ」と「タリ」は、

①　右訓には「タリ」が、左訓には「タ」が多用されている
②　右訓の「タ」と「タリ」はいずれも地の文以外の例数が多いが、左訓の「タ」は会話文・

心話文・独話文に、「タリ」は地の文に偏っている
③　右訓の「タ」と左訓の「タ」の前接語の種類がさまざまである点で共通している。それに対し、右訓の「タリ」の前接語は特定の語に限られているが、左訓の「タリ」にはそのような制限がない

という相違点と共通点を持っていると言える。

『小説精言』『照世盃』の右訓と左訓に現われる「タ」と「タリ」の使用状況には一致していない所がある。これが訓訳本全体の中でどのような意味を持つのかを把握するために、他の訓訳本も併せて確認する必要があると考える。『小説奇言』『小説粋言』『覚後禅』の左訓における「タ」「タリ」の地の文や会話文などでの使用状況の調査結果を、次の表 3 に示す(便宜上、『小説精言』『照世盃』の結果も示す)。

表 3　訓訳本の左訓における「タ」と「タリ」の地の文や会話文などでの用例数

		小説精言	小説奇言	小説粋言	覚後禅	照世盃	合計
タ	地の文	0	0	0	11	55	66
	会話文	5	6	0	25	65	101
	心話文	0	0	0	4	4	8
	独話文	0	0	0	0	4	4
タリ	地の文	13	19	32	1	19	84
	会話文	9	8	6	3	9	35
	心話文	1	1	0	0	0	2
	独話文	0	0	0	0	0	0

『小説奇言』の左訓における「タ」は「タリ」より少なく、全て会話文に現われている。「タリ」は地の文の例が優勢であり、そのうち半分ぐらいは「トミタレバ」の形である。

(38)　只_見ル城ニ中一ニ隻ノ船ニ兒、揺シ_將モチ出_來ル。　『小説奇言』巻一・三オ
トミタレバ

『小説粋言』の左訓には「タ」が見られない。「タリ」の場合、38 例のうち、32 例が地の文に現われる。また、そのうち「トミタレバ」の形が 19 例見られる。

(39)　只_見ル満ー地鋪レ金ヲ、枝ー上全ク無二一ー朶一。　『小説粋言』巻一・十オ
トミタレバ　スキト

『覚後禅』の左訓には、40 例の「タ」があり、そのうちの 11 例は地の文、25 例は会話文、残りの 4 例は心話文に現われている。また、この三つの訓訳本の左訓における「タ」と「タリ」の前接語はさまざまであり、重複している例はあまり見られない。

以上をまとめると、五つの訓訳本の左訓は、「タ」が地の文以外の文に、「タリ」が地の文に多用されること、「タ」と「タリ」の前接語の種類が比較的に多いことが共通している。

3.2　噺本における「タ」「タリ」の使用状況

次の表 4 は訓訳本と同時期の噺本に使用されている過去・完了の助動詞の状況を示したものである。一番多く使われる過去・完了の助動詞は「タ」である。「タリ」の例数は「タ」の 30 パーセントに満たない。

表 4　訓訳本と同時期の噺本における過去・完了の助動詞の用例数と分布[5]

	軽口初売買	軽口福おかし	軽口新歳袋	軽口耳過宝	軽口若夷	軽口へそ順礼	軽口瓢金苗	軽口笑布袋	軽口浮瓢単	軽口腹太鼓	軽口豊年遊	軽口東方朔	軽口扇の的	軽口はるの山	軽口片頬笑	合計
タ	86	90	81	118	39	78	60	67	89	96	79	14	47	48	101	1093
タリ	15	10	10	9	19	16	8	23	41	32	5	53	25	17	27	310
ケリ	87	47	39	79	98	70	27	35	66	48	86	73	35	97	47	934
キ	15	17	31	20	39	17	16	2	27	23	54	32	29	5	54	381
リ	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	10
ツ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
ヌ	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	0	2	1	0	5	13
合計	203	166	162	227	199	181	111	127	223	201	224	180	138	167	234	2743

[5] 噺本には 24 例の「タラ」が見られ(『軽口初売買』3 例、『軽口新歳袋』4 例、『軽口耳過宝』2 例、『軽口瓢金苗』1 例、『軽口笑布袋』4 例、『軽口浮瓢単』2 例、『軽口腹太鼓』1 例、『軽口はるの山』1 例、『軽口片頬笑』6 例)、全て会話文に現われる。全用例数には「タラ」の用例数が含まれていない。また、噺本には複数の助動詞が複合した形「タリキ」8 例、「タリケリ」14 例が見られる。これらについて本章では 1 つの助動詞ごとに分け、それぞれ「タリ」「キ」「ケリ」の用例として数える。つまり、複数の助動詞が複合した形から、それぞれの助動詞の数を数えると「タリ」22 例、「キ」8 例、「ケリ」14 例になるということである。

噺本における「タ」と「タリ」について、まず、地の文や会話文などでの使用状況を確認する。「タ」の場合、1093 例のうち、484 例は地の文、600 例は会話文、6 例は心話文、3 例は独話文に現われている。地の文における「タ」は主に「といわれた/といはれた」「といふた/とゆふた/というた」という形で、噺の最後に現われている(例(40)～例(42))。

(40)　心ハの。もふけがついたといわれた。　「はつあきなひ」『軽口初売買』、1739 年

(41)　其方から今出てゐに増といふた。　「福都房」『軽口新歳袋』、1741 年

(42)　手代あきれて、けふハ廿二日でござりますとゆふた。
「物わすれの会」『軽口瓢金苗』、1747 年

地の文の 484 例のうち、345 例はこのような形である。「といわれた/といはれた」「といふた/とゆふた/というた」という文末表現は、「上方軽口本特有の叙述形式」[6]だと言われている。これらの例を除けば、地の文の例は 139 件しか残らず、地の文以外の文における「タ」の例数(609 例)に比してかなり少ないと言えよう。

それに対し、「タリ」の場合、全体的に地の文の例が優勢である。310 例のうち、地の文は 233 例、会話文は 71 例、心話文は 6 例、独話文は 0 例である。地の文に多用される点では、噺本は訓訳本の右訓と一致している。以下に噺本の地の文、会話文、心話文における「タリ」をそれぞれ 1 例ずつ示す。

(43)　少将も仕かかりたる恋なれば、雨の夜も風の夜も、……
「かくれ蓑笠」『軽口耳過宝』、1742 年

(44)　されバこそ、大事の事をしられたり。われより先に見た人がいろ／／とよみくづし、根から葉からよめぬやうにしてのけた。　「飛きやく」『軽口腹太鼓』、1752 年

(45)　大におどろき、是ハ間違で、はけぞこないたると心得、……
「ひきがいる」『軽口東方朔』、1762 年

一方、接続の面では、「タ」は「言う」「言われる」に付く場合が多いが、残りの例については重複が少なく、前接語の種類が豊富だと言える。また、形容詞に接続する例も多少見られる(例(46)～例(48))。

[6] 藤井(2016)：50-53

(46)　先年(せんねん)は西国(さいこく)中国(ちうこく)の虫入(むしいり)にて、五幾(き)七道(とう)まで米(こめ)が高(たか)かつたが、……

「あらし山(やま)」『軽口新歳袋』、1741 年

(47)　むすこ、いいや、おもしろかつた。　「なるこ参(まい)り」『軽口若夷』、1742 年

(48)　ざん念(ねん)な、おそかつた。もはやふとんをかけて見せなんだ。

「こたつ」『軽口はるの山』、1768 年

「タリ」の場合、「いる」に接続する例が一番多く、32 例ある。その次は「出る」であり、14 例現われる。その他に、「知る」「見る」「見える」「付く」「破れる」など百種以上の前接語が見られ、訓訳本の右訓と比べると多様性が認められる。

以上をまとめると、訓訳本と同時期の噺本に使われている過去・完了の助動詞「タ」「タリ」には、次のような特徴があると言える。まず、「タ」が圧倒的に優勢で、その用例は会話文に偏っており、前接語の種類が豊富である。一方、「タリ」は前接語が多様である点で「タ」と共通するが、「タ」よりはるかに用例数が少なく、地の文に偏る傾向が見られる。また、訓訳本の右訓における「タ」「タリ」と比べると、「タ」が地の文以外の文に、「タリ」が地の文に多用される点で共通している。しかし、噺本の「タリ」が多種多様な語に付くのに対し、訓訳本の右訓の「タリ」は特定の語に接続する傾向があるという差異も見られる。

４、まとめ――「タ」から見る訓訳本の右訓の性格

以上、訓訳本の右訓に現われている過去・完了の助動詞「タ」について、訓訳本の右訓における「タリ」の使用状況と比較した。そのうえで、訓訳本の左訓、同時期の噺本における「タ」「タリ」と比較した。訓訳本の右訓、左訓、噺本に現われている「タ」は、いずれも会話文・心話文など地の文以外の文に使用される傾向があり、さまざまな語に接続する。一方、「タリ」については、右訓・左訓・噺本それぞれにおいて地の文で多用されていること、訓訳本の左訓と噺本の「タリ」の前接語が多様であるのに対し、訓訳本の右訓の「タリ」はほとんど「エル(得る)」「ニル(似る)」など特定の語に付くことが分かった。

訓訳本の右訓と口語資料に現われている表現は、形が同様であっても、文体の異なりから用法には差異があることが予想できる。しかし、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓に口語的な「タ」が使用されること、右訓と口語資料における「タ」の用法がほぼ一致していることから、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓は当時の口語からの影響を受けていたことが窺えよう。

第４章　近世の白話小説訓訳本に見られる文末表現「ジャ」について

１、はじめに

本章では文末表現「ジャ」の使用状況を通して、訓訳本の右訓の性格を明らかにしていきたい。

文末表現「ジャ」は「ニテアリ」から来ている。「ニテアリ」が「デアル」になり、さらに「ル」が略された「デア」が音変化したものである。この「ジャ」が江戸時代の口語資料で多用されている[1]ことは周知の事実である。本居宣長著『古今集遠鏡』には次のような記述が見え、「ジャ」の口語性と俚俗性が指摘されている(下線は筆者による)。

> なり　なる　なれば　ヂャと訳す、ヂャはデアルのつづまりて、ルのはぶかりたる也、さる故に、東の国々にては、ダといへり、なりももとにありのつづまりたるなれば、俗言のヂャ　ダともと一つ言也　　『古今集遠鏡』端書、九オ

「ジャ」が訓訳本の中で、口語性の強い左訓の位置に現われるのは自然である。しかし、訓訳本『照世盃』においては、文語的性格が強いはずの右訓にもこのような口語性と俚俗性を持つ文末表現「ジャ」が現われる。もちろん、原文は口語に近い白話で書かれたものなので、一定の範囲内でこのような口語的な表現が右訓に現われることも容認されうる。しかし、『照世盃』以外の訓訳本と比べると、その右訓に現われる「ジャ」の特異性が明白になる。次の表 1、表 2 を見てみよう。

表１　近世の白話小説訓訳本における文末表現「ジャ」の用例数と分布

		小説 精言	小説 奇言	小説 粋言	覚後禅	照世盃	合計
ジャ	右訓	0	0	0	0	7	**7**
	左訓	1	2	4	5	28	**40**

[1] 飛田・遠藤（2007）：453

表２　近世の白話小説訓訳本の右訓における断定を表す文末表現の様相（肯定の場合）

		小説精言	小説奇言	小説粋言	覚後禅	照世盃	合計
タリ系	タリ	1	0	1	1	0	3
ナリ系	ナリ	113	100	67	87	4	574
	也？[2]	2	27	13	46	9	
	ナル	7	7	14	11	18	
	ナラン	6	12	5	7	19	
ジャ系	ジャ	0	0	0	0	7	7
ゾ系	ゾ	0	0	0	0	3	3
その他	ナリ了ス	0	0	0	10	0	24
	了ス	0	0	0	14	0	

表１によれば、文末表現「ジャ」はいずれの訓訳本の左訓にも見られる。しかし、右訓に現われるのは『照世盃』しかない。また、表２によれば、『照世盃』以外の訓訳本の右訓に使用されている断定を表す文末表現（肯定の場合）には「ナリ系」[3]が 524 件、「タリ系」が３件、「その他」が 24 件ある。「ナリ系」「タリ系」は訓点資料に慣用されている文末表現であり、訓訳本と同時代の唐話辞書[4]にも使われている。いずれの資料でも、「ナリ系」が優勢で、「タリ系」が劣勢である状況を呈している。また、どの資料においても、「ジャ」の用例は見られない。

以下、訓訳本『照世盃』の右訓に見られる７例の「ジャ」を中心に考察していく。具体的に言えば、まず、「ジャ」の使用場面及び使用者を観察する。次に、右訓における「ジャ」

[2] 訓訳本には「ナリ」と読むか否か断言できない「也」がある。これらの「也」を訓訳本の文末表現として扱うべきかどうかは疑問である。ここでは一応文末表現の一種と見なし、「ナリ系」に入れることとする。

[3] 本研究では終止形「ナリ」（「也」）、未然形「ナラ」、連体形「ナル」などを合わせて「ナリ系」と呼ぶ。「タリ系」も同様である。

[4] 調査した漢文資料：文之点（『大魁四書集註』、寛永九（1632）年、早稲田大学図書館所蔵）、道春点（『四書集註』、寛政三（1791）年、国立公文書館所蔵）、石斎点（『四書集註大全』、慶安四（1651）年、国立公文書館所蔵）、仁斎点（『論語古義』、明治三十二（1909）年、国立国会図書館所蔵）、惕斎点（『四書示蒙句解』、元禄十四（1701）年、早稲田大学図書館所蔵）、春台点（『論語古訓正文』、宝暦四（1754）年、国文学研究資料館所蔵）

調査した唐話辞書：『唐話纂要』享保元（1716）年、『唐音雅俗語類』享保十一（1726）年、『唐譯便覧』享保十一（1726）年、『唐話便用』享保二十（1735）年（『唐話辞書類集　第６集』『唐話辞書類集　第７集』所収）

また、白話小説の通俗訳本については岡田（2006：354-399）を参照されたい。

以外の文末表現（特に「ナリ」）及び左訓における文末表現の使用状況と比較して、右訓に現われる「ジャ」の特徴をまとめる。最後に、『照世盃』以外の訓訳本の左訓、及び訓訳本『照世盃』の刊行時期の前後に出版された噺本における「ジャ」と「ナリ」の使用状況を確認する。それによって、訓訳本の右訓に使用されている「ジャ」「ナリ」と口語性の高い資料における「ジャ」「ナリ」の共通点と相違点を述べ、白話小説訓訳本『照世盃』の右訓の性格を指摘する。

２、本章で取り扱う調査資料

本章で取り扱う主な調査資料は、『照世盃』を含む五つの白話小説訓訳本、及び訓訳本『照世盃』の前後に刊行された上方版の噺本（『軽口豊年遊』宝暦四(1754)年、『軽口東方朔』宝暦十二(1762)年、『軽口扇の的』宝暦十二(1762)年、『軽口はるの山』明和五(1768)年、『軽口片頬笑』明和七(1770)年）である。

３、訓訳本『照世盃』に見られる「ジャ」の使用状況と特徴

3.1　『照世盃』の右訓に見られる「ジャ」の使用場面と使用者

右訓の「ジャ」は、全て送り仮名の位置にあり、原文には「ジャ」と対応する語（例えば、「也」など）が見られない。また、右訓の「ジャ」は、次の例(1)以外は、全て会話文に現われる。

(1)　那班ー衙ー門裡ノ朋ー友最モ好ク結レ交ヲ、他也不レ知ニ道甚麼（ナニカ）是レ名ー士シヤト云コトヲモ一、但見テ
カノヤクシヨ中ノ
ニ扇ー子上ニ有ルヲニ一ー首ノ歪（ヘタナ）ー詩一、儞モ也稱レ好ト我モ也道レ妙ト。　　『照世盃』巻二・三ウ
タレモカレモホメル

例(1)の原文は作者の解説であり、地の文である。例(1)の「ジャ」は「甚麼（ナニカ）是レ名士ジャ」という下級役人が心に思っていることを述べる心話文に現われる。その使用者は下級役人と見なすことができよう。

以下の 6 例は聞き手が存在する会話文である。会話文の「ジャ」は概ね身分の高くない話し手が、聞き手の陳述或いは質問に対して答える形で現われる。また、話し手と聞き手は初対面の人ではなく、知り合いである。

(2)　阮江蘭背ニ¯著シテ身¯體ヲ一笑_道、好¯箇爲ニ二自¯家ノ一娶二老¯婆ヲ一的古¯押¯衙ジヤ。
（アチラムキソムク）

『照世盃』巻一・三十一オ

(3)　金有方道フ、主¯客ハ雖二是レ好ト一的、聞_得他ハ某ノ處ニテ輸二_公千¯金ヲ一、某ノ處ニテ又被ル
ト三人ニ贏二公ラ房¯産ヲ一、近¯來ハ也タ是レ一¯箇ノ蹋¯皮兒ジヤ哩。　同上、巻四・二十六ウ
（ワイ）

(4)　朱春輝道フ、爾看ヨ、這ノ起ノ推¯髻セル婦¯女ノ手¯内ニ捧二¯着セルハ珊¯瑚ヲ一的、都テ是レ國¯
（ムレ）
内ノ官¯家大¯族ノ的夫¯人小¯姐ジヤ。
（ムスメ）

杜景山道フ、好大¯珊瑚、眞ノ寶¯貝ジヤ了。　同上、巻三・二十二オ
（タカラ）

(5)　若シ斷二¯絶セハ門¯徒ヲ一、活¯活ニ要二餓¯殺ヲ一我レ這ノ有ル二鬍¯子一的和¯尚ジヤ了。
（ヒゲ）

同上、巻四・九オ

例(2)は話し手が以前惚れていた女と話をしている場面である。話し手は、女の「あの方の親切を誤解しないでください。彼は押衙[5]のようないい人です」という発話に対して返答している。話し手の阮江蘭は郷試に及第し「解元」になったばかりの書生である。聞き手は以前、話し手と親密な関係を有していた女であり、二人の地位は対等である。例(3)では、話し手は、賭博に行こうとする友人が、ある金持ちを狙っていることを聞く。そして、友人にその金持ちの人物の現状を教える場面である。例(3)の話し手金有方は意地悪い秀才であり、さらに賭博にのめりこんで、自分の甥さえ騙した人物である。聞き手は話し手と常に一緒に賭博をやる友人である。例(4)は、安南国で他郷出身の二人が、安南国の国王が聖僧を迎えるという鑾駕の通過の様子を見ている場面である。例(4)には二つの「ジャ」が見られる。一番目の「ジャ」の使用者朱春輝は安南国の風習に詳しい者である。二番目の「ジャ」の使用者杜景山は、地方官に意地悪され、仕方なく地方官が要求した商品を仕入れに安南国に来た者である。朱と杜は安南国で知り合いになった。二人とも身分の高くない小商人である。例(5)は話し手が不適当な言論で衆人の怒りを買った際の発話である。話し手は村に公衆便所を造って人の排泄物を肥料として売る人であり、聞き手は公衆便所に来る、話し手の

[5] 唐人の伝奇小説『無双伝』に現われる人物である。『無双伝』は、高官の娘劉無双が、争乱によって父を失い、後宮へ入れられたが、幼なじみの王仙客や、古押衙の力で後宮から出て、仙客と添いとげる物語である。後に、「古押衙」は義侠のことを指すようになった。

近所の人々(村民)である。話し手と聞き手の間には地位的な差がないと言える。

以上の例における「ジャ」の使用状況とやや違う例も見られる。

(6)　訓蒙先生道ヲ、這レハ是レ齒爵堂ト云三箇ノ字ジヤ。　　『照世盃』巻四・三ウ

例(6)は文盲の者が看板に書いてある文字の読み方を尋ねたのに対し、訓蒙先生が「これは齒爵堂というのだ」と答える場面である。例(6)の話し手訓蒙先生は、子どもや初心者を教えさとす者である。聞き手は例(5)の話し手、すなわち公衆便所を造る者である。話し手の地位は聞き手より高い。また、二人が初対面かどうかは例(6)の箇所からだけでは不明である。しかし、ここより後の箇所に、聞き手の息子に関する「一向ニ在テ蒙館ニ讀ムレ書ヲ」という記述が見られることから、二人が知り合いであると推測できる。ここの「蒙館」は恐らく訓蒙先生が物事を教えるための場所であろう。訓蒙先生が「蒙館」で聞き手の息子に物事を教えている点から、聞き手と訓蒙先生は知り合いである可能性が高い。話し手と聞き手の地位は対等ではないが、互いに知り合いであることが確認できる。

以上、『照世盃』の右訓に現われる文末表現「ジャ」の使用場面と使用者を考察した。白話小説に登場する人物は、五つの訓訳本に見られるように、書生、小商人、農民など官位や爵位を持たない一般階層の者が多数であるが、まれに和尚、大商人、官吏などが見られる。いずれも社会的地位は低い。『照世盃』の右訓に現われる七つの「ジャ」の使用者はそれぞれ下級役人、(官位を持っていない)書生、賭博愛好者の秀才、小商人、糞売りしている文盲、訓蒙先生であり、(王族、貴族、官吏、豪商など一定の社会的地位を有していない)一般階級の者に偏っていると言える。また、以上の考察から、聞き手は主に話し手と対等な地位にある人物であり、話し手の知り合いであることも分かった。

次節では、『照世盃』の右訓に現われる「ジャ」以外の文末表現、特に訓点資料及びその他の訓訳本に多用される伝統的な文末表現「ナリ系」の使用状況を調査し、「ジャ」と比較する。

3.2　『照世盃』の右訓に見られる「ジャ」以外の文末表現の使用状況

『照世盃』の右訓には、断定を表す「ジャ」以外に、「ゾ」「ナリ」も併用されており、文末が体言で終わる例も少なくない。「ゾ」、「ナリ」、体言で終わる例は地の文でも一定数使用される。しかし、ここでは会話文・心話文に使われる「ジャ」と比較するため、地の文の例を対象外とする。また、会話文・心話文に使われる断定を表す文末表現には、「体言止め」

が一番多いが、その使用場面にはあまり傾向が見られなかったため、これらの例についても特に言及しない。

「ゾ」は3例見られる。

(7)　正ニ要スルトキハレ動ントレ手ヲ、那ノ一ー箇下ー路ノ朋ー友止ー住シテ道フ、盟ー兄不レレ須イニ造ー次ニ
トリサヘ　ソマツシテレナ
スルコトヲ一、這レハ是レ敝ー同社江蘭兄ト云人ゾ。　『照世盃』巻一・二十ウ
ワシガトモタチ

(8)　見ニ差ー官出一來ヲ一道フ、爾眞ニ是レ天ー大ノ福ー分。不レ知老ー爺爲ニレ何ノ切ー骨ニ恨ミシレ爾ヲ、
バクタイノ　キツフ
見ニ一了猩ー絨ヲ一、冷ー笑スルコト一ー笑ヲ道フ、是レ便ー宜ト、那ーノ狗ー頭就チ拿ニ一出一ー封ノ銀ー子ヲ一
差官ヲ賤シテテ云ノ語
來テ説ク、是レ給(ママ)ー與スルノ爾ニ一的官ー價ゾ。　同上、巻三・三十五ウ

(9)　杜景山問一道、這レハ是レ甚一麼ノ故ー事ゾ。
朱春輝道フ、是レハ他ノ們國ー裡ノ的鄕ー風ゾ。　同上、巻三・二十二オ

ここの「ゾ」は「コレ(ハ)<体言>ゾ」という形で、体言の後に付き、断定を表す。断定の「ゾ」について、春日(1968)ではその口語性が指摘されている[6]。口語的な「ゾ」は、訓訳本では『照世盃』の右訓にしか見られない文末表現であり、同じく口語的な性格を有している「ジャ」の使用状況とは、大きな差がないようである。

一方、『照世盃』の右訓における文末表現「ナリ」(「ナル」「ナラ(＋ン)」も含む[7])は41例である。そのうち、6例は地の文、33例は会話文、2例は心話文に現われる。終止形「ナリ」は次の例(11)の1例のみである。

(11)　三ー太爺大ー喜シ道フ、這ノ段ノ姻ー縁絶ー妙ナリ的了。　『照世盃』巻二・十五ウ

例(11)の話し手は高齢の「三太爺」という人物である。「三太爺」は他人に対して、自分は元地方官の弟であると紹介したが、実は偽者である。その正体は詐欺を常習とするグループの一員である。しかし、例(11)で「三太爺」が聞き手にその話をした際は、その偽装がまだ見破られていなかったので、発話時の話し手はまだ「元地方官の弟」と見なしてよい。聞

[6] 春日(1968)：179
[7] 振り仮名が付されない「也」は、「ナリ」と読んでいるかどうか確かではないので、対象外とする。

き手は富裕な女性と結婚したがる書生である。話し手は官吏の家族として、そして高齢者として、目下の書生に対して話す際に、「ナリ」を使用した。話し手と聞き手は初対面ではないが、親しい関係でもない。連体形「ナル」、未然形「ナラ(＋ン)」の例を次に示す。

(12)　阮江蘭嘖ˉ嘖羨ˉ慕道フ、……豈ニ是レ尋ˉ常脂粉ナランヤ。　『照世盃』巻一・三ウ
　　キ ツ フウラヤミ　　ユクナミノヲナゴ

(13)　杜景山聽得果ノ是嚇ˉ呆シ了、問_道、店ˉ官怎_麼ソ煩ˉ難ナル。同上、巻三・十九オ

(14)　朱春輝道フ、……今ˉ日想ニ是レ迎テレ他ヲ到ニ宮ˉ裡ニ一去ルナラント。
　　ソレ
同上、巻三・二十一ウ

(15)　訓蒙先ˉ生道フ、可シ三是レ要スルナルレ寫スルコトヲニ門ˉ聯ヲ一麼ヤ。　同上、巻四・四オ

(16)　徐管家道フ、…(中略)…也タ須ク下通ニˉ知シ他ニ一做シテレ主ト纔ニ妙ナル上。
　　シ ラ セ　　セ ワ ヲ サ セ
同上、巻二・十三オ

(17)　樂多聞道フ、…(中略)…當ˉ日相ニˉ約スルニ同ˉ舟ヲ一、何ノ故ニ拒ˉ絶スルコトノ過ˉ甚ナル。
同上、巻一・二十一オ

(18)　知ˉ縣罵_道、虧テニ爾カ讀レ書ヲ識ルノレ字的童ˉ生ニ一、輕ˉ易ニ便チ想ニ殺スナランレ人ヲ。
同上、巻四・四十五ウ

例(12)～例(18)は会話文の例である。例(12)～例(15)の話し手は「ジャ」を使用する者でもある。例(16)における「ナリ」の使用者はある家の執事、例(17)は一般民衆、例(18)は官吏である。話し手と聞き手の親疎関係について、相対的に親しい例もあれば(例(14)、例(17)など)、親しいとは言えない、或は疎い例もある(例(13)、例(18)など)。次の例(19)、例(20)は心話文の例であり、使用者「杜景山」は小商人である。

(19)　杜景山道フ、…(中略)…且ツ走_上前テ要レ緊ナラント。　『照世盃』巻三・二十七オ
　　ハヤクモシツテユキタイ

(20)　杜景山道フ、…(中略)…我レ杜景山怎_麼ソ這_等命ノ苦ナル。同上、巻三・二十七オ
　　カヤフニ

以上をまとめると次のようになる。『照世盃』の右訓における「ジャ」の使用者は身分のあまり高くない一般階級の人物である。それに対し、右訓における文末表現「ナリ」の使用者には、一般階級の者、または、一般階級より少し高い、一定の社会的地位を有した者(官

吏及び官吏の家族など)があり、あまり傾向が見られない。また、「ナリ」の場合、聞き手と話し手との親疎関係にも偏りがないようである。

3.3　『照世盃』の左訓に見られる「ジャ」の使用状況

『照世盃』の左訓には、終止形「ナリ」だけでなく、未然形「ナラ」、連体形「ナル」さえ見られなかった。一方、「ジャ」は 27 例ある。左訓の「ジャ」は、多くは会話文、心話文或いは独話文に現われるが、作者が読者と仮に対話するという会話風の語り調を取る場合、地の文に現われる例もある(例(21)は会話文、例(22)は心話文、例(23)は独話文、例(24)は地の文である)。

(21)　阮江蘭指ユビサシテ¯著門¯外ヲ_ 罵_道、……若シ論セハ_ 畹娘ヲ_、也只好シ算ス_ 一¯箇ノ隨¯波逐¯浪ノ的女¯客ヲ_。　『照世盃』巻一・三十ウ
クレ＼／トシタイキカタノ女ジャ

(22)　又想_道フ、撞_ 着シ這些ノ女¯妖ニ_ 被ルヽモ_ 他ニ迷¯死セ_ 了、…(中略)…眞ニ無¯名無¯實、白ムダ¯白シニ醒シテ_ ¯齷シマフノセントジャ了身¯体ヲ_。　同上、巻三・二十七ウ

(23)　嘆ナゲ¯口キ氣シテ道フ、窮イノ¯性チ命要シマイス_ 葬ジャ¯送シテ在ルコトヲ_ 這ノ安南ノ¯南土トナル國ニ_ 了テアロ。
同上、巻三・二十一オ

(24)　若シ果¯然喪_ ¯盡シ廉¯耻ヲ_、不レ顧_ 頭¯面ヲ_ 倒テ索マシジャ¯性。　同上、巻三・二十八ウ

『照世盃』の左訓に現われる「ジャ」の使用者は作者、読者も少数見られるが、ほとんどは名妓、所の者[8]、書生、小商人、小商人の妻、下級役人、官吏の妻など一般階級に属する者である。また、会話文の場合、話し手と聞き手とは対等な地位にあり、親しい関係であるのが多数である。特に例(25)、例(26)のような例も見られる。同じ話し手と聞き手における初対面の会話では「デゴザル」が使用される(例(25))が、少し馴染むと「ジャ」になる(例(26))。これは親しい関係である場合に「ジャ」が用いられることを示す証拠であろう。

(25)　徐¯管¯家道フ、……至テハ_ 于内裡ノ囊橐ニ_、都テ是レ揚¯州ノ奶¯奶掌¯管シ
内シヤウノ財宝ハシト奶奶カウケトツテイラレマスカ

[8] 本研究ではその土地に住んでいる一般民衆を指す。

、也勾受二¯用スルコトヲ半世ヲ一。　『照世盃』巻二・七オ
スエノ六十日ハユル＼／クラ●マルコトデゴサル

(26)　徐管家道フ、小¯的モ也タ不二曉リ_得一、奶¯奶モ還タ不下曽テ説二出シロニ一來ラ上、

為メレ礙¯著スルカ三¯大爺在ルニ二這ノ裡ニ一。　同上、巻二・十三オ
三大爺ガイラルルカジヤマナルニヨツテジヤ

以上の調査結果から、『照世盃』の右訓における「ジャ」の使用上の傾向はその左訓における「ジャ」にも見られることが分かった。しかし、『照世盃』の左訓には「ナリ系」文末表現が見られなかった。そのため、このような「ジャ」と「ナリ」の使用上の差異が、『照世盃』の右訓にしか見られない独特なものであるのか、或いは同時期の口語からの影響を受けたものであるのか判然としない。この点を明らかにするには、『照世盃』と同時期の口語資料を調査する必要があると考える。

４、『照世盃』と同時期の口語資料に見られる「ジャ」と「ナリ」

『照世盃』と同時期の口語資料として、訓訳本の左訓と噺本の用例を観察する。噺本の調査範囲は会話文、心話文、独話文に限る。

4.1　『照世盃』以外の訓訳本の左訓に見られる「ジャ」と「ナリ」

訓訳本『小説精言』には「ジャ」「ナリ」、『小説奇言』には「ジャ」「ナリ」「ナル」「ナラン」「デアロ」、『小説粋言』には「ジャ」「ナリ」「デアラフ」、『覚後禅』には「ジャ」「ナリ」「デアラフ」「デアル」「デゴザリマス」がある。つまり、『照世盃』以外の四つの訓訳本の左訓には「ジャ」と「ナリ」が並存しているということである。

「ジャ」の使用状況について具体的に言えば、『小説精言』の左訓に現われる「ジャ」は1例であり、平民の家の乳母の心話文に使用される。『小説奇言』は2例であり、小さい店の店主の話に現われる。話し手と聞き手との関係は親しい。『小説粋言』は4例であり、全て小商人の話に現われる。そのうち、2例は、聞き手が売買で話し手と知り合いになった例であり、残った2例は、以前知り合った者の妻が聞き手である例である。そして『覚後禅』は5例である。1例は書生の心話文に現われ、残った4例はそれぞれ名高い盗賊、書生、書生、官吏の妻の話に現われる。それぞれ話し手と聞き手の関係は友人関係または男女関係である。つまり、訓訳本の左訓における「ジャ」の使用状況は以上述べた『照世盃』の右訓、左訓における「ジャ」の傾向とほぼ一致していることが分かる。

一方、左訓に現われる「ナリ」の使用者については次に示すように、「官吏」の例もあれ

ば、「所の者」「使用人」の例もあり、あまり傾向が見られないようである。

『小説精言』(7 例)：所の者 4 例、小商人 1 例、和尚 1 例、官吏 1 例
『小説奇言』(11 例)：官吏 4 例、所の者 3 例、金持ち 2 例、子供 1 例、書生 1 例
『小説粋言』(6 例)：小商人 5 例、所の者 1 例
『覚後禅』(2 例)：書生 1 例、使用人 1 例

その聞き手には目下、対等及び目上の者がおり、話し手と親しい関係を持つ者も見られる。さらに、同一人物でも、二つ以上の文末断定表現が使用される例もある。

(27)　呂客人想ヒ了ル一回シテ道、是了是了、……　　『小説粋言』巻五・二十一ウ
（シアン　サフジヤ　サフジヤ）

(28)　呂大叩頭シテ道、……見フ我カ久シク出テ不ヲ一レ歸ラ、也タ該シ三有レ人來テ問フ個ノ消息ヲ一。若シ査ギンミシイダサハ二出セハ被ルルコトヲ一レ毆二傷セ命ヲ一、就チ該シ下到二府縣ニ一告ツゲコトハル理ヲ上。……
（ハズナリ　ハズナリ）
『小説粋言』巻五・二十二ウ

例(27)の話し手「呂客人」と例(28)の話し手「呂大」は同じ者である。一方、聞き手は、例(27)では知り合いの妻であり、例(28)では地方官である。この二つの例から見ると、左訓における「ジャ」と「ナリ」の使い分けは、使用者の身分によるのではなく、話し手と聞き手の地位差、親疎関係及び訓訳者の言語使用などに関係しているようである。

要するに、『照世盃』以外の訓訳本における左訓「ジャ」の使用状況は、『照世盃』の「ジャ」の使用状況とほぼ同じ傾向を有していると言えよう。一方、『照世盃』とそれ以外の訓訳本における「ナリ」の使用状況、特に位相の差については、まだ明らかではない。訓訳本の左訓は断片的な訳文からなるものであり、用例も少数であるため、断言することができないという点で注意が要る。次節では噺本の状況を見ていく。

4.2　噺本に見られる「ジャ」と「ナリ」

次の表 3 は噺本における「ジャ」と「ナリ」の用例数と分布を示したものである。

表 3　噺本における「ジャ」と「ナリ」の用例数と分布

	軽口豊年遊（1754 年）	軽口東方朔（1762 年）	軽口扇の的（1762 年）	軽口はるの山（1768 年）	軽口片頬笑（1770 年）	合計
ジャ	16	12	17	31	50	**126**
ナリ	0	16	1	4	13	**34**

全体的には「ナリ」より「ジャ」の出現頻度が高い。

『軽口豊年遊』（1754 年）には「ナリ」の例が見られなかった。「ジャ」は 16 例あり、その使用者は所の者（10 例）、丁稚（5 例）、小僧（1 例）である。会話文の場合、話し手と聞き手とは地位的に差がない例がほとんどであり、友人、近所の人、主従関係など親しい関係の例数がやや多い。

(29)　去る人、錦を通りしに、ふやにさま〳〵のふあり。…（中略）…はて、ごはんただのふじやといふ。　「ふやの口合」『軽口豊年遊』、1754 年

(30)　でつちもうすやうハ、是ハ福神じや。すてんとをきなされませとゆう。　「捨大黒」『軽口豊年遊』、1754 年

(31)　小僧まかりいでて、…（中略）…それハしれた事。かたつてきかそ。いづくのうらても金をもたぬものは、太皷もちじやといわれた。　「太皷もちの由来」『軽口豊年遊』、1754 年

『軽口東方朔』（1762 年）では「ジャ」より「ナリ」のほうが多い。しかし、その使用者の階層はいずれも差が大きい。「ナリ」の使用者は所の者（7 例）、粋なる客（2 例）、亭主/小商人（2 例）、家主（1 例）、富人（1 例）　、遊女（1 例）、小僕（1 例）、乞食者（1 例）であるのに対し、「ジャ」は所の者（7 例）、家主（2 例）、粋なる客（1 例）、氏神（1 例）、妖怪（1 例）である。会話文の場合、話し手と聞き手の地位差及び親疎関係にもあまり傾向がないようである。

(32)　女郎も心すまず、御気にいらぬ故に契り給ハざるならんとうらみけれバ、……　「女郎に契らぬ客」『軽口東方朔』、1762 年

(33)　こつじきさてもおそいあさめし也とそしりけれハ、……　「あさめし遅」『軽口東方朔』、1762 年

(34)　主人こたへて、ハテ、十ぜんのくらいを、ねんがけるゆへじや。　「てうてき」『軽口東方朔』、1762 年

(35)　其夜氏神まくらもとにあらわれ給ひ、なんぢが願ハ、しりのつまらぬものじや。
「若衆の願立」『軽口東方朔』、1762 年

『軽口扇の的』(1762 年)には「連体形ナル＋助詞ガ」という形が 1 例、西国辺の金持ちの話に現われる。聞き手は鍔屋の主であり、話し手とは初対面の関係である。「ジャ」の使用者には所の者(12 例)、家主(3 例)、小商人(1 例)、下僕(1 例)がおり、親しい関係を持つ者の会話が多数である。

(36)　西国辺のかねもち、……鍔を買てのち咄しに、我らハ西国方の者なるが、……
「分限譲の事」『軽口扇の的』、1762 年
(37)　彼老愚、ろくにのミこミもせで、聞えた。扨ハひばりがさがれは声もひくふなるといふ道理と同じことじやの。　「合点のゆかぬ人の事」『軽口扇の的』、1762 年
(38)　ていしゆ腹をたて、ときも時おりも折、にくゐやつめかなと、すなハちやねよりひきづりをろし、せめて方角ハどこらじや。　「助蔵火事見る事」『軽口扇の的』、1762 年

『軽口はるの山』(1768 年)における「ナリ」の使用者は侍(2 例)、庄屋(1 例)、所の者(1 例)であり、「ジャ」の使用者は所の者(28 例)、丁稚(1 例)、乞食者(1 例)、幽霊(1 例)である。そして『軽口片頬笑』(1770 年)の「ナリ」の使用者は所の者(3 例)、亭主(2 例)、医者(2 例)、大名の息子(2 例)、大名(1 例)、隠居(1 例)、出家(1 例)、閻魔王(1 例)、「ジャ」の使用者は所の者(40 例)、鬚奴(2 例)、手代(1 例)、店の者(1 例)、亭主(1 例)、家主(1 例)、浪人(1 例)、庄屋(1 例)、隠居(1 例)、儒者(1 例)である。『軽口はるの山』及び『軽口片頬笑』の会話文における「ナリ」の場合、話し手と聞き手の地位差及び関係には偏りが見られないが、「ジャ」の場合、地位が対等で親しい関係を持つ仲間同士のほうが一般的である。

(39)　さる大名の御家中に、ことの外しハきさふらい衆ありけるか、江戸下りに男にいゝ付らるゝをきけバ、いよ＼／明日江戸へ下るなり。供ハその方壱人なり。……と申さるゝ。　「道中のかんりやく」『軽口はるの山』、1768 年
(40)　近所のものあつまりて、扨々おびたゝしい事じや。あれは何になる事じやといふを、……　「車にあんど」『軽口はるの山』、1768 年
(41)　若殿聞し召、武士のうらかへるとハ不吉の詞也。気がゝりなれば、表がへなされたきよし也。　「大名のしわんぼ」『軽口片頬笑』、1770 年

(42)　息子(むすこ)が、それハあまり足もとを見た直段(ねだん)じや。高(たか)けれど親(おや)の事じや。壱貫(くわん)で頼(たの)むといふ。　「足もと見る井戸替」『軽口片頬笑』、1770 年

まとめると、訓訳本『照世盃』の刊行時期前後の噺本における文末表現「ジャ」の使用者は、いずれの資料でも所の者、亭主など社会的地位が高くない一般階級に集中している。また、会話文の場合、話し手と聞き手の関係は対等な地位にある知り合いの例が優勢である。そして「ナリ」の場合、その使用者には富人、医者、庄屋、大名のような一定の社会的地位を有している者もあれば、乞食者、所の者など一般階級の者もあり、あまり傾向が見られない。また、「ナリ」の使用者と聞き手の地位差及び親疎関係にも特別な傾向が見られない。これは『照世盃』の右訓及び訓訳本の左訓における「ジャ」「ナリ」の使用状況と共通していると言えよう。

５、まとめ――「ジャ」から見る訓訳本の右訓の性格

以上、訓訳本『照世盃』に見られる文末表現「ジャ」を中心に考察を行った。右訓の「ジャ」は主に一般階級の者の話に現われる。そして、その聞き手は話し手と対等で親しい関係を持つ者である。このような傾向は訓訳本の左訓及び同時期の噺本における「ジャ」に共通している。つまり、右訓における「ジャ」は、噺本で使用されるような当時の口語が、白話小説の訓読として現われたものである可能性を指摘できる。言い換えれば、『照世盃』の右訓には当時の口語からの影響が見られるということである。

また、文末表現「ナリ」について調査した結果、いずれの資料でもあまり特別な傾向が見られないことが分かった。しかし、『照世盃』の右訓と同時期の噺本における「ジャ」「ナリ」の用例数の多寡には差異が見られる[9]。すなわち、『照世盃』の右訓では「ナリ」が優勢、「ジャ」が劣勢であるが、噺本では逆になった。

「ジャ」と「ナリ」の使用について、佐藤(1995)には次のような論述がある。

> 中世後期、指定のナリは衰退を始め、未然形や已然形は条件法に関わるものが中心となり、連用形はほとんど使われなくなった。タリの衰退は一層顕著であり、文語的な文体

[9] 訓訳本の左訓は当時使用された表現の意味用法などを観察することができるが、あくまで断片的な訳文であるため、その使用頻度などの観察が難しい。よって、左訓における「ジャ」と「ナリ」の多寡が、当時使用された言葉と表現そのものの反映であるとは必ずしも言えないと考えられる。また、噺本の場合、口語資料といっても、それぞれの作品の間に文体差が存する。筆者の調査によると、『軽口東方朔』に使われる言葉と表現は他の噺本と比べると、文語性がやや強いと言える。「ジャ」より「ナリ」が多用されるのは文体によるところが大きいと思われる。

において用いられるだけとなり、その一方でニテ・デ(アリ)やヂャは勢力を拡大し、指定の中心的用法となった。

近世前期にはナリは一層勢力を弱め、並列用法の終止形ナリ、接続助詞化したナラバ・ナレバ・ナレドモ、副助詞化したナリトモなどに残る以外は、デ(アル)・ヂャに圧倒された。[10]

佐藤(1995)に指摘されている指定表現の変遷は本章の調査対象とした会話文(独話文・心話文)に限らないが、「ジャ」と「ナリ」の盛衰交替は早くから開始していたことが分かる。そして近世中期でも、「ジャ」と「ナリ」の間には依然として勢力の差が存する。噺本の会話文における指定表現の使用状況を例に言えば、「ジャ」の使用が優勢であり、「でござる」「であろう」と共に中心的な用法となった一方で、「ナリ」は劣勢であった。

しかし、第2章でも述べたように、訓訳本の右訓には口語的な表現が使用される場合があるが、全体的に言えば文語性が圧倒的に強い。『照世盃』の右訓には、「ジャ」が7例あるのに対し、「ナリ」は41例ある。また、本章では扱っていない「断定＋否定」の文末表現の場合、『照世盃』の右訓では例外なく「ナラズ/ナラザル」である。訓訳本の右訓に見られる口語的な表現はごくわずかである。

[10] 佐藤(1995)：140

第５章　近世の白話小説訓訳本に見られる終助詞「ヨ」について

１、はじめに

本章では、訓訳本の右訓に現われる終助詞「ヨ」について述べる。その使用される原因、用法の調査、及び同時期の口語資料における終助詞「ヨ」との比較を通して、「ヨ」から見る訓訳本の右訓の性格を指摘する。

２、本章で取り扱う調査資料

本章では、『小説精言』『小説奇言』『小説粋言』『覚後禅』『照世盃』という五つの白話小説訓訳本、及び 1976 年東京堂出版の『噺本大系　第八巻』(『軽口福徳利』『口合恵宝袋』を除く)における上方版の噺本 15 作品を調査資料とする。また、唐話辞書などを参照する場合がある。

３、訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の出現

本節では、終助詞「ヨ」の現われる位置を観察し、その使用される原因を検討する。

訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の用例数と分布の全体像を表１に示す。

表１　近世の白話小説訓訳本の右訓における終助詞「ヨ」の用例数と分布[1]

	小説精言	小説奇言	小説粋言	覚後禅	照世盃
用例数	5	6	9	0	0
合計	20				

終助詞「ヨ」の例は全部で 20 件である。岡白駒訓訳『小説精言』『小説奇言』及びその弟子である沢田一斎訓訳『小説粋言』のいわゆる「和刻三言」にしか現われず、『覚後禅』『照世盃』には全く見られなかった。つまり、この訓読表現は、いずれの訓訳本にも共通して存在しているのではない。その出現の仕方は訓訳者の選択に関係していると言える。

そして終助詞「ヨ」の出現位置をさらに詳しく示すと、次の表２のようになる。

[1] 右訓における終助詞「ヨ」が 20 例見られるのに対し、口語的な表現が現れる傾向にある訓訳本の左訓の位置には、終助詞「ヨ」の例が見られなかった点は、興味深い。

表２　「和刻三言」における終助詞「ヨ」の出現位置

	小説精言	小説奇言	小説粋言	合計
ヨ 哩	3	5	7	**15**
ヨ 也	0	1	1	**2**
ヨ也	2	0	1	**3**

20 例のうち、15 例は中国語の助字「哩」の振り仮名の位置にあり、2 例は助字「也」の振り仮名の位置にある。そして残りの 3 例は「也」字の補読語として現われている。表 2 から分かるように、終助詞「ヨ」の使用は中国語の助字「哩」「也」、特に「哩」の訓読に大きく関係している。また、「也」と「ヨ」の位置関係が決まっていないのに対し、「哩」と「ヨ」の位置関係は固定的であると言える。なお、ここでいう「也」は、文言の疑問・断定の助字「也」とは異なる。現代中国語の口語で用いられ、話し手の喜悦・詠嘆などの気持ちを表す「啦」に近いものである。

表 2 では「哩」を「ヨ」と読む例が最多であるが、「和刻三言」における「哩」が全て「ヨ」と読まれているわけではない。『小説精言』では、11 例の「哩」のうち、6 例が「ヨ」と読まれない。『小説奇言』では 6 例のうち 1 例、『小説粋言』では 8 例のうち 1 例が「ヨ」と読まれない。特に『小説精言』の場合、「ヨ」と読まない例が半数以上を占める。『小説精言』に現われる一つ目の「哩」を訓読する際に、白駒は次のように、「不読」としている。

(1)将ニ十ニ五ニ貫ノ銭ヲ一給ニ一還ス原ニ主ニ一。也タ只好シ奉ニ一与シテ衙ニ門中ノ人ニ一。做ス一使ニ用ト一。
（モトノ　アタヘテ　ヤシキ　ツケトドケ）

也タ還テ不レ勾哩。　　『小説精言』巻一・十五ウ
（マダ）

『小説精言』に出てくる二つ目の「哩」に対しては、次の例のように、直前に「ゾヤ」という表現を用いて補読している。

(2)　煩ハス一小ニ娘ニ子ヲ一、回リ_去テ上ニ一覆セヨ親ニ母ニ一。不レレ消ニ擔ニ憂ヲ一。我_家ノ干ニ係ハ大ナルソヤ_哩。
（モチヒ　キヅカイ　コチノミニカヽリタルハ）　　『小説精言』巻二・八オ

『小説精言』に現われる三つ目の「哩」は「不読」とされている。そして、四つ目の「哩」

に至って初めて「ヨ」と読まれた。五つ目からは「不読」と「ヨ」の繰り返しである。それに対し、『小説奇言』『小説粋言』では、ほとんどの「哩」が「ヨ」と読まれている。全体的に言えば、「和刻三言」では「哩」を「ヨ」と読む場合が多く、「ヨ」は「哩」の訓読語と見なすことができるであろう。

だが、このような「哩」を「ヨ」と読む例は、「和刻三言」以前の唐話資料には見られない。代表的な唐話学者の一人である岡島冠山の編著による唐話辞書――『唐話纂要』(1716年)、『唐譯便覧』(1726年)、『唐話便用』(1735年)を調査すると[2]、原文における「哩」は、訓読する際に全て「不読」とされている。また、唐話辞書の中には、当時の口語で原文を翻訳するものもあるが、その翻訳文を見てみても、「哩」と「ヨ」が対応しているとは言い難い。例えば、『唐話纂要』『唐話便用』には、「哩」と対応する語が見られない。また、『唐譯便覧』には「哩」と「ゾ」「ゾヤ」が対応する例は多少見られるものの、「ヨ」と対応する例は見られない。このことから、訓読語「ヨ」の採用は、白話小説の訓訳本から始まった可能性が高いと考える。

以上の調査結果から、右訓における終助詞「ヨ」の出現は特定の訓訳本に限定されており、原文における助字「哩」「也」、特に「哩」の訓読に大きな関係を持っていることが分かる。以下、訓訳本「和刻三言」における「哩」の訓読語である「ヨ」の用法を考察する。また、同時期の口語資料との比較を通して、当時の口語が訓訳本に影響を与えたことを指摘する(「也」については今後の課題としたい)。

４、訓訳本「和刻三言」の右訓における終助詞「ヨ」の用法

先にも述べたが、訓訳本「和刻三言」の右訓における終助詞「ヨ」の使用は「哩」と深い関係があることが分かる。「ヨ」の使用場面、意味機能などは原文「哩」の用法に大きく制限されていると考える。そのため、訓読語としての「ヨ」の使用状況を考察する前に、まず助字「哩」の用法を知る必要がある。以下、中国語の助字「哩」の用法を確認したうえで、訓訳本「和刻三言」における訓読語「ヨ」の使用状況を考察する。

4.1　中国語の助字「哩」の用法

中国近代以前に作られた最大規模の字書『康熙字典』(1716年)には、「哩」について、次のように述べられている(下線は筆者による)。

---

[2] 『唐話辭書類集　第6集』『唐話辭書類集　第7集』を使用した。

哩玉篇力-忌ノ切，音_吏。出ツ二陀-羅-尼ニ一。正字通語ノ餘-聲。 又正字通音_里。元_人ノ詞-曲ニ，借テ為ス二助-語ト一。（以下略） 『康熙字典』[3]

『康熙字典』の記述から、「哩」は実質的な意味のない「助語」であることが分かる。

文末に使用される「哩」の用法については、太田(2013)に詳しく述べられている。太田(2013)[4]は、元代の「哩」を以下の７種類に分けている。

1)「如今」「現(見)」「正」などと呼応するもの

正在那裏吃酒哩（燕青博魚 3）（ちょうどそこで酒をのんでいる）[5]

2)「如今」などはないが、同様に動作状態の現在における存在をいうもの

爹喚你哩（來生債 1）（おとうさんがよんでいるよ）

3)瞬間動詞「着」を用いた句につくもの

你看，他穿着甚麼衣服哩？（墻頭馬上 4）（みてごらん、どんな着物をきているか）

4)「還」を用いるもの

還有一個哩（燕青博魚 4）（まだ一人いる）

5)「還」は用いないが同様の語気をもつもの

你如今年紀小哩（救風塵 1）（おまえはまだ年がわかい）

6)「未」の意味をあらわす副詞「不曾」「未曽」「没有」などを用いるもの

未曾娶妻哩（玉壺春 1）（まだ妻をもらっていない）

7)精警

這沙門島好少路兒哩（瀟湘雨 4）（この沙門島はとても遠い途のりなんです）

若打醒了睡，要打我哩（瀟湘雨 4）（もし目をさまさしたらわたしは打たれるのです）

また、太田(2013)は、1)～6)が現在におけるある動作・状態の存在、或いは不変化を明確にいう「叙実的用法」を表すのに対し、7)は「精警」（ある事態の存在を指摘して聴者の注意を促す語気[6]）と呼ばれる「非叙実的用法」を表すと指摘した。各項目に示されている用例を見れば、叙実的用法の「哩」が使われる文の表す内容は、誰にとっても認識可能であり、

---

[3] 渡部(1977)：446

[4] 太田(2013)：380-384

[5] 訳文は原文ママである。

[6] 太田(1988)：215

個々人によって事態の認識の仕方に差がない、客観的な事実であることが分かる。それに対し、非叙実的用法の「哩」が使われる文の表す内容は、話し手の判断、予想といった、話し手にのみ認識可能であり、個々人によって事態の認識の仕方に差が存在する(距離の遠近の認識など)、主観的な内容であることが分かる。また、3)のような疑問文の場合を除けば、用法に関わらず、話し手にとって「既知」の内容を表し、聞き手にとって「未知」の内容を表すようである。

4.2　訓訳本「和刻三言」における「哩」の種類

訓訳本「和刻三言」に現われる「哩」は全部で 25 例である。太田(2013)では言及されていないが、会話文の例以外に、心話文の例と地の文の例も見られる。

会話文に現われる「哩」は 18 例あり、そのうちの 3 例は太田(2013)の分類「2)「如今」などはないが、同様に動作状態の現在における存在をいうもの」に属し、3 例は「若」と呼応することから、「7)精警」の例と見なすことができよう。そして残りの 12 例は太田(2013)の分類にないものであり、「「還」[7]と呼応するもの」(5 例)、「「要」またはそれと同様の語気を持つ語句と呼応するもの」(4 例)、「呼応する語がないもの」(3 例)に分けられる。心話文の「哩」は 5 例ある。そのうち、「「還」と呼応するもの」が 1 例、「「若」と呼応するもの」が 1 例、「「如何」と呼応するもの」が 1 例、「呼応する語がないもの」が 2 例であり、いずれも太田(2013)の分類に属しない例である[8]。また、作者が読者と仮に対話するという会話風の形式を取る地の文には「哩」が 2 例見られる。1 例は「還」[9]と呼応するものであり、その他の 1 例は呼応する語がないものである。つまり、訓訳本の原文に現われる「哩」の種類は、太田(2013)に指摘されている「哩」と完全には一致していないということである。

また、25 例の「哩」のうち、「ヨ」と読むのは 15 例である。「ヨ」と読む「哩」及び読まない「哩」の中には、同じ種類に属する例がいくつかあり、種類上には偏りが見られない。このことから、「哩」を訓読する際に、「ヨ」を使うか使わないかは、中国語の原文の内容によったのではなく、訓訳者の選択による可能性が高いことが分かる。

---

[7] 太田(2013)では、「マダ」の意の「還」と呼応する 4)が示されているが、ここの「還」は「マダ」の意ではなく、「マタ」の意であるため、太田(2013)の 4)とは異なる。
[8] 心話文の「還」は会話文の「還」と同じく、「マダ」ではなく「マタ」の意である。また、心話文における「若」と呼応する例は、聞き手が存在しないので、太田(2013)における「ある事態の存在を指摘して聴者の注意を促す語気」を表す「7)精警」に入れることができない。
[9] 地の文における「還」も「マタ」の意である。

4.3　「哩」の訓読語としての「ヨ」の使用状況

本節では、訓訳本における「哩」及び「哩」の訓読語としての「ヨ」の使用場面を考察していく。

訓訳本の原文における「哩」は、会話文の場合、太田(2013)で指摘されたとおり、叙実的用法と非叙実的用法がある。言い換えれば、「哩」の使われる会話文の内容は客観的である場合もあれば、主観的である場合もあるということである。また、太田(2013)でも指摘されているように、訓訳本の「哩」が使われている文の内容は、いずれも話し手にとって既知的、聞き手にとって未知的であり、話し手と聞き手の間にその情報に対する認識の差が存在している。以下、用例を示しながら、訓訳本の「哩」と「ヨ」の使用場面を具体的に述べる。

まず、叙実的用法の「哩」の用例を示す。

(3)　丫髻着シ_了テ忙。奔テ到二房中ニ一報二與シテ劉璞ニ一道。大官人不好了大爺大娘在二新房中ニ一相_打スヨ哩。　『小説精言』巻二・二十五ウ

(4)　劉天祥也タ哭シ_了ル一場、就チ喚ヒ二_出シ楊氏ヲ一、來テ道、大嫂、侄兒在テレ此ニ見ルレ你ヲヨ哩。　『小説粋言』巻四・十二オ

例(3)は下女が主人に「主人の両親が喧嘩している」ことを教える場面である。例(4)は男が妻に十余年も見たことのない甥が来たことを教える場面である。例(3)、例(4)は実際に進行中の動作を表す。そして、その内容に対する認識の仕方において、話し手と聞き手との間に差が見られる。例(3)では、「主人の両親が喧嘩している」ことは話し手「丫髻」にとって既知の情報であるが、聞き手「大官人」にとっては未知の情報である。例(4)では、「甥が今ここにいる」「甥があなたに会いたがっている(あなたの出現を待っている)」という情報は、妻のほうが先に得ていた情報である。しかし、妻はそのことを男にまだ告げていなかった。そのため、発話時の話し手（男）の視点から見れば、その情報は話し手（男）にとって既知の情報であり、聞き手（妻）にとっては未知の情報ということになる。

叙実的用法の「哩」は例(3)、例(4)の二つしかない。残った8件の「哩」は全て非叙実的用法と見なすことができる。

(5)　又一個ハ道、只_怕這ノ_雪還テ要スルレ大ヲヨ哩。　『小説奇言』巻四・二十一ウ

(6)　對二船ー上ニ一大ー喝シテ道、不レレ要セ二零ー賣ヲ一、不レレ要セ二零ー賣ヲ一、是レ有ル的俺多ク要ス
ハシダニウル　アリ　ダケ　ワレ
レ買ンヲ、俺カ家ノ頭ー目、要スル三買ヒ_云テ進二可ー汗ニ一哩。　『小説粋言』巻二・十三ウ
ヤクニン　コク　カン　ヨ

(7)　要スルレ看ント時ハ。你自_云テ看ヨ。老娘ハ要スル二睡ー覺ヲ一哩。　『小説精言』巻四・十五ウ
ヲレラハ　ミ　ヨ

(8)　央二ー及スル他ヲ一時、還テ有ル二許ー多ノ作ー難一哩。　『小説奇言』巻四・十八オ
マダ　ナ　ン　ギ　ヨ

(9)　張ー大搗二一ー个ノ鬼ヲ一道、依レハ二文ー先ー生ノ手ー勢ニ一、敢テ像レ要スルニ二一ー萬ヲ一哩。
ツイテ　メツツフ　タブンハ　ニタル　ヨ

『小説粋言』巻二・二十三オ

(10)　大ー家目_睜ミハリ口_呆アキレ、都テ立チ起シ二身ー子ヲ一來リ、拉イザナヒ二文ー若ー虚ヲ一云商ー議スラク道、造ー化
ミナ＼／　タンカウ　シアハセ

造ー化、想ニ是レ値リ_得テ多キ_哩。　同上、巻二・二十三オ
シアハセ　ヨ

(11)　若シ蒙ル二員ー外如ノレ此美ー情ヲ一、我レ夫ー妻両ー口、住二ー在シテ這ー里ニ一可ナリ、也タ増ン二好
フタリ　コ　ヽ

シ些ノ光ー彩ヲ一哩[10]。　同上、巻四・六ウ
ヨ

(12)　若シ果シテ侄ー兒來ラハ、我也タ懽ー喜、如_何シテ肯テ阻二ー當セン他_的ヲ一、這ノ花ー子故ー意ニ
コツジキワ　サ　ト

來テ捏シレ舌ヲ、哄二ー騙スル我カ_們的ノ家ー私ヲ一哩。　同上、巻四・十三オ
スカシダマス　シンダイ　ヨ

例(5)は結婚式に参加する一人の客の話である。結婚式が終わり、花婿が花嫁を連れて船で自分の住宅に帰ろうとする際に、ある者が花嫁の父に「今、風が非常に強い」と教えた。それに対し話し手（結婚式に参加する客）は「恐らく雪がこれからもっと強くなるだろう」と言った。例(5)の表す内容は、話し手が眼前の事態について推測したものであり、主観的な内容である。例(6)は、珍しい果物を買った話し手がしばらくしてまたその果物を買いに戻った場面である。話し手が言ったことは、話し手個人の要求、未発生の事態であり、主観的である。例(7)は突然自分の娘が心配になった男が、寝ていた妻を起こした後の場面である。男が「一緒に娘の部屋を見に行こう」と言ったのを受け、妻は例(7)のように返答している。例(7)の文は話し手の意志を表わしており、主観的な情報である。例(8)～例(12)も同

[10] 正しい句読点は「若蒙員外如此美情、我夫妻両口住在這里、可也増好些光彩哩」であると考えられる。

じく、眼前の事態に対する話し手の判断・推測・評価などを表しており、いずれも主観性の強い内容である。そして、それらの内容は、話し手が発話する前までは、話し手しか知らないものである。全て話し手にとって既知的、聞き手にとって未知的であると言える。やはり非叙実的用法の「哩」の使用者(話し手)と聞き手の間にも、「哩」が使われる文の内容について、認識の差が存在している。

また、先にも述べたように、訓訳本には、太田(2013)で扱われていない心話文の「哩」も現われた。すなわち次の5例である。

(13)　今在テ二絶ヒトナキシマ島中ニ間ニ一、未レ到二實ニ地ニ一、性イ命ノチモ也タ還テ是レ與二海ニ龍ニ王一合ニ着スル的ナル哩ヨ。　『小説粋言』巻二・十八オ

(14)　等チ二一了一ニ夜ヲ一、不レ見二動ヲトヅレ静ヲ一、心ニ下好イカフシ一悶ス、想ヘラク一道、這一等ノ大ニ風、カヘツテ到是レ不レハ二曽ノル下一レ舩マダニ還テ好シ、若シ在テ二湖ニ中ニ一行ニ動セハ、老シタヽカノニ大ノ擔キヅカイニ憂ナラン哩ヨ。

『小説奇言』巻四・二十五ウ

(15)　錢ニ青肚ニ裏暗ニ笑一道ヘラク、他カ一們ハ好シコトク似レ見レ鬼バケモノヲ一ニ般、我ハ好シコトク像レ做カレ夢ヲ一ニ般、做レ夢ヲ的ハ醒一了レハ也タ一只ヒク扯ムノダミナリコトレ淡ヲ那ニ些ノ見レ神ヲ見レ鬼ヲ的ハ、不レ知如一何ンカ結シマイツクニ束スル哩ヨ。　同上、巻四・二十ウ

(16)　若シ我カ丈ヲニ夫ツト像ニ一得バ他カ這ニ様ノ美貌ナルニ一。便チ稱ナヒ二我一的ノ生ヒゴロヲモフニ平ニ一了ル。只一怕クハ不ン二ア能一勾タ一ハ哩ヨ。　『小説精言』巻二・十三ウ

(17)　心ニ中ニ想ヘラク一道、此一子如レ此ノ、其一姉可レ知ル、顔ニ兄好シ造シアニ化ハセナル哩ヨ。

『小説奇言』巻四、十四オ

例(13)は「今は絶島におり、まだ陸に上がっていないので、私の命も海龍王に左右されているのだ」という意味である。例(14)は「こんなに強い風が吹いていても、もしまだ出航していないのなら大丈夫だ。しかし、もう出航してしまっているなら、本当に心配になるよ」という意味である。例(15)の話し手は心のなかで「彼らは化け物を見て、僕は夢を見たよう

だ。夢を見た人が目覚めても何もないが、それらの鬼神を見たような者は、どうなるのか分からない」と思っている。例(16)は話し手が自分の兄嫁の顔を見て、心のなかで「夫がもし彼女のような美貌を持っていたなら、私は満足するのだ。いや、恐らく無理だろう。」と思っていた場面である。例(17)の話し手は、友達が気に入った女の子の兄を見て、「この方の格好から、そのお姉さまの格好を知ることができる。顔さんは運がいいんだなあ」と思っていた。これらの心話文の内容は非叙実的用法の「哩」が使われる文の内容と似ている。すなわち眼前の事態に対する話し手の判断・推測・評価などであり、主観的である。しかし、心話文であるため聞き手が存在しない。そのため、非叙実的用法の「哩」が使われる文が聞き手にとって未知の内容を表すのとは異なり、その情報は単に「哩」(訓読語「ヨ」)の使用者にとって既知的であるというだけである。

以上、「哩」及びその訓読語「ヨ」の使用場面を考察した。まとめると、次の二点になる。

① 訓訳本の原文の会話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、誰にとっても認識可能な客観的事態を表す場面で使用されることもあれば、話し手が判断・推測・評価を行うなど、主観的事態を表す場面で使用されることもある。また、その文が表す内容は、話し手にとっては既知的な内容、聞き手にとって未知な内容である。つまり話し手と聞き手の間に、その情報に対して認識の差が存在している場合に使われている。

② 訓訳本の原文の心話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、眼前の事態に対する話し手の判断・推測・評価など主観的な内容を表す場合に使われる。また、話し手自身にとって既知の情報を、自身に言い聞かせる場合に使われている。

５、同時期の口語資料における終助詞「ヨ」との比較

訓訳本における「哩」の訓読語「ヨ」は、同時期の口語資料における終助詞「ヨ」と異なる点もあれば、共通しているところも見られる。以下、それぞれの相違点と共通点について見ていく。

訓訳本とほぼ同時期の噺本には、24 例の終助詞「ヨ」が見られる。「ヨ」の前接部にどのような言葉が来るかという接続の面から見れば、訓訳本と噺本の間には大きな差異が見られる。訓訳本の「ヨ」は概ね「動詞連体形」「形容詞連体形」「助動詞連体形」に付く。具体的に示すと、次の表 3 のようになる。

表 3　訓訳本における「哩」の訓読語「ヨ」の前接部(()内は用例数)

前接部		合計
動詞連体形	相打ス(1)、有ル(1)、見ル(1)、要スル(3)、結束スル(1)、哄騙スル(1)	8
形容詞連体形	多キ(1)	1
助動詞連体形	タル[持続] (1)、ナル[断定] (2)、ン[意志] (1)、ン[推量] (2)	6

表 3 から、訓訳本の「ヨ」の前接部は全て活用語の連体形であることが分かる。それに対し、次の表 4 から、噺本の「ヨ」は主に名詞に接続することがわかる。

表 4　噺本(1739～1770 年)における終助詞「ヨ」の前接部

	軽口耳過宝 (1742)	軽口若夷 (1742)	軽口瓢金苗 (1747)	軽口笑布袋 (1747)	軽口浮瓢単 (1751)	軽口腹太鼓 (1752)	軽口東方朔 (1762)	軽口扇の的 (1762)	軽口片頬笑 (1770)	合計
名詞	5	1	0	2	0	3	2	4	1	18
副助詞	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
終助詞	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3
動詞命令形	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
助動詞連体形	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

噺本における「ヨ」のうち、名詞を前接部とする用例を示す。

(18)　とんぼう行(ゆき)あたりける故、竿(さほ)をからりと投(なげ)、此たんめいな物をころせし事よと愁歎(しゅうたん)せられける所へ、……　「さい鳥(とり)さし」『軽口耳過宝』、1742 年

(19)　殿聞召(とのきこしめし)、夢(ゆめ)とハ寝(ね)ほれ者よと申させ給へば、かさねて申上ルやう、わたくし昨夜(さくや)御神(しん)の夢想(むさう)をえました。　「欲阿弥訴訟(よくあミそせう)する事」『軽口扇の的』、1762 年

(20)　されハの事(こと)よ、開帳(かいちやう)の札(ふだ)　「びんぼう神開帳(がミかいちやう)」『軽口若夷』、1742 年

訓訳本でも原文のみを見れば、「哩」の直前が名詞である例(例(13)、例(17))もある。しかし、その訓読文では、名詞と「ヨ」の間に断定の助動詞「ナリ」の連体形「ナル」が添加されている。つまり、訓訳本では「……名詞＋ナル＋ヨ」という形はあるが、名詞の後に直

接付く「……名詞＋ヨ」の組み合わせはないということである。

仮名文学作品では、「ナル＋ヨ」の例は早く『源氏物語』には既に見られた。

(21)　さまざま心細き世の中のありさまを、よく見過ぐしつるやうなるよ。

『源氏物語』若菜下、1010 年

江戸時代になると、調査範囲内の噺本では「ナルヨ」の用例が見られなくなる。口語的な断定表現の発達に伴い、「ナリ」の文語性がさらに強くなったためだろうか。

次に、「ヨ」の使用場面を見てみよう。噺本における「ヨ」は、24 例のうち 22 例が会話文に現われている。

(22)　或夜(ある よ)、順慶町辺(じゅんけい へん)のどぶ池(いけ)すじにて、そりやぬいたぞ。あばれものよと往来(わうらい)にげまどふ中に、……

「鍛平物(だんぴら もの)」『軽口腹太鼓』、1752 年

(23)　夜更(よ ふけ)て火事(くハじ)よとさわぎけれハ、或家の亭主(ていしゅ)はやくきゝつけ、……。

「助蔵火事(すけさう くハし)見る事」『軽口扇の的』、1762 年

例(22)と例(23)は客観的な事実が叙述されている例である。例(22)は「鍛平物」という噺の最初の部分である。後文脈によれば、話し手(一人か複数の人か不明)が、手に刀を持ってふらふらと歩いてきた酔っぱらいを見て、「あばれものよ」と叫んだ場面である。この「あばれもの」に関する発話内容は、刀を持つ酔っぱらいに関する叙述である。話し手にとっては既知の情報、周りの人（不特定の聞き手）にとっては未知の情報である。例(23)も噺の最初の部分である。夜更けて「火事(が起こった)よ」と誰か（詳細は不明）が叫んだ場面である。「火事が起こった」ことはその場の誰でも確認できる客観的な事態である。また、それは話し手にとっては既知、聞き手にとっては未知の情報である。例(22)、例(23)における終助詞「ヨ」は、話し手と聞き手の間に認識の差がある場面で使用されている。

「ヨ」の前接情報が主観性の強い内容である場合も同様に、話し手と聞き手の認識の仕方に差が存在する。

(24)　ハテ、しれた事よ。おめこの事じやといふところへ、……

「御命講」『軽口耳過宝』、1742 年

(25)　あやまりもせず口(くち)がしこくいふ事よといへば、……

「高砂の浦」『軽口耳過宝』、1742 年

(26)　そりやこそ偽よと口突と笑へバ、……　「天犀角」『軽口腹太鼓』、1752 年

(27)　一人きつと心つき、あれ＼／見給へ。あれこそ住吉の明神よ。

「くまの浦」『軽口腹太鼓』、1752 年

例(24)は「門開」の意味が分からない下女の疑問に、話し手が答える場面である。例(25)は話し手の、眼前の事態に対する評価である。例(26)は話し手が、友達の持っている天犀角が本物であるかどうかを検証する際に言った話である。例(27)は強風がおさまったのを船人たちが悦んでいる際に、その中の一人が突然「あれを見てくれ。あれこそ住吉の明神だよ」と言った場面である。いずれも眼前の事態に対する話し手の判断・評価などであり、「ヨ」の使用者(話し手)と聞き手の間に認識の差がある。

噺本には、訓訳本には見られない命令文に現われる例もある(例(28)、例(29))。その内容は話し手個人の要求という主観性の強い内容であるため、例(24)～例(27)における「ヨ」の使用場面と条件が共通する。

(28)　薬を温めて持てこいよといハれけるを、……

「薬ちがひ」『軽口浮瓢単』、1751 年

(29)　そのやうにけつこうに、おしやますなよ。　「鞁買」『軽口腹太鼓』、1752 年

一方、噺本の心話文に現われる「ヨ」は、次の 2 例しか見られなかった。使用場面は、訓訳本の心話文に現われる「ヨ」の使用場面とはほぼ同じである。

(30)　手拭をかづき菅笠に、うちわをとりそへ持てゆくうしろすがたを見て、こハ女よとおもひ、……　「赤前垂にはまる事」『軽口扇の的』、1762 年

(31)　是ぞ井のもとの道具の名なれば、水がらくりよと心得、……

「水がらくりを見にゆく事」『軽口扇の的』、1762 年

例(30)は、色が黒くて鬚がたくさんある住吉踊りのはなれ者についての噺である。頭に手拭いを載せ、菅笠をかぶり、手に団扇を持った「はなれ者」の後ろ姿を見た遊蕩者が、「これは女だ」と判断している。例(31)は「洛中御評判の轆轤首」という、ある芝居の看板を見た話し手が、「これが井のまわりの道具の名前ならば、すなわち水がらくりというものだ」

と思っている場面である。例(30)と例(31)は、話し手の目の前にある物事に対する個人的な判断である。

以上、噺本における終助詞「ヨ」について、その使用状況及び訓訳本の「ヨ」との共通点と相違点を考察した。前接部がどのような言葉であるかという接続の観点では、「哩」の訓読語「ヨ」は、原文の文体的特徴を反映するためか、当時の口語資料とは異なり、文語性のある表現が選択されていた。一方、「ヨ」の意味用法においては、全体的に、両資料で大きな差異は認められなかった。それは、当時の口語で実際に使われていた終助詞「ヨ」の用法が、中国の白話小説に使用されている助字「哩」の用法と類似していることを意味している。言い換えれば、当時の実際の言語生活で使われていた「ヨ」が「哩」字の訓読語に選定される基盤を作ったということである。訓訳本に現われている新たな表現「ヨ」は、接続語において文語の規範を踏襲している一方で、同時代の口語からの影響を受けていたと考える。

６、まとめ――「ヨ」から見る訓訳本の右訓の性格

以上、訓訳本「和刻三言」の右訓に現われる「ヨ」の使用状況について考察したうえで、同時期の口語資料における「ヨ」と比較した。訓点資料に見られない終助詞「ヨ」が訓訳本に使用されているのは、原文における中国語の助字「哩」の訓読に大きく関係している。訓読語としての「ヨ」は、原文で使用される字の意義を反映するため、「哩」の用法とほぼ同じ用法を表す。また、訓訳本と同時期の口語資料との比較から、両資料における終助詞「ヨ」は、接続の観点で差異が見られるが、使用場面などの観点では多くの共通点を持つことが分かった。以上の結果から、「和刻三言」の右訓には、当時の口語からの影響があったと考えられる。

終章　まとめと今後の課題

１、本研究のまとめ

第１章では近世における白話小説訓訳本について紹介したうえで、『覚後禅』の刊行時期と訓訳者、及び『照世盃』の訓訳者に関する問題を検討した。また、近世期の訓訳者の交際についても言及した。

江戸時代に刊行された白話小説の訓訳本は『小説精言』（寛保三(1743)年)、『小説奇言』(宝暦三(1753)年)、『小説粋言』（宝暦八(1758)年)、『覚後禅』（宝永二(1705)年か)、『照世盃』(明和二(1765)年)という五つしかない。『小説精言』『小説奇言』の訓訳者が岡白駒であり、『小説粋言』の訓訳者が沢田一斎であることは疑いないが、『覚後禅』の刊行時期と訓訳者、『照世盃』の訓訳者に関しては疑問がある。『覚後禅』には宝永二(1705)年の序が見られる。しかし、中村、太田・飯田(1987)などの先行研究で示された証拠(『大坂出版図書目録』に、「肉蒲団四冊　訓点者　陶山尚善（丹後宮津）板元敦賀屋九兵衛　出願宝暦七年（一七五七）九月」という記述があること、『覚後禅』の翻案『風流六女競』の出版時期)と、『覚後禅』の左訓に見られる宝暦(1751～1764 年)頃の言葉と表現(性に関する意味の「トボス」、可能表現「デキル・(～スル)コトガデキル」）から、『覚後禅』その実際の刊行時期は恐らく宝暦(1751～1764 年)頃であろうと考えた。また、『覚後禅』の訓訳者「倚翠楼主人」について、先行研究では陶山南濤のことである可能性があると指摘されている。陶山南濤であるかどうかは断言し切れないが、『覚後禅』の左訓に上方語「ホンマ」「カカ」などが現われることから、その訓訳者は上方の者或は上方に長期滞在していた者である可能性が高いと考えた。『照世盃』の訓訳者については、異論があるものの、清田儋叟である可能性が高いことが確認できた。『小説精言』『小説奇言』の訓訳者岡白駒は江戸時代における代表的な唐話学者の一人であり、『小説粋言』の訓訳者沢田一斎の唐話の師である。清田儋叟は岡白駒、沢田一斎の知人のようである。以上をまとめると、近世における白話小説訓訳本の刊行時期は一七四〇年代～六〇年代に集中しており、その訓訳者は上方を中心に活躍した唐話学者ということになる。そして、様々な資料や先行研究の指摘から、彼らは互いに交渉があったことが分かった。

第２章では白話小説訓訳本の全体的な特徴を把握した。

訓訳本の右訓に現われている言葉と表現はほぼ伝統的な訓読表現を継承している。特にそれは、「麼」「像」「該」など口語体の作品で多用される白話語彙が訓点資料で見られる表現によって訓読されているという状況から、明らかである。また、数は少ないが、訓訳

本の右訓には訓点資料に見られない新たな表現「個ノ」「的ノ」「ナリ了ス」「タ」「ジャ」「ヨ」なども出現した。訓訳本の左訓は、村上(2014)で指摘されている「俚俗性」「釈義性」以外に、「時代性」「地域性」という特徴を持っていると言える。これは、当時の口語を反映する「イッタイ」「タ」「ヤンワリ」、及び上方で多用される「ジャ」「ヤラ」などの言葉と表現が見られることから分かる。また、訓訳本には文レベルの左訓が現われている。文レベルの左訓には訓読文のような硬い日本語ではなく、分かりやすい自然な日本語が使われている。文レベルの左訓から白話小説の「口語訳」の初期段階の様相が窺える。また、訓訳本の右訓と左訓を、終助詞を例に比較した結果、それぞれ性格上に差異が見られることが確認できた。すなわち、右訓は全体的に文語性が強いのに対し、左訓は口語性が強い。言い換えれば、訓訳本には性格が異なる二重の言語表現体系が存在しているということである。

第３章～第５章は、訓訳本の右訓に現われる特殊な表現「タ」「ジャ」「ヨ」の使用状況の考察を通して、訓訳本の右訓の性格をさらに明らかにしたものである。

第３章では訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓に現われる過去・完了の助動詞「タ」を中心に考察を行った。

訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓における「タ」と「タリ」の使用状況を考察したうえで、訓訳本の左訓、同時期の噺本における「タ」「タリ」と比較した。その結果、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓、左訓、噺本に現われる「タ」は、いずれも会話文・心話文など地の文以外の文に使用される傾向があり、かつ、さまざまな語に接続する。一方、「タリ」は、いずれの場合も地の文で多用されている。また、訓訳本の左訓と噺本の「タリ」が多様な語に接続するのに対し、訓訳本における右訓の「タリ」のほとんどが「エル(得る)」「ニル(似る)」など限られた語に接続する。訓訳本の右訓と口語資料に現われる表現は、文体が異なる点から、形が同様であっても、用法には差異があることが予想できる。しかし、訓訳本の右訓に口語的な「タ」が使用されること、訓訳本の右訓と口語資料における「タ」の用法がほぼ一致していることから、訓訳本『小説精言』『照世盃』の右訓は当時の口語からの影響も受けていたことが窺えよう。

第４章では訓訳本『照世盃』の右訓に見られる文末表現「ジャ」を中心に考察を行った。

『照世盃』の右訓における「ジャ」の使用場面と使用者を考察したうえで、『照世盃』の右訓における「ジャ」以外の文末表現(特に「ナリ」)の使用状況、訓訳本の左訓と同時期の噺本における「ジャ」「ナリ」の使用状況と比較した。その結果、右訓の「ジャ」は主に一般階級の者の話に現われること、聞き手は話し手と対等で親しい関係を持つ者であること

が分かった。このような傾向は訓訳本の左訓及び同時期の噺本における「ジャ」にも共通している。つまり、右訓における「ジャ」は、噺本で使用されるような当時の口語が、白話小説の訓読として現われたものである、という可能性を指摘できる。言い換えれば、『照世盃』の右訓には当時の口語からの影響が見られるということである。一方、文末表現「ナリ」の使用場面と使用者については、いずれの資料でもあまり特別な傾向が見られなかった。『照世盃』の右訓と同時期の噺本における「ジャ」「ナリ」の使用状況の相違点としては、「ジャ」と「ナリ」の用例数の多寡があげられる。すなわち、『照世盃』の右訓では「ナリ」が優勢、「ジャ」が劣勢であるが、噺本では「ジャ」が優勢、「ナリ」が劣勢であった。

第５章では「和刻三言」の右訓に現われる終助詞「ヨ」を中心に考察を行った。

訓点資料に見られない終助詞「ヨ」が訓訳本に使用されているのは、原文における中国語の助字「哩」の訓読に大きく関係している。「和刻三言」の原文における「哩」の種類が太田(2013)の指摘と完全には一致していない点、「ヨ」と読む「哩」と、「ヨ」と読まない「哩」に用法上の偏りが見られない点から、「哩」の訓読の際に「ヨ」を使用するか否かは、中国語の原文の内容によったのではないということが分かった。訓読語としての「ヨ」は、「哩」とほぼ同じ用法を表すと考える。その用法をまとめると、次のようになる。訓訳本の原文の会話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、誰にとっても認識可能な客観的事態を表す場面で使用されることもあれば、話し手が判断・推測・評価を行うなど、主観的事態を表す場面で使用されることもある。また、その文が表す内容は、話し手にとっては既知的な内容、聞き手にとって未知な内容である。つまり話し手と聞き手の間に、その情報に対して認識の差が存在している場合に使われる。一方、訓訳本の原文の心話文に現われる「哩」及びその訓読語としての「ヨ」は、眼前の事態に対する話し手の判断・推測・評価など主観的な内容を表す場合に使われる。つまり、話し手自身にとって既知的な情報を、自身に言い聞かせる場合に使われるということである。訓訳本と同時期の口語資料と比較した結果、両資料における終助詞「ヨ」は、どのような語に接続するかという観点で差異が見られるが、使用場面などの観点では共通点も多い。以上の考察から、「和刻三言」の右訓には当時の口語からの影響があったと考えられる。

以上の５章の考察から、近世の白話小説訓訳本の性格に関して、次のことが明らかになった。近世の白話小説訓訳本には二重の言語表現体系が存在しているという点である。訓訳本の右訓にはほぼ伝統的な訓読表現が使用されており、文語的な性格が見られる。しかし、数は少ないが、訓訳本の右訓には訓点資料では基本的に使われない特殊な表現も現われている。特に近世の口語資料で多用される「タ」「ジャ」「ヨ」の使用状況から、訓訳本の右訓に

は当時の口語からの影響も窺える。一方、訓訳本の左訓は「俚俗性」「釈義性」のほか、「口語性」「時代性」「地域性」などの性格も有している。また、分かりやすい自然な日本語を用いた、文レベルの左訓も現われており、白話小説「口語訳」の初期段階の様相を反映していると言える。

長い歴史の中で、漢文訓読表現は和文脈に影響を与えていたようである。今日においてもその影響によって生じた、或は変化した表現が使われている。しかし、近世の白話小説訓訳本の右訓には、当時の口語からの影響も見られた。もちろん、これは訓訳本の原文の文体に大きく関係していると考えられる一方で、庶民文化の発達という側面も持っているのではないかと考える。また、当時の言葉が多く保存されている訓訳本の左訓は、近世話し言葉などの研究において、貴重な言語資料であることが認められよう。

２、今後の課題

本研究の調査・考察を通して、近世の白話小説訓訳本の性格の一部を明らかにした。しかしながら、課題として残った点がまだ多くある。

まず、本研究では訓訳本の左訓の性格を検討し、その価値を指摘したものの、左訓における時代性、地域性を有している言葉と表現に関する詳しい考察ができなかった。中村(1985a)には、次のような記述がある。

> その後に続いて出現する小説の訓訳本の如きは、ものがものだけに、その左訓に、俗語を自在に使用してゐる。試みに、この書の成立と刊年については、なほ問題があるが、宝永二年の序を持つ『肉蒲団』の第一冊から、若干の語を拾つて見る。
>
> ○土産（テツクリ）（テマヘモノ）　共にその土地の産物の意。「テマヘモノ」は『大辞典』未収。「テツクリ」に、この意があるとすれば、従来、「手造り(自家製)」の酒などと解されたものも、「地酒」と解くべきものがあるかも知れない。
>
> ○直説（セウジキバナシ）　『正直ばなし大鑑』（元禄七）など書名でのみ知る語も、日常につかはれたものであつた。
>
> ○慣相（ヲハコ）　この語に「癖」の意のあることは辞書にのるが、これなど早い例にならう。「談心（ウチトケバナシ)」や「婆心（コケジンセツ)」もよい訳で、辞書の用例を補ふに足る。
>
> ○窓稿（キリヌキホン）　種々の本から切抜いて来てでつち上げた原稿で、如何にも書生用語である。他の訓訳本も大体に、このやうなことであるが、日本語の雅俗対訳

でも云つた如く、漢語をもつて逆にその俗語の解を得ることが出来る。[1]

つまり、訓訳本の左訓には当時の文学作品、辞書に載っていない言葉があり、中国語の原文が逆にその言葉の解釈になる場合があるということである。これらの言葉は近世語の語彙を補うことができる。また、本研究の第２章にあげた可能表現「デキル」の例は、初出例である可能性が高く、近世語文法研究にとって好例になるかもしれない。このような用例はまだ存在していると考える。訓訳本の左訓のデータベースを作成し、左訓における用例を用いた研究を進展させることを今後の課題の一つとしたい。

次に、訓訳本の右訓が口語にどのような影響を与えるのかについても考察したい。本研究では主に、当時の口語が訓訳本の右訓に与えた影響について考察した。一方で、訓訳本の右訓によって生まれた特殊な表現が、近世以降の日本語の口頭語に対しても影響を及ぼすことが有り得る。例えば、「～的ノ」という訓読表現は、明治期の接続語「～てき(の・な)」の出現に関係があることが堀口(1992)、李(2006)で指摘されている。訓訳本の右訓が日本語に与える影響についても、今後の課題としたい。

また、当時の口語が訓訳本の右訓に与えた影響、特に「タ」「ジャ」「ヨ」が見られない訓訳本『覚後禅』の右訓に関しては、さらなる調査と検証が必要だと考えられる。

今後は本研究の調査結果をふまえ、「訓訳」という翻訳形式を使用した他の資料も取り上げ、訓訳に関する研究に少しでも寄与できることを目標とする。

[1] 中村(1985a)：204

調査資料と参考文献

＜調査資料＞

『遊仙窟』五巻、元禄三(1690)年、一指註、名古屋大学所蔵

『肉蒲團』(一名『覚後禅』)四巻、宝永二(1705)年か、倚翠楼主人訳、東京大学東洋文化研究所所蔵

『小説精言』四巻、寛保三(1743)年、岡白駒訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収

『小説奇言』五巻、宝暦三(1753)年、岡白駒訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収

『小説粋言』五巻、宝暦八(1758)年、沢田一斎訳、ゆまに書房『小説三言』(1976)所収

『照世盃』四巻、明和二(1765)年、清田儋叟訳、ゆまに書房『照世盃：付・中世二伝奇』(1976)所収

『唐譯便覧』五巻、享保十一(1726)年、岡島冠山編、汲古書院『唐話辭書類集(第７巻)』(1972)所収

『訓譯示蒙』、元文三(1738)年、荻生徂徠撰、早稲田大学図書館所蔵

『論語集註大全』(『四書集註大全』)、慶安四(1651)年跋刊、鵜飼石斎施訓、国立公文書館所蔵

『論語古義』、明治三十二(1909)年刊(正徳二(1712)年序)、伊藤仁斎施訓、国立国会図書館所蔵

『論語句解』(『四書示蒙句解』)、元禄十四(1701)年序刊、中村惕斎施訓、早稲田大学図書』館所蔵

『論語古訓正文』、宝暦四(1754)年刊、太宰春台施訓、国文学研究資料館所蔵

『軽口初売買』、元文四(1739)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口福おかし』、元文五(1740)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口新歳袋』、元文六(1741)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口耳過宝』、寛保二(1742)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口若夷』、寛保二(1742)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口へそ順礼』、延享三(1746)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口瓢金苗』、延享四(1747)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口笑布袋』、延享四(1747)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口浮瓢単』、寛延四(1751)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口腹太鼓』、宝暦二(1752)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収

『軽口豊年遊』、宝暦四(1754)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収
『軽口東方朔』、宝暦十二(1762)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収
『軽口扇の的』、宝暦十二(1762)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収
『軽口はるの山』、明和五(1768)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収
『軽口片頬笑』、明和七(1770)年、東京堂『噺本大系(第八巻)』(1976)所収
『風流六女競』著作URL：http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_1657574
国立国語研究所「日本語歴史コーパス」https://chunagon.ninjal.ac.jp/
国文学研究資料館「噺本大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon

＜参考文献＞

朝日新聞社編(1994)『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社
荒尾禎秀(2008)「和刻本『笑府』の書誌と諸本」『清泉女子大学紀要』(56)：1-25
石崎又造(1967)『近世日本に於ける支那俗語文学史』清水弘文堂書房
岩井良雄(1974)『日本語法史　江戸時代編』笠間書院
王晓平(2014)『中日文学经典的传播与翻译』中华书局
大久保忠国・木下和子編(2004)『江戸語辞典』東京堂出版
太田辰夫・飯田吉郎編(1987)『中国秘籍叢刊』汲古書院
太田辰夫(1988)『中国語史通考』白帝社
——(2013)『中国語歴史文法』朋友書店：379-383
大塚秀高編(1988)『佐伯文庫叢刊第四巻　照世盃』汲古書院
大坪併治(1981)『平安時代における訓點語の文法』風間書房
岡田袈裟男(2006)『江戸異言語接触：蘭語・唐話と近代日本語』笠間書院
尾形仂(1976)「解説」岡白駒・沢田一斎施訓、尾形仂解説『小説三言』ゆまに書房：865-893
岡山恵美子(2011)「白話から読本まで——岡島冠山の軌跡」佐藤=ロスベアグ・ナナ編『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房：27-46
勝山稔(2010)「近代日本における白話小説の翻訳文体について——「三言」の事例を中心に」中村春作等編『続「訓読」論」東アジア漢文世界の形成』勉誠出版：339-365
川上陽介(2004)「『照世盃』の施訓者について」『京都大学國文學論叢』(11)：23-38
——(2016)「「訳解笑林広記」全注釈（一)」『富山県立大学紀要』(26)： 55-32
川島優子(2009)「江戸時代における白話小説の読まれ方:鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵「金瓶梅」を中心として」『中国中世文学研究』(56)：59-79

——(2010)「白話小説はどう読まれたか——江戸時代の音読、和訳、訓読をめぐって」中村春作等編『「続「訓読」論」東アジア漢文世界の形成』勉誠出版：311-338
神田寿美子(1961)「現代東京語の可能表現について」『日本文學(東京女子大学)』(16)：70-84
齋藤文俊(2011)『漢文訓読と近代日本語の形成』勉誠書院
佐藤武義編著(1995)『概説日本語の歴史』朝倉書店
佐藤武義等編(2014)『日本語大事典(上)』朝倉書店
沢田美代子(1964)「近松における助詞カ・ヤについて：その文語性の問題」『大阪府立大学紀要』(12)：259-267
渋谷勝己(1986)「可能表現の発展・素描」『日本学報』(5)：101-136
高島俊男(1991)『水滸伝と日本人—江戸から昭和まで』大修館書店
築島裕(1965)『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』東京大學出版會
築島裕編(2007～2009)『訓點語彙集成』汲古書院
鷭岡昭夫(1967)「江戸語・東京語における可能表現の変遷について」『言語と文芸』(9)：54-63
徳田武(1976a)「解説」清田儋叟施訓、徳田武解説『照世盃：附・中世二伝奇』ゆまに書房：449-473
——(1976b)「清田儋叟年譜」清田儋叟施訓、徳田武解説(1976)『照世盃：附・中世二伝奇』ゆまに書房：474-494
中村幸彦(1968)「翻訳・註釈・翻案」水田紀久、頼惟勤編『中国文化叢書9　日本漢学』大修館書店：272-284
——(1973)「解説」『日本古典文学全集　英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』小学館：5-12
——(1984a)「肉蒲団」日本古典文学大辞典編集委員会編集『日本古典文学大辞典　第四巻』岩波書店：584
——(1984b)「通俗物雑談—近世翻訳小説について—」『近世比較文学攷』(中村幸彦著述集・第七巻)中央公論社：278-313
——(1985a)「近世語彙の資料について」鈴木丹士郎編『近世語』有精堂出版：201-211
中村幸彦編(1985b)『近世白話小説翻訳集　第五巻』汲古書院
——(1985c)『近世白話小説翻訳集(第四巻)』汲古書院
——(1987)『近世白話小説翻訳集(第六巻)』汲古書院
中村幸彦・野村貴次・麻生磯次校注(1965)『近世随想集』岩波書店

長澤規則也解題(1972)『唐話辭書類集　第6集』汲古書院
——(1972)『唐話辭書類集　第7集』汲古書院
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000～2002)『日本国語大辞典　第二版』小学館
原口裕(1985)「可能表現「スルコトガデキル」の定着」『国語と国文学』62(5)：56-66
春日和男(1968)『存在詞に関する研究』風間書房
彦坂佳宣(1988)「近世語の言語景観小見——近畿・東海方言の地理的状況をめぐり」『論究日本文学』(51)：1-11
飛田良文・遠藤好英等編(2007)『日本語学研究事典』明治書院
檜垣里美(1976)「岡白駒年譜」岡白駒・沢田一斎施訓、尾形仂解説『小説三言』ゆまに書房：894-917
藤井史果(2016)『噺本と近世文芸—表記・表現から作り手に迫る』笠間書院
武藤禎夫・岡雅彦編(1976)『噺本大系　第八巻』東京堂出版
堀口和吉(1992)「助辞「～的」の受容」天理大學國語國文學會編『山辺道』第36号：59-76
前田勇編(1964)『近世上方語辞典』東京堂出版
——(1974)『江戸語大辞典』講談社
前田桂子(2015)「噺本における程度強調表現「とんだ」について」『島大国文』(35)：1-22
前田富祺(1983)「できる(出来る)　いでく　でくる　でける　でかす　できもの」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙第11巻　語誌Ⅲ』明治書院：1-5
丸井貴史(2014)「白話小説訓読考-「和刻三言」の場合」『読本研究新集』(6)：71-87
村上雅孝 (2014)「訓訳と沢田一斎」『国語学研究』(53)：150-136
——(2015)「岡白駒と訓訳」『国語学研究』(54)：244-230
——(2017)「訓訳いわゆる左ルビをめぐって」『日本近代語研究』(6)：87-106
本居宣長著、今西祐一郎校注(2008)『古今集遠鏡』平凡社
柳田征司(2010)『日本語の歴史1 方言の東西対立』武蔵野書院
湯沢幸吉郎(1982)『徳川時代言語の研究』風間書房
李長波(2006)「近世、近代における「～的」の文体史的考察」『Dynamis:ことばと文化』(10)：68-89
渡部温訂正(1977)『標註訂正康熙字典』株式会社講談社

初出一覧

序章

「对近世汉文训读史若干问题的再思考：跨领域视野下的“训读”与“训译”」『日语教育与日本学研究：大学日语教育研究国际研讨会论文集（2018)』、pp.356-362、2019

第１章

書き下ろし

第２章

「終助詞から見る近世の白話小説訓訳本の特徴」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第二十二輯、pp.111-126、2019

「近世の白話小説訓訳本における左訓の性格」『東アジア日本語教育・日本文化研究』第二十三輯、pp.1-18、2020

第３章

書き下ろし

第４章

「近世の白話小説訓訳本に見られる文末表現「ジャ」について」『NAGOYA LINGUISTICS(名古屋言語研究)』第十四号、pp.13-26、2020

第５章

「近世の白話小説訓訳本に見られる終助詞「ヨ」について」『名古屋大学人文学フォーラム』第３号、pp.337-352、2020

終章

書き下ろし

※　既に発表済みのものに関しては、調査対象・調査項目を追加したほか、大幅な加筆・修正を行っている。